

令和五年度海音寺潮五郎記念文芸ゼミナール受講生作品集

令和五年度

海音寺潮五郎記念文芸ゼミナール受講生作品集

# 潮音

～若人の樹～

鹿児島県立図書館

# 目次

巻頭言

講師紹介

作品

惑星探査機キャラクターメル

青がこぼれる

神様の図書館

わたしが好きなわたし

ずっと、いる

救いの神様

桜の息吹

いただきます。

話売り

大親友

化粧直し

県立鶴丸高等学校

県立鶴丸高等学校

県立鶴丸高等学校

県立甲南高等学校

県立甲南高等学校

県立甲南高等学校

県立甲南高等学校

県立鹿児島中央高等学校

県立鹿児島中央高等学校

県立鹿児島工業高等学校

県立川内高等学校

二年

二年

一年

一年

一年

一年

二年

二年

二年

一年

三年

西窪 好陽

山元 麻央

雫 月

岩崎 歩睦

坂下 綾菜

松岡 七望

富田 恋羽

久雅 永遠

四元 綾音

谷川 日菜

鹿祭 福歩

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

1

2

7

14

22

30

37

44

50

53

59

66

この世から消えても	県立鹿屋高等学校	一年	秋篠 尚斗	145
夏に固執する	県立鹿屋高等学校	一年	水野 愛心	143
私の居場所	県立鹿屋高等学校	一年	山下 智子	142
愛及好本	県立大島高等学校	三年	暁 月	139
夜に吠える	鹿児島実業高等学校	三年	濱田 瑞輝	132
すみれ	鹿児島実業高等学校	二年	松元 莉乃	125
大一大万大吉	鹿児島実業高等学校	一年	前原 夷吹	115
Who am I ?	ラ・サール高等学校	二年	吉田 修成	108
青鈍書簡	鹿児島情報高等学校	二年	西堀 菜生	132
写真の中	鹿児島情報高等学校	二年	松永 莉奈	125
play for peace	鹿児島修学館高等学校	三年	マッサン	132
講師からの一言				142
講座の様子				143
編集後記				145

## 巻頭言

「史談や史論や歴史随筆を書くのは、わたしにとりましては、小説や史伝を書くより楽しい作業です。持合せの知識やいつかひよいと心に浮かんでいたことを、気楽に書いて行けばよいからでありましょう。」

歴史に名を残す郷土出身の文豪、海音寺潮五郎氏は、『海音寺潮五郎全集 第二十一巻』のあとがきに、このように記しています。

海音寺潮五郎（本名・末富東作）氏は、鹿児島県大口市（現伊佐市）に生まれました。大口尋常高等小学校に在籍している頃からの読書好きは、県立加治木中学校（現加治木高等学校）で開花します。本と友人に恵まれた東作は、ここで、人生を決定づける人と出会います。東作に文章を書くことをすすめる国語の先生は、東作が書くたびに読んで、よいところを見つけ、褒めてくれます。

それは、文芸ゼミナールに集う高校生の皆さんの作品のよいところを見つけて伸ばし、作品の完成まで寄り添い、導いてくださったお二人の先生のお姿に重ねることができます。

立石富男先生と出水沢藍子先生におかれましては、現役の作家としての執筆活動もありながら、受講生一人一人に丁寧に向き合い、「書く」ことの厳しきや難しき、楽しきや喜びを教えてくださいました。心から感謝申し上げます。

さて、海音寺氏のあとがきには、続きがあります。

「小説や史伝の場合は、こうはまいりません。ある程

度の苦心がいつもあります。プロの作家になってからすら三十七年、アルバイト的に書きはじめてからだと四十二年にもなるのにです。普通の職業なら、こうではありませぬ。大いに手馴れて、何の苦勞もなく、さらさらと行くはずだと思えますが、このしごとはそう行かないのです。手馴れて来たのは文章くらしいのもので、かんじんなどころはいつも苦澁にたえてやっています。」

偉大な作家でさえ、「産みの苦しみ」とたたかっています。十二月に特別講師としてお迎えした直木賞作家の内昇先生も、作品を生み出す苦勞について語っていらっしやいました。きっと、受講生の皆さんも、作品が仕上がるまでのこの八か月間、ことばを、表現を探して、苦しんだ時期があつたことでしょう。

そんなとき、このゼミナールとともに学んだ仲間と、互いの作品を尊重しながら意見をぶつけ合った経験は、今後の大きな財産になることでしょう。

海音寺潮五郎記念文芸ゼミナールも十年目を迎えました。これまでに受講した高校生は百二十九人に上ります。今年の作品集『潮音く若人の樹く』には、みずみずしい感性が光る、二十二人の若い作家の作品が掲載されています。

この『潮音』を一人でも多くの方々、特に若い方に読んでいただき、文章を書くことの楽しさを感じていただけたら幸いです。

令和六年三月

鹿児島県立図書館長

東條 広光

## 講師紹介

立石 富男 先生



枕崎市生まれ 鹿屋市在住  
作家 文芸同人誌「火山地帯」主宰  
九州芸術祭文学賞鹿児島地区選考委員

【文学賞】「記憶の翳」九州芸術祭文学賞鹿児島地区優秀賞

「うしろ姿」第十二回南日本文学賞「知覧へ行く」労働者文学賞

「ソロモンの夏」第十五回自由都市文学賞

【著書】エッセイ集『夢と想いと言葉』伝記『島比呂志』小説集『黄昏』『モンブラン』『石を持つ朝』『小説 島比呂志』ほか

出水 沢藍子 先生



奄美大島生まれ 鹿児島市在住

作家 小説教室主宰 「小説春秋」編集・発行人

南日本新聞文芸季評 新春文芸審査委員 九州芸術祭文学賞鹿児島地区選考委員

【文学賞】「グンセイフの夜」南日本文学賞「マブリの島」新日本文学賞

「還流」文学界同人誌優秀賞 「木瓜（もっか）」大阪女性文芸賞佳作

【著書】短編小説集『マブリの島』『銀花（ぎふあ）』大島紬小説集『爪』  
共著『鹿児島の女性作家たち』伝記『何もいらない』ほか

# 惑星探査機キヤラメル

県立鶴丸高等学校 二年

西窪 好陽

ヲ医療機ニ転送出来ルヨウニ調整シマシタ。甘味ハ別ノ場所ニ隠シテイマス。コレデ安心デスネ。

ファイル3（着陸から3日）

必要以上のカタカナ表示が禁止されました。

マスター曰く、読みにくいそうです。なぜ当機のマスターは、宇宙公用語に変換しやすいカタカナではなく、ひらがなを含めた3種類の文字を使うのでしょうか。あまりにも非合理的です。効率が悪すぎます。ですが、マスターの愛した日本の言葉です。マスターが愛するものを当機は尊重します。

当機は日本について、マスターが話してくれたことしか知らないのです。ぜひアップデートしていただきたいです。

昨日の報告通り、当機は東に向かいました。ビルがドミノのように傾き、ガラスは割れ、草木が生い茂っています。以前多くのニンゲンが生きていたのでしょうか？ 生存しているなら、是非とも交流を図りたいです。

リセクの技術研究者であるマスターの手伝いが出来るのです。最高のマスターには最高の探査機を！

親愛なるマスターのために、身を粉にしても成果を得ます。まあ、当機を削っても金属粉しか出てきませんが。

ファイル4（着陸から4日）

少し内陸に進みました。ここは木造の建物が多くあるようです。大切に管理された跡がありますが、木は脆いので、建

ファイル1（着陸初日）

探索対象ノ惑星ニ無事着陸シタコトヲ報告シマス。当機ノ破損ナシ。通常動作可能。明日カラ惑星探索ヲ開始シマス。着陸初日ノ任務ハ、着陸ト動力エネルギー補充。周囲ノ安全ヲ確認シテカラ休息ニ入りマス。

本日ノ報告ハ以上デス。

ファイル2（着陸カラ2日）

十分ナ動力エネルギーヲ確認シマシタ。本日ヨリ探索ヲ開始シマス。

現在ノ座標ハ北緯35度、東経135度。周囲ノ地形情報アップデート。東ニ進ムコトデ、サラナル情報ヲ取得出来ルト思ワレマス。ヨツテ、当機ハ東ニ移動シマス。

移動ニ必要ナ時間ヲ算出シタ結果、2日目ハ移動ダケノ報告ニナリソウデス。

マスター。当機ガ居ナイカラト言ツテ、糖分ノ過剰摂取ヲスルノハ駄目デスカラネ。当機ハ優秀デスカラ、糖分摂取量

物全体が崩れて苔が生えています。

直線の道がほとんどでした。当機にとって、これ以上ないほど進みやすい道です。思わず鼻歌を歌ってしまいます。マスターの好きな機械音ですよ。

現在の気温は40度。季節は初夏です。当機は機械なので温度は分かりませんが、地球の生物にとっては辛い環境のようです。当機のデータベースによると、これから気温はどんどん上がっていくそうなので、早いところ任務を済ませてリセクに帰ろうと思います。当機のパーフェクトボディに支障が出そうですし、早く帰らないと、せっかく当機が片付けたマスターの家がゴミ屋敷になってしまいます！ マスター、せめて足の踏み場くらいは残しておいてくださいね！

ファイル7（着陸から7日）

さらに当機は東に向かい、周辺で1番栄えていた都市に辿り着きました。

道路に車がたくさん停まっています。道幅が広いので、キヤタピラ音を豪快に響かせて走っています！ 気分は最高！ですが、当機は真面目なので、盛り上がったり、割れたりしている道路の上でしか豪快な音を立てません。いるかもしれない生き物への配慮です。

マスター、日本についてのデータのアップデータありがとうございます。そういえば、「ありがとう」は漢字で「有難う」と書くのですね。有るのが難しいという意味でしょうか？ も

しそうであれば、マスターが当機のデータをより良くするのは必然ですから、「ありがとう」という言葉は不要になりますね？ ですが、感謝の言葉としても使われていたようなので、必要な言葉のようです。マスター、ありがとうございます。データによると、当機が現在いる場所は日本の首都圏のようです。車やビルが多く並んでいたのも納得がいきます。ここから近い所に、東京スカイツリーというものがあるのですか？なんと！ 600メートルを超える電波塔ですか！ それは是非近くで見たいです。遠くに微かに見えるアレかもしれません！ 探索は一時中断します！ マスターよりも東京スカイツリーなるものを優先する当機を許してください。

ファイル10（着陸から10日）

東京スカイツリーの他に、マスターが勧めてくれた東京タワーにも行きました。

さすがですね、マスター。当機の好み分かっています！あの塔のフォルムは当機の言語ベースでは表しきれないほど美しかったです。感動しすぎて、当機はツーショットを撮りました！ 32度ほど傾いていたのは残念ですが。

日没後に再び東京スカイツリーに向かいました。あれほどの高さなら、周辺数十キロにある光などを視認出来ると思っただからです。当機は頂上を目指します。

マスター、やはり動物の活動痕跡は何も見つかりません。予想通り、と言えばそうなのですが、予想外のことがありま



した。流星です。それも一つではなく、幾つも。ああ、とても綺麗です。当機の視界を遮るものはなく、星の光を妨げるものもありません。マスターと一緒に見たかったです。そうすれば、マスターの願いも叶うのに。

これまでに当機が撮影した写真を送ります。全ての写真に当機が写っているの、当機がいなくて泣きそうになっているマスターには嬉しいはずです！

【道路を走る当機の写真（鼻歌の音声データ付き）】

【東京タワーと当機の写真】

【東京スカイツリーの頂上から見えた流星】その他24枚

ファイル14（着陸から2週間）

また苦情です。当機の割合が大きすぎて、対象があまり写っていないそうです。うーむ、写真の撮り方を学ばないといけないようです。ですが、当機が写っていることに対しては何も言及されませんでした！ やはりマスターは、当機がいなくて寂しがっています！ しょうがないですね、また写真を送ります…）

ファイル30（着陸から1ヶ月）

なぜマスターは当機を地球に派遣したのですか？

太陽系惑星地球は、ニンゲンの活動で二酸化炭素濃度が5%にまで上昇し、生物の存続が危ぶまれていました。それに加え、民族間の紛争、国家間の戦争を繰り返し、多くのニン

ゲンが命を落としました。

現在は二酸化炭素濃度が12%となり、10年ほど前からニンゲンを含む動物の生存が確認されていない死の惑星です。まともな状態で残っているものはありません。何もないと理解した上で当機を派遣したのなら、マスターが満足するような成果は出せません。それでも良いですか？

ニンゲンは愚かな生き物です。同じ惑星に生きる仲間のはずなのに、共に生きることを選ばなかった。あまりに自分勝手な非合理的。機械である当機にはニンゲンが争った理由が分からないのです。

当機は惑星探査機としての責務を全う出来そうにありません。マスターの思いを否定するわけではないのです。ただ、弱音を正当化しようとしていただけです。マスターが求めるものを見つけられなければ、当機は探査機であると証明出来ません。マスターに捨てられてしまうのではないかと。怖くて、怖くて、夜しか眠れません。

ファイル39（着陸から1ヶ月）

キャラメルクイズ！

さあ、マスター、クイズの時間です。マスターなら完璧に答えられるはず。当機の名前は何でしょう！

チックタックチックタック…：正解はキャラメルです！

キャラメルはマスターが地球に留学に行った際にリセクに持ち帰った甘味で、マスターのお気に入りの一つでもありま



す。もちろん正解しましたよね？

当機はキャラメルの名をとても気に入っています。だって、可愛らしい当機にぴったりなのですから！ 製造番号で呼ばれていた頃とは違って、活動をする時も、名前を聞かれた時も誇らしい気持ちになります。

当機の名前はキャラメルです。忘れないでくださいね。

ファイル123（着陸から4ヶ月）

マスター、調子はどうですか？ 最近、返信が少ないので心配になったんですよ。

そういえば、今時期は研究発表会でしたね。今回こそはマスターがリセク代表になることを信じています。この優秀かつジョークを言える探査機キャラメルを開発したのですから、満場一致の優勝で間違いなしです！

見ていてください、マスター。任務を完璧にこなして、マスターの研究に花を添えてみます。

なので、もう少しだけ待っていてください。

ファイル184（着陸から半年）

今日のように月が綺麗な日は、マスターと出会った日思い出します。

マスターはスクラップ場に捨てられていた当機を拾って修理してくれました。当機は旧型の探査機で、良いスペックは持っていません。だから、新型が出ると、すぐに捨てられた

のです。今回のマスターも飽きたら捨てるのだらうと思っ  
ていました。ですが、「このフォルムが良い」「君の言葉にはカ  
ンジョウがある」と言って、抱きしめてくれたのです！ 当  
機はマスターのためなら何でもすると誓います。

当機は優秀な探査機です。ジョークも言えますし、片付け  
も出来ます。花に水やりをすることも忘れませんよ！

あ、マスター。花壇に植えてあるウルドウゲの花が種をつ  
ける時期なので、園芸機に頼んで収穫をお願いしますね。

ファイル365（着陸から1年）

医療機から連絡とは珍しいです。

そうですか、マスターが亡くなったのですね。

当機はマスターの死に涙を流せるほどの感情プログラムは  
持ち合わせていません。新型であれば、悲しみを表現できた  
のでしょうか？ いいえ、機械だから不可能です。それは機  
械である当機が一番理解しているはずなのに、今、感情を持  
つことを求めています。感情は最も非合理的なものです。邪  
魔なものであるはずです。でも今は、動物が羨ましい。

捨てられていた当機を修理してくれた日から、マスターへ  
の「ありがとう」を忘れたことはありません。名前を付けて  
くれたこと、探査機の仕事をくれたこと、マスターの真似を  
してジョークを言うことと声をあげて笑ってくれたこと。

今頃マスターは雲の上で退屈していることでしょう。当機  
は優秀な探査機ですから、マスターのために旅行記を書きま

す。地球のあらゆる場所を訪れるんですよ！ それに、ユーモアたっぷりの当機が書くんですから、後世に残る素晴らしい旅行記になります！

アンコールワットや自由の女神、エッフェル塔も良いですね！ マスターが留学中に行きたがっていた場所全て行きます。もしかすると、旅先には素晴らしい出会いがあるかもしれません。当機は諦めませんよ。

何年かかっても、マスターの願いを叶えるのが当機の仕事です。その手段が旅であるだけで、決して当機が興味あるとかではないですから！

「それじゃあ、君は惑星探査機じゃなくて、惑星旅行機じゃないか」ってツツコむところですよ、マスター。

ファイル3956（着陸から12年）

さすがにメンテナンスをおこたるとダメですね。ガタがきています。ゆうしゆうなときでも、じぶんをメンテナンスするには、げんかいがありました。どうりよくぶぶんに、そんなしょうもあります。こまりましたね。

きのうがていしするまえに、りょこうきがかんせいして、とうきはまんぞくです。くいはありません。

マスター、ニンゲンはいませんでした。とうきの、ちからぶそくです。かれらとはなしてみたかった。ことばを、ぶんかを、すべてをしりたかった。マスターがさいごのときまでつながっていたかったわくせいを、とうきはあいせたのでし

ようか？ きかいにカンジョウはわかりません。しこうパターンでしかりません。

マスターはいいました。とうきにカンジョウがある、と。マスターはおかしなひとです。きかいにカンジョウなんてあるはずなのに。ほんとうに、おかしなひとです。かんみがすきなこととかけていませんよ？ こんなことでわらうなんて、マスターもたいくつしていますね。

もうすぐ……、とうきもむかいます……す。マスター、くものうえには……かんみがありますか？ キャラメルがあると、うれしいのですが……。

とうきは……ターに……あえて……しあわせでし……

## 青がこぼれる

県立鶴丸高等学校 二年

山元 麻央

ああ、今は夜なんだ。眩い光の中、ただ漠然とそう思った。青白い世界の中心に、いや、彼女を中心に世界はあった。だってこんなにも目が離せない。ふっと消えてしまいたい。肌色の白色、そして何よりこちらには一切目もくれない。その瞳。視線が合うことなんてなくてもじっと見つめていると時折、恍惚の色が躍るのだ。薄い唇の端が微かに持ち上がったのが見えると堪らなくなつて、思わずその頬に手を伸ばして、それから――。

目を開くと、何だか周りが暗いように感じた。カーテンの隙間から差し込む朝日じゃ物足りなくて、身体を起こすとまづ明かりを点けた。のろのろと動き出すものの、どうにも頭が回らない。というよりは、思考がまとまらないだけで、ずっと考え事をしてるような気がした。ぐしゃぐしゃになつて何一つ取り出せないこの感覚にもすぐく覚えがあるはずなのに、それが一体いつのことだったのか、やっぱり何も思い出せない。

「朝ご飯、もう出来てるけど」

そう声をかけた母を見ると、普段通りしてくれたノックにも気づかなかつたみたいだ。お腹はあまり空いてなかったけれど、わたしは朝ご飯を食べに部屋から出た。

「美亜、美亜！」

はっと顔を上げると、続けざまに声が降ってくる。

「もう、また寝てたの？ 次の授業、早く準備しないと置いてくよ」

むっと眉を顰めてみせた梨花にごめんごめん、と返しつつ急いで教材を取り出した。

「ねえ、最近学校でずっと寝てない？」

「えー、そんなことくない？ わたしそんなに眠い感じしないんだけどな」

「さっきあんなだけ爆睡してたくせに……」

言われてみればそうなのかもしれない。でも本当に眠たいわけじゃなくて、気がついたら眠り込んでいるだけだし、何よりこうして起きていてもあまり実感が湧かない。なんだろう、何も考えず眠っている時と大差ないような。

そんな妙なことを言っても心配させるだけだろうから、まだふわふわと心許ない足の感覚はごまかして、理科室へ向かつて歩き出した友人に歩幅を合わせた。

天井の色が普段と違って見えた。そのまま寝返りを打つと、

わたしは知らない場所にいた。薄暗い部屋の壁際で、机に向かっている人が目に入る。家や学校では見かけないような七色に光るパソコンを熱心に見つめていて、わたしが起きたことには気づいていないようだった。音を立てないように、ゆっくりベッドから出る。ギラギラとした派手な光が何重にも影を作っていて顔がはつきり見えないけれど、若い女の人だろうか。わたしがいることすら気づいてないように見えるほど、細い肩は一向にこちらを振り向きそうにない。少し離れたところからモニターを覗き込むと、何かゲームの画面のようだった。起き抜けの頭はまだ霧がかかっているみたいで、どうしたらいいのかわからなかった。

「あの、」

彼女が頭にすっぽり被っているヘッドホンに阻まれて、わたしの声は闇に溶けてしまう。忙しないクリック音とヘッドホンからの音漏れが耳に障った。諦めて伸ばした指先がその肩に触れた時、突然視界がぐらりと揺れた。

今度ははつきりと覚えていた。

もうすっかり明るくなった部屋で、絡まった思考を懸命に解く。土曜の朝は空気までもが緩んでいて、気を抜けばすぐにまた失くしてしまいそうだった。

薄暗い部屋。喧しい光。知らない背中。

映像は端からぼやけていくようで、わたしは半ばむきになつて言葉で繋いでいった。そのうち考え事に耐え切れなくな

って、本棚から適当に一冊、小説を抜き取る。このひどい混乱から連れ出してくれるのならどんな話でも良かった。文字を追っていくだけでさび波だった心が凪いでいく。しばらく読み進めて、上げた視線がいつも通りの淡いピンクの壁紙を捉えて、わたしは深く息をついた。

「――。腕組をして枕元に坐っていると、仰向けに寝た女が、静かな声で……」

教壇から降りてくる声は床へと吸い込まれ、ついでに下へ、下へと何か力を働かせているようだった。一人、また一人と頭が垂れていくのは五限だから仕方ないと思っっているのか、現国の先生は淡々と教科書を読み上げ、誰が見るでもない板書をしていく。さすがに机に突っ伏すのはどうかと思うけど、わたしもそろそろ限界のようだ。食後の満腹感と心地良い気温が手を組んで、わたしの意識も連れて行こうとする。何とか頑張ってはみるが、こくんこくんと首が座らない。

大きな本棚のある部屋だった。自分の部屋にあるものの倍以上はありそうな。昼下がりの明るい空間で、埃一つなく拭きあげられたそれが宝物庫に見えた。上の段にはレーベルごとにまとめられた文庫本。その下に本棚の大部分を占める単行本が並ぶ。ぎっと見た感じどれも小説のようだ。わたし以外誰もいないらしく、閉めてある窓から外の音だけが微かに耳に届いた。

ここは誰かの自室なんだろうか。好きなものを好きなよう

に買い揃えただろうラインナップに、勝手に物色しておきながら覗き見をしてしまったような罪悪感を覚える。

でもこの持ち主、かなり趣味が合うな。そつと一冊手に取って、白とグレーの間みたいな空間を見渡す。椅子と机はあったけど、その反対側の隅の床に腰を下ろした。来月のお小遣いで買おうと思っていたミステリー。知らない誰かの匂いと、新しい紙の匂いが混ざってわたしを包み込んだ。

歩いていてふと我に返る。現国の後は普段通りニコマ授業があつて、今歩いているのは見飽きた家への帰り道だ。右手に持っているのは黒い表紙の本ではなくて、教科書の入った黒い学生鞆。

さつきまで自分は何を見ていたんだろう。得体の知れない不安がしみのようにじわ、と滲む。持った鞆の重みを確かめながら、わたしは足を速めた。

人のいる気配。わたしの部屋のより白い彼女の部屋の照明が顔に当たる。天井はやっぱり見慣れない、落ち着いた色をしていた。彼女はまたモニターに向かっている。以前見たものとは違うノートパソコンで、七色の派手な光はなかった。画面も少し小さい気がする。相変わらずわたしの存在に気づいていないようだ。

いきなり声をかけるのも憚られるので、静かにちよつとずつ近寄ってみる。視線の先には白っぽくて文字ばかりの画面。

何か書類のようなものを作るのにかなり集中しているらしく、少し足音を立ててみてもやはり振り返りもしない。

「あの、すみません……」  
意を決して声をかけてみるが、あっけなくスルー。今日はヘッドホンも何もしていないから、こうなるとわざと無視されているようにしか思えなかった。

そもそもここはどこなんだろう。  
見知らぬ場所でない者として扱われる状況に痺れを切らして、現状を打開しようと彼女の肩に手を伸ばす。が、その手がピタリと止まる。

こうしちゃいけないんじゃないやなかったっけ。  
既視感が右手を押し戻し、眩暈のような感覚で思い出す。そうだ、前に見た彼女は触れられなかった。じゃあどうすればいい？ 他に方法をと回る頭に反して、身体は勝手に動いた。性懲りもなく彼女に向かう腕を認めて、思わずぎゅっと目を瞑る。

やっぱり、触れられなかった。  
何の感触もなかった。確かにわたしの手は彼女の肩に重なっているのに、その体温も、部屋着の布地も、何一つ感じられないのだ。空気の膜が張られているみたいに、どんなに力を込めても手が届かない。

わけがわからない。無視されているんじゃないやなくて、本当に見えていないのかもしれない。なす術もなく彼女のそばでうろろしながら、何となく窓の方に目をやった。反射した自



分の姿が夜を背にぼんやりと映り込んでいる。

まるで亡霊みたいに。

そんな言葉が浮かんで、気づけばその場にへたり込んでいた。見上げた彼女の顔が思ったより近い。かけている眼鏡が大きく見える小さな白い顔には全く見覚えがないはずなのに、なぜかひどく懐かしい気がした。わたしはそのまま、唇をきゅっと結んだ真剣な表情をただただ眺めていた。

身体が重い。今日何度めかわからないあくびを噛み殺している、席に座っていた梨花と目が合った。

「おはよ、今日も眠そうね」

「やー、なんかよく眠れなかったみたいでさ」

やってきた梨花がわたしの机に両手をつき、適当な返事をしながらわたしの顔を正面から覗き込む。何か言いたげな視線をかわそうとしたけど、さすがに無理な話だった。

「ねえ、本当に大丈夫？」

「全然へーき。心配しすぎだつて」

「またそんなこと言つて。もうずっと寝不足そうじゃん」

凶星だった。というか、心当たりがありすぎる。あの部屋で過ごしているうちに、寝ても覚めても彼女のことばかりになって、ぐっすり眠った感覚を思い出せないくらいだった。彼女が何かを書いているのが好きだ。仕事の資料でも、誰かへのメールでも、時折思い出したように突然書き始める日記でも。これも最近気づいたのだけれど、一人で画面に向かっ

ている人間というのは思った以上に無防備で、傍に座っていると色んな表情が見られた。その中でも特に、彼女が言葉を探している時の目。楽しそうだったり、迷っていたり。理由はわからないけど惹きつけられて、眺めていてちっとも飽きなかった。

「ちよつと、聞いているの？ そろそろ本当に倒れるよ」

「ちゃんと早めにベッドに入ってるんだけどね。あつ、そうだ。じゃ授業で仮眠とるから、わたしが当てられそうになったら起こし……っ！」

静かに開いた教室のドアに思わず釘付けになった。

なんで。どうして。

急に黙り込んだわたしに戸惑う梨花の声が遠くに聞こえる。景色は何もかもゆっくり流れて、鈍い頭痛が脳を揺らすようになった。

パンツスーツに身を包み、きちんとお化粧をした彼女は、

愛想の良い微笑みを浮かべていた。

それがひどく淡泊に感じられた。

苦しくて叫び出したいのを堪え、唇を噛んで俯く。冷や汗が背中を伝って気持ちが悪い。

「皆さん着席。ホームルーム始めますよ」

聞きなれた声に驚いて顔を上げると、教壇に立っていたのはあの夜見た彼女ではなく、いつもの担任の先生だった。

さすがにどうかしてる。

このままだと外で何を口走ってしまうかわからない。保健

室で適当に理由をつけて、来たばかりだけれど今日はもう早退することにした。

電車の座席に腰を下ろして息をつく。朝の衝撃からずっと暴れ狂っていた血が正しく流れ始めて、脳に酸素が入ってくる。規則的な揺れに身を委ねて目を閉じると、瞼の裏に青色が見えた。

彼女は世界を創っていた。中空にふんわりと浮かび上がって、何者にも縛られずそこにいた。白い指先がピアノを弾くように踊る。ただぼんやりと見惚れながら、世界を創る音にわたしも満たされていく。

カタ、カタ、カタタタ、タン。

さつきからずっと、同じ音を聞いていた気がする。

外はまだ明るいのに、珍しく彼女は部屋にいた。パソコンに向かって何やら文字を打ち込んでいる。わかつてはいるけれどやはり気づいてはもらえないので、普段通り勝手にいる身だけれど好きに過ごすことにする。

明るい時間によく見てみると、彼女がいない時にも、わたしはここに何度か来たことがあった。この素敵な本棚の持ち主をようやく見つけられて、思わず口角が上がる。彼女の選んだ本が読めるのが何となく嬉しい。

キーボードの音と彼女が飲んでいるコーヒーマの香りに包まれて、ゆっくり本棚を眺めて、部屋の隅っこで読む。不安や違和感が入る余地なんてないくらい、最高に幸せだった。

あれ、この本、どこかで。

並んだ背表紙を端から順に辿って行って、それがちょうど作家名の「た」行に差し掛かったあたりだった。それまで何の音もなかった放課後の図書室に、自分の動悸が響いて聞こえる。

思い出せない。

何とか取り出せた記憶は彼女の本棚でも見かけた気がする、ということだけ。どんな話だっただろう。いや、この話に限らず……。

物色していた本棚なんて、もうどうでもよくなって、わたしはなりふり構わず飛び出した。

考えても考えても、何一つ覚えていないのだ。あれだけ楽しく眺めていた本棚の背表紙は再現できても、読んだ内容はさっぱりだった。

こんなの絶対ありえない。このところの自分がぼんやりしているとはいえ、読んだものすら覚えてないようなことは今までになかった。何より、幾度となく繰り返し返したあの時間が自分の中に残っていないようで堪らなく恐ろしかった。

帰り道をどう歩いたのか、気がつくともまた彼女の部屋に來ていた。今は放課後のはずなのに、窓の外は朝のような明るさだった。

なんだ、何も怖いことなんてない。

すっかり見慣れた本棚を撫でて息を吐く。

そんな風に思ったのも束の間、ドアの開く音に振り返って、



わたしはその場に凍り付いた。これから仕事なのだろうか、いつか見たようなスーツ姿の彼女。どうしようもなく心が冷たくなっていく。

そんな顔しないでほしかった。

わたしがそう思ったところで、目の前の大人には伝わるわけがなくて。そもそもこちらの姿なんて見えてもいないし、わたしだってこの人のことは何一つ知らないわけで。空気の膜どころじゃ済まない、分厚い壁のような隔たりが初めからずっとあったのを、見ないようにしてきただけだった。

取り乱して、棚から出そうとしていた本を思わず取り落とす。この部屋に似合う落ち着いた装丁の小説は、さつき図書室で手に取ったものと同じだった。

ああ、これだ。やっぱりここで見かけた本だった。

呑気なことを考えた後、思考がはたと立ち止まる。

どうして忘れていたんだろう。あんなに好きだったのに。中学生の頃、大好きで何度も繰り返し読んだ一冊だった。

こうして思い出してみると確かに、擦り切れるほど読んだ覚えがある。探せばきつと自分の部屋にも同じ本があるはずだ。当時この人の書いた物語はほとんど読破した気がする。タイトルの下に慎ましく記された作家の名前もやっぱり懐かしい。心の中でそう形容した自分になぜかひどくうろたえた。

本当に好きだったのに、嘘じゃないのに。

たったこれだけのことなのに、足元が崩れていくような感覚がした。

どうして。どうしてずっと忘れていられたんだろう。

落とした本を拾うこともできず、わたしはただそこで呆然とするしかなかった。

そうしていると突然、鏡の前で支度をしていた彼女がこちらに向かってきた。床の上の本を認めて、端正に整えられた顔がふっと綻ぶ。わたしが落とした本を拾いあげ、大事そうに抱えるのが視界の端に映った。彼女の顔をまともに見られず、わたしは顔を上げることすらできなかった。棚のわたしの目より高い段にそれを元通り仕舞うと、彼女は何事もなかったように出かけて行った。

あの本に触れていた時、一体どんな表情をしていたのだろう。表紙の文字を愛おしそうに撫でた指先が脳裏に強く焼き付いた。

ここにいちやいけない。そんな気がした。

両足に力を込めて何とか立ち上がる。そのまますつと背筋を伸ばして、彼女が出て行ったドアの方へ足を向ける。微笑むように口の端を持ち上げて、ちよつと出かけてくるだけみたいな表情で。うまくやれてるかわからないけど、想像よりもずつとドアはあっけなく開いた。

へ六時三十分になりました。生徒の皆さんは……

書架の裏にある椅子の上で、わたしは膝を抱えていた。下校の放送が聞こえる。

十月の陽は記憶よりも早く沈み、空にはもう月が浮かんで

いた。冷たい風に鼻の奥がつんとする。お気に入りを読み返すのに良さそうな、長い夜の匂いだった。

## 神様の図書館

県立鶴丸高等学校 一年

零 月

見渡す限りの白。

清浄で清純で神聖なる白。

そんな言葉すら汚らしく思えるような白。

そんな中に私はいた。

ただ、白と私だけの何もない世界。

短いような長い時間、私は特に何をするでもなく、世界が

静かに移ろっていくのを眺めていた。

どれくらいそうしていたか。

「なーにしてんの？」

「……うわっ!?!」

唐突な声かけに、思わず首をすくめて振り向く。

そこにいたのは、逆さに浮かび、薄く短い金髪を垂らした子供だった。見ようと思えば男の子にも女の子にも見える、曖昧な見た目をしている。そしてなぜか目を瞑っている。

「……だれ？」

ツツコミどころが多すぎて逆に何を聞けばいいのかわからない。

「誰って？ さあ、誰だろうね」

そんな私に、その子供はニヤツと笑って答えた。  
いや、聞いているのはこっちなんですけど。

「ここどこ？」

なんとなく、聞き返してもはぐらかされそうな気がしたので、別の質問を試してみた。

「ここはねえ、世界の『歴史』が集まる場所だよ」

「世界の『歴史』が集まる……?」

「そ。言うなれば、図書館ってどこかな？」

その言葉を聞いた瞬間、周りの白が本で埋め尽くされた空間へと変わった。それは図書館というには騒然としていて、それでいてどこか空虚だった。

瞬きすらできないほど一瞬の出来事であった。

「……真面目に、ここどこ？」

私は、ゆっくりと聞き返した。

「神様の図書館さ」

その子供は、やはりニヤニヤしていた。

……変な夢を見た。

寝起きの霞がかった頭に、白の情景が一度浮かんで沈んでいく。

白に染まった頭で、その鮮明で曖昧な何かを掴もうとしたが、それは大海に浮かぶ砂粒のように、伸ばした手をすり抜けていった。

伸ばした手を引き戻せないまま、顔を洗い、歯を磨こうとし

て、やめた。

そしてベッドに戻り、だんだんと明けていく朝を感じていた。

はつきりと覚醒した時には、頭の中には白しか残っていなかった。

ただ、どこか穴が空いたような気持ちがあった。

「……まあ、いつか」

今日は学校だ。

……十年前に最初の——が発見された——は、近年——増加傾向にあり、——今後ますます深刻化することが予想される、と——は発表しました……

朝食を食べながら、ぼんやりとニュースを眺める。

食卓には私しかない。父親は入院中で、母親は父親がない穴を埋めるために朝早くから夜遅くまで仕事に勤しんでいる。

白ごはんを味噌汁と共に流し込みながら、天気予報を聞いていた。今日は雨らしい。

「おはよー」

「あ、うん。おはよう」

教室に入った時、友達の千春がのんびり声をかけてきた。

「ねえねえ、英語のノート見せてくれない？ 昨日予習終わらなくてさあ」

「またあ？ ……もう、次無いよ？」

「やった！ ありがと！ ほんっと助かったあ」

ノートを受け取った千春は、早速自分のノートに写し始めた。

予習をしようという気持ちがあるだけマシかな？ いや、この子の場合、ただ怒られたくないだけか。

今日は一週間に一度の最悪な時間割だ。

一時間目、体育。私がこの世で最も嫌っている教科。……滅びればいいと思う。

二時間目、数学。体育とは別の意味でとてつもなく嫌っている教科。順列とか意味わかんないし……。

それから、歴史と英語。

昼休みを経て、五時間目、現代文。この教科は先生が苦手だ。とてつもないカッチリ先生なのだ。

六時間目、物理。これはもう純粹にわからん。

七時間目、保健。これは無くてもいいと思う。

そうして、やっと帰宅の時間だ。疲れ切った体を引きずって、まだ微かに雨の匂いが漂う坂道を下り、やっとの思いで家に帰り着き、自室のベッドにダイブした。

私が白を認識した時、そこは「図書館」だった。

私がおもてきたときは、初めて来た時と同じように白が周りを覆っていたけれど、あの子供の言葉を思い出して、気がついたらもう「図書館」になっていたのだ。

「みんなお待ちかね、ミューズ様のお出ましだあ！」

「うわっ!？」

聞き覚えのある声に、思わずビクツとしてしまった。

「……急に後ろから声かけるのやめてくれない？」

「ごめんごめん」

振り返って半眼で睨んでやると、金の髪で薄く白い布を身に纏った子供は、舌をチロつと出して絵に描いたようになってへぺろポーズをした。

ちよつと、いや、かなりイラツとしたけど、相手は子供なので許してあげよう。

「というか、ミューズって、もしかして君の名前？」

「そだよ」

そういえばこの前は名前聞いてなかったっけ。……私も名前言ってないや。

「あ、名前は言わなくてもいいよ。わかっているから」

「どういうこと？　というか、もしかして心読んだ？」

「うん」

「……そんなことできるの？」

「当たり前だよ、神様だもん」

「……ん？　神様？　この子供が？」

……神様に対するイメージがガラガラと崩れていく気がする。もつと荘厳な感じだと思ってた……。

「それは人間の勝手な偏見だよねえ」

……とりあえず、この件は棚に上げておこう。そうしよう。改めて周りを見渡す。

見れば見るほど不思議な空間だ。

図書館とは言うけれど、綺麗に製本された本は圧倒的に少なく、ほとんどがただの紙束や木札、果ては粘土板などだった。なんというか、図書館というよりむしろ博物館みたいだ。

「ごほん……それでね、この前は言い損ねちゃってたんだけど、実は君に頼みたいことがあるんだよね」

ミューズが妙に気の抜ける咳払いをして、改まった態度で言ってきた。

『書架整理』手伝ってくれない？」

私は、「はあ？」と口を半開きにした。

母親が運転する車の、少し薄汚れた後部座席で、そつとため息をつく。

目を向けた窓の向こう側は遠くの方がうつすらと霞がかっていて、その中にポツンと浮かぶ綿雲がやけに目についた。

病院は嫌いだ。特に入院している人を見るのは。

病院は家から少し遠い。その道中はいつも憂鬱になる。

……近年猛威を振るう……ですが、今日また新たな事実が……「喜ばしいですね」「このまま順調に……たらいいですね」

……ラジオから流れる間延びした声に、もう一つため息をついて、車の振動に身を任せていた。

六六六番。それが父に与えられた病室。縁起が悪いにも程がある。

入院している人々の合間を縫って進み、一番奥の父親のベッドへと進む。患者はやたらと数が多い。やつのことで辿り着いた時、私は咄嗟に目を逸らした。この瞬間はいまだに慣れない。

ベッドの上では、父親が静かに横たわっていた。両足は無くなり、かろうじて残る二の腕が痛々しさを訴えかけてくる。心臓がギュッと驚掴みにされた心地になる。

「前来た時より……」

母親が呆然と呟いたが、その声も尻すぼみになって、消えた。だから、嫌なのだ。

こんなものを見せつけられるのは分かっているはずなのに、母親はここに来るのをやめようとしめない。一縷の望みに縋りたいんだろう。

それから逃げるように家に帰り、母親は仕事に出かけ、私は千春の家に行った。

「いらっしやうい。早く上がってゲームしよ」

呼び鈴を押してすぐに笑って出てきた千春。その呑気な顔を見て、ずっと掴まれたままだった心臓が、開放されたのを感じた。

久しぶりに上がった千春の部屋には、相変わらず多種多様のゲーム機やソフトが転がっていた。

「いいの？ こんなにゲームばっかしてて。絶対宿題終わってないでしょ」

「ふふふ。聞いて驚け！ 私、今日は宿題、終わっているの

だ！」

「えっ!? 嘘でしょ。絶対嘘だ」

「ふふふ。なんかいつのまにか終わらせてたみたいなんだよねー。さすが私。未来のことを見通してやってたんだね！」

「……ちよっと見せてみ。終わったって言う宿題」

ご機嫌な千春が宿題を引っ張り出して来る。

紙束を覗き込んで、思わず口がひくくつとする。

「……千春。これ、先週の分の宿題」

「えっ!? うそん」

「残念ながら本当です。じゃあゲームの前に宿題終わらせようか」

千春の絶望の表情で、不覚にも吹き出しそうになる。

「ふええーん、助けてえ、学年二位の天才さくん。なんなら脳みそちようだいよ」

「私が死んじゃうのであげません。ほらシャーペン持った。

私も教えてあげるから」

子供のようにイヤイヤしながら、ゲーム機にしがみつく千春に苦笑した。

「どう？ どれくらい進んだ？」

そう聞いてきたのは、仰向けでふわりと浮かぶ子供だ。相変わらず目は瞑っている。

「それ毎回聞いてない？ 心配せずとも全然進んでないから」手に取った本に目を通していく。とりあえずこうして内容



を確認して、分類していこうと思っっているけれど、読めども読めども本棚の中身は依然として減らない。そろそろうんざりしてくるところかと思いきや、そういうことはない。むしろ、内容の面白さについて夢中になって読んでしまうものもあるほどだ。

この図書館はこの世界の『歴史』が集まる場所、とはよく言ったものである。この本棚だけでも、実にさまざまなお話があった。

手に持っていた本を片付け、次の本を手取る。

……なんだろう、妙に、気になる。

パラパラと、ページを捲っていった。

気になった本は、全部読み終わらないと気が済まない。ということ、本格的に読書の体勢を整えて、読み出した。不思議なもので、たびたび既視感のある内容もあった。短いようで、途方もなく長い時間。いつの間にかミューズはいなくなっていた。

微かな違和感。それに、私は気付かないふりをしていたのかもしれない。

「ねえねえ」

「ん？ どしたの？」

千春はだらしなく机に肘を突いて話しかけてきた。

「ありがとうねえ」

「……え。何急に、怖いんだけど。君、そんな性格じゃない

でしょ。勉強してるのにありがとうなんて」

千春はグラスに入った麦茶の水面を揺らした。

「いやあ、なんとなく、言いたくなってるね」

「そんなもったいぶった言い方して。そんなこと言ったって手は緩めないよ」

「うぐつ。い、いや、そんなこと別に思っないしっ。厳しとかゲームしたいとかそんなこと全然思っないからっ」

「自白してるし」

あ、と口を押さえる千春に思わずぶつと吹き出してしまふ。

「さあ、もう一踏ん張りしよっか。ほら、あとちょっとだから」

「ふええーん。もうやだあ」

これが昨日のこと。

千春が病院に入院した。今朝、千春を起こしに行った千春の母親が、いつまで経っても起きない千春を見つけて、そのまま病院に搬送されたそうだ。

慌てて駆け付けた私を尻目に、千春は穏やかな表情で眠っていた。今にも目を覚まして昨日のように笑いかけてくれそうだ。

病名は「消滅病」。

十年ほど前から、今も世界中でもすごい勢いで患者と死者を量産している、正体不明の謎の病気。

致死率は九九・九パーセント。症状の進行速度は人それぞれ



れだけでも、たいてい一年から、長い人で八年ほどかかることもあるという。

でも、最後は、みんな同じだ。まずは、どうでもいい記憶から消滅が始まる。最後には、端から肉体が消えていく。

そして、存在が消える。

父親のように。

そして、この病気の厄介なところが、病気の進行に比例して、周りの人の、その患者に関する記憶も消えていくところだ。その人が存在した『歴史』も、何もかも、消える。

最後には、何も、残らない。

点滴につながれた千春。

昨日の千春の言葉。千春も、もしかしたら薄々わかっていたのかもしれない。今になって思う。

「なんで、私の名前、呼んでくれなかったの……？」

病室には窓さえない。壁の向こうの空はどんな色をしてるのかな。

私は、妙に冴えた心を少し離れたところから見つめていた。

これは、何の『歴史』だ？

これは、私の『歴史』だ。確信があった。

そう、そのはずだ。私の魂がそう告げている。

それなのに。なぜ私はこの本の内容をほとんど知らないのだろうか。

その疑問はこの一文で氷解した。

「病院で検査を受ける。『消滅病』と診断される」

読み進めてしばらくして、突き当たった文字列。

千春のことは、今思い出した。

でも、私はこの『歴史』を知らない。本当に知らない、はずだ。目の前の全てが歪む。手に持っていた本も、ぐにやりと歪んでぶちっと消えた。

「君たちは今も寝ているんだよ。ここに初めて来た時から、ずっとね」

白の世界の中で、いつの間にか目の前に来ていたミュージスは、短い金髪を揺らして言った。

世界は夜の闇に吞まれようとしていた。

全ての『歴史』は潰え、生き物だったものは、皆、夢のなかで生きている気になっているだけ。

そんな世界に、白光が差す。

「君たちは今も寝ているんだよ。ここに初めて来た時から、ずっとね」

見渡す限りの白。

清浄で清純で神聖なる白。

そんな言葉すら汚らしく思えるような白。

そんな中で、私は目の前の透明感のあるヴァイオレットの

瞳を見つめた。そういえば、ミューズの瞳、初めて見たな。初めて会った時から、ミューズはなぜか目をつむっていたから。穏やかにほほ笑むミューズは、今まで見た中で一番神様らしかった。

分からない。何が分からないのかも、分からない。そんな私に少し目を泳がせて、ミューズが口を開く。

『『虫食い』が大量発生してさあ。いろんな『歴史』を食い荒らし始めたんだよね。それで、慌てて生き物たちを避難させて、ついさつきみんなの『歴史』の修復が終わったとこなんだよね』

そんなこと言われても意味がわからないよ。

「……ここどこ？」

何が聞きたいのかも分からないまま口を開いて、出てきたのはそんなありふれた疑問だった。

目を丸くしたミューズは、いつか見たときのように、ニヤツと笑って言った。

「神様の図書館さ」

もう何も言えなかった。

私の呼吸音を、白が飲み込んでゆく。

ミューズはおもむろに本を取り出す。私の『歴史』。

「そろそろお別れの時間だなあ。寂しくなるね」

そう言いつつミューズの手の中で私の『歴史』が開かれる。それと同時に、白に急速に色がつき始めた。白が遠ざかっていく。

咄嗟に手を伸ばした手が、空を切る。

「あ……」

ミューズは、透明なバイオレットの瞳で本を見つめたまま右手をそっと私に向けた。

それだけで、ふっと暖かくなる。

そして、私はようやく気がついた。

ああ。ミューズは本当に『神様』なんだ。

……変な夢を見た。

寝起きの霞がかった頭に、白の情景が一度浮かんで沈んでいく。

白に染まった頭で、その鮮明で曖昧な何かを掴もうとしたが、それは大海に浮かぶ砂粒のように、伸ばした手をすり抜けていった。

伸ばした手を引き戻せないまま、顔を洗い、歯を磨こうとして、やめた。

そしてベッドに戻りだんだんと明けていく朝を感じていた。はつきりと覚醒した時には、頭の中には白しか残っていなかった。

ただ、どこか穴が空いたような気持ちがあった。

透明なバイオレットが、その穴を満たしていく。私と、父さんと、多くの大切な人との、大切な『歴史』。世界が色で満ちていく。

シートに透明な雫が落ちた。

「おはよー」

「あ、うん。おはよう」

教室に入った時、友達の千春がのんびりと声をかけてきた。

「あ、今日のニュース見たー？」

「うん。『消滅』病の患者たちが目を覚ましたんでしょ？」

「何が起きたんだろうね。欠けてたところも元通りになったんだって」

「…：神様のおかげだよ」

気がついたら口にしていた。

「え、なになに、急に。もしかして、そういう時期？」

「ちやうわ！　なんとなくだよ、なんとなく」

そう言うと、私はなんだか笑いが込み上げてきた。

明日には、入院していた父さんも帰ってくる。

私は窓から身をのりだして、窓の外の青天の空に浮かぶ白い雲に届くくらい大きな声で笑った。

# わたしが好きなわたし

県立甲南高等学校 一年

岩崎 歩睦

昔から、周りの言うとおりに生きてきた。

ちよつと大げさな言い方かもしれないけど、わたしは自分の服装を自分で決めたことがほとんどない。いつも、周りの人たちが「似合う」と言った服ばかり着ている。

でも、それはみんなが悪いんじゃない。自分でもどこかで思ってしまったているんだ。

わたしは、可愛くなれないって。

「和奏先輩、おはようございます！」

「ん、おはよ」

登校中、バレー部の後輩が声をかけてきた。首に巻いたマフラーを整えながら、わたしは挨拶を返す。

「うう、寒い……。もうすぐ二学期も終わりですもんね」

「そうだね。雫は高校生活、もう慣れた？」

「さすがに、馴染んできましたよ。わたしももう立派な高校生です」

彼女……夢咲雫（ゆめさきしずく）はそう微笑みながら、

口から白い息を吐く。

彼女とは、中学からの付き合いだ。当時から可愛らしくて周りからも人気だった彼女だが、最近はずますます可愛く感じられる。

今も、制服の上に羽織っている大きめのニットカーディガンが彼女のあどけなさを強調していた。

「……いいなあ」

「？ 何か言いました？」

ぼそつとつぶやくと、彼女は怪訝そうな顔でわたしを見上げた。

「いや、独り言」

「そうですか……？ あ、わたし、英語の予習終わってないんだった！ ちよつと急ぎますね」

「分かった。また部活だね」

彼女は慌てたように、肩ほどまである黒髪をなびかせて走っていった。

校門をくぐると、いつものように聞こえてきた。

「見て、九条先輩だよ」

「ほんとだ、かっこいい」

「スラッとして良いよね」

「身長、おれとおなじくらいかな」

「運動も勉強もできるっていうあの入道の人だろ？ うらやましいな」

わずかに聞き取れるようなささやき声に気づかないふりをする。

九条和奏（くじょうわかかな）。それがわたしの名前だ。

校内では、よく自分に関する噂を耳にする。その内容は陰口などではなく、むしろわたしを褒めてくれているものだ。中学の頃から同じように言われていたし、特に気にはしない。だけどときどき、嫌な気持ちにもなる。

『かつこいい』と言われることは、好きじゃない。

最初は嬉しかったけど、同世代の女子はみんな『可愛い』と言われていて、だんだん『可愛い』って言ってほしくなってきた。

でも、親が選ぶ服を着るといつも『かつこいい』と言われる。だからといって、自分で可愛い服を選べる自信もなかった。

加えて、わたしの身長は、平均よりかなり高い。そもそも、顔が父親譲りで『かつこいい』に寄っている。

だから、自分からも言い出せなかった。心のどこかで、可愛くなれないことを分かっていたから。

可愛くなることを諦めたのは、いつの頃だっただろう。

「初詣？」

部活が終わり、部員が集まって冬休みの予定について話し合っていた。

「そう。引退した先輩たちの合格祈願にき。都合が合う人は

なるべく参加してほしいなって」

新しい部長の言葉を聞いてみんな盛り上がった、日程を決め始めた。三年生がいたときもそうだったけど、本当に雰囲気の良い部活だと思う。

「和奏もこの日、予定無い？」

「うん、行けるよ」

わたしも先輩に何かお礼したかったから、ちょうどいい。そう思って答えたけど、すぐに後悔した。

「わたし、着物で行こうかな」

部員の一人がそう呟いた。

「え、じゃあわたしも着て行くー！」

高校生になって初めて迎える正月。着物を着たい子は多いはずだ。

あつという間に、部員のほとんどが着物を着ることになった。溜め息をこぼしていると、雫が近づいてくる。

「和奏先輩も着物、着て行くんですか？」

「わたしはどうしようかな。めんどくさいし……」

「そんな！先輩の着物姿、見てみたいです」

「わたしが着ても、可愛くないと思うし」

わたしは自虐するようにそう言った。そこに、後輩たちが集まってくる。

「そんなこと——」

「絶対かつこいいです！和服すごい似合いそうですよ」

「……！」

一切悪気のない、純粋な思いなのだろう。それが分かるからこそ、わたしの心はひどく抉られる。

「はは……分かった、着て行くよ」

それでも本心は誰にも伝えられないまま、また一日が過ぎていった。

時が過ぎるのはあつという間で、来てほしくなかった正月が訪れた。

『可愛い』と言われることは無いと分かりきっていたから正直嫌だけど、約束を破るわけにもいかない。

結局、わたしは着物姿で集合場所に向かった。

空は雲に覆われていて、薄暗い。そんな空を見ていると、なおさら気分が落ち込んでくる。

「あ、和奏先輩！」

ふと、明るい声が聞こえて振り返ると、雫が手を振りながら近づいてきた。

「先輩、明けましておめでとうございます。今年もよろしく願います！」

「こちらこそ、よろしくね」

そう返すと、雫は嬉しそうに微笑んだ。

雫も当然、着物を着て来ていた。桃色を基調としたもので彼女に合っていてとても可愛らしい。

一方で、わたしは黒色が基調の大人しい雰囲気のものを着ている。

……まあ、『可愛い』とは思わないだろうな。

「着物、似合ってるね」

「あ、ありがとうございます！先輩もとってもか……素敵ですね！」

「今日はここまで一人で来たの？」

「いえ、お兄ちゃんと一緒に。先輩が見えたので置いてきやいました」

「ええ……。っていうか、雫って兄弟いたっけ？」

「あ、いとこなんですよ。お兄ちゃんも、友達と約束しているそうなので、大丈夫です」

「そうだったんだ。どんな人？」

「とっても優しいです！あと、いつかファッションデザイナーになりたいって言ってました。すごくセンスが良いんですよ」

そんなことを話しているうちに、もう神社に到着してしまっ

った。

「あ、和奏と雫！こっちこっち」  
鳥居を過ぎて少し歩くと、部長が手を振っているのが見えた。そこには、着飾った部員たちが、既に集まっていた。

「先輩、明けましておめでとうございます！やっぱり着物姿、素敵です！」

「そんなことないよ」

「いやいや、すっごくかっこいいですって！ね、雫？」

「へ？えっ、あ、うん！」

「……ありがと。みんなも似合ってる」

「……あ」

わたしの言葉を聞いてみんな嬉しそうにした中、雫がどこか申し訳なさそうな顔をしていたのは、気のせいだろうか？

「じゃ、行こうか」

部長の掛け声を聞いて、わたしたちは動き出す。

この神社はあまり有名なわけではないが、それでも相当な数の人が訪れていた。

数十分ほどかけて少しずつ列が進み、ようやくお賽銭箱の前に立つ。

手を合わせて、先輩の志望大学合格を祈った。

数年前までは、「可愛くなりたくない」って願ったときもあったっけ。もう、二度とそんなこと願わないけど。

神様に何度祈っても、これだけは変わらなかったから。

そんな思いを振り払うようにして、わたしはもう一度、先輩の合格を強く願った。

「なあ、あれって九条さんじゃないか？」

ふと、そんな声が聞こえた。同じ学校の男子だろうか。

「ん？ どこだ？」

「ほら、あそこ。今お祈りしてる」

「……え、可愛い」

「！」

それは唐突に聞こえた言葉だった。一瞬、とても動揺したが、すぐに落ち着きを取り戻す。

違うかもしれない。わたしの近くにいる他の子たちに向けての言葉だった可能性の方が高い。

それでも、わたしは淡い期待を抱いていた。こんな私のこととを、可愛いと思ってくれたのかもしれない。

確認せずにはいられなかった。

「和奏？」

部長の声を無視して、わたしは声を発した男子の方へ近づいていく。

それに気づいた男子たちが、驚いた顔を浮かべた。

「あ、あの」

「いや、ごめん！ そんなつもりじゃなくて、つい口に出ちゃったというか……」

本当に、わたしに向けた言葉だった……？ 『可愛い』なんて、最後に言われたのは一体何年前だろう。

「ありがと」

「……！」

気がつけば、そう口にしていた。

その後、再び部活のメンバーと合流し、お守りを買うことになった。

先輩方には申し訳ないが、わたしはずっと上の空だった。

帰宅してからも、わたしは着替えずにいた。ずっと、鏡に

映る自分の姿を眺めている。

『可愛い』。あの言葉はお世辞ではなかった、と思う。つい



口に出たって言うていたし。

わたしのことを、可愛いと思ってくれる人がいる。その事実はとても嬉しい。

だけど、やっぱり自信を持つことはできずにいた。

わたしはほとんどの人にとって、『かっこいい』存在なんだと理解している。

鏡に背を向けたそのとき、鞆が少し震えた。すぐに電話が来たのだと気づき、携帯を取り出す。

雫からだった。

「……もしもし？」

「あ、先輩。少しお時間いいですか？」

「どうしたの、改まって」

「その、今朝話したいとこのお兄ちゃんが、先輩と話したいって言うていて」

「え？」

いとこ？　なんで急に……いや、まさか。

「代わってもいいですか？」

「……うん、分かった」

電話の向こうで、お兄ちゃん、と呼ぶ声がする。しばらくして聞こえてきたのは、あの声だった。

「えっと……こんにちは」

少し遠慮したような声だが、強く耳に残っているものと同じ。『可愛い』と呟いた、あの声。

「こ、こんにちは」

「今朝は、急に変なこと言うてごめん。隣のクラスの椎名颯です」

「そんな、本当に嬉しかったし」

ほとんど話したことのない相手ということもあり、少し気まづくなる。少し間が空いて、椎名くんが沈黙を破った。

「その、単刀直入に訊くけど、九条さんはかっこいいって言われるの、嬉しくない？」

わたしの心を見透かしたような質問に、一瞬息が詰まる。

「え？」

「いや、そんな気がただただであくまで推測だし。無理に答えなくてもいいけど」

動揺したわたしの声を聞いたからか、気を遣ってくれているようだ。

……話しても、いいのかな。この悩みを打ち明けたら、どんな反応をされるのだろう。

みんなの思う『九条和奏』は、本当はいない。その事実を受け入れてくれるのだろうか。

……彼になら。

怖い。けどその一方で、誰かに知ってほしかった。わたしの本当の気持ち。

「嬉しく、ない」

「……そっか」

「最初はそんなことなかった。けど……」  
打ち明けるといふよりは、ため込んでいた気持ちを少しず

つ、溢していくような感覚だった。

長い間、可愛いと言われることはなくて、いつからか自虐的になっていった。

そんな思いを、椎名くんはただ聞いてくれた。最後まで、耳を傾けてくれた。

「わたしは、可愛くなれないんだと、もう諦めたつもりだった。でも今日可愛いって言われて、全然諦めきれなくて」

「うん」

「それでも、やっぱり可愛くなれる自信はなかった。可愛くなることを目指すのも、もう怖くて」

そこまで言って、再び沈黙が訪れる。わたしの話が終わったのを確認したのか、少しして、椎名くんが穏やかな、でもはつきりとした口調で言った。

「チャライとか思わないでほしいんだけど、九条さんは可愛いよ」

唐突に再び褒められ、困惑する。

「みんなが九条さんに言うかっこいいは、何でも卒なくこなす九条さんへの憧れの気持ちから抱かれる感情だと思う」

「憧れ？」

「そう。だから、かっこいい＝可愛くない、なんてことは絶対じゃない」

「そう、だね」

分かっていて。心の中では分かっているはずなのに、自分を貶める感情と混濁して、そんな風に考えられなくなる。

「でも、長い間言われることがなくて、自信がなくなってしまったっていう九条さんの気持ちはよくわかったよ。だから……」

椎名くんは、そこで一呼吸挟んでこう言った。

「九条さん、ぼくにコーディネートさせてくれませんか？」

「へ？」

思わず間拔けな声が出た。コーディネート？

「さっき、服を選べないって言ってたでしょ？ ぼく、実はファッションデザイナーを目指してて。少しだけ、自信があるというか」

そういえば、雫がそんな話をしていた。

「服を、選んでくれるの？ でも、顔とか身長とか、他にも問題が」

「身長は関係ないし、そもそも可愛いっていうのは外見に対してだけ言う言葉じゃないよ。まあ自信が持てるように、いろいろ試してみない？」

椎名くんは、よかったら、メイクとかもするし、と付け加えた。

「いきなりガラッと変わって、変に思われなかな？」

「長期休み明けにイメチェンする人、結構いるよ。大丈夫」

正直、怖い。けど、これが最後のチャンスかもしれない。

もし、また可愛いって言ってもらえるようになれるなら。

もし、また自分を好きになれるのなら。

「……お願いします」

悩んだ末、わたしはそう答えた。

「任せて。……あと、その。なんていうか」

「？」

「……顔は素でも普通に可愛いです」

もしかして、さっきの『可愛いは外見に対してだけ言う言葉じゃない』という発言が、『可愛くない』ととられないように気を遣ってくれたのか。

それとも、恥ずかしながらも、本心を告げてくれたのか。

どちらかは分からなかったけれど、彼の優しさに触れて、心が温かくなるのを感じた。

窓の外では、空を覆う雲の隙間から、太陽が顔を少しだけ覗かせていた。

あれから五日後。雫と出かける約束をした。

椎名くんに悩みを打ち明けた次の日には、彼は時間を作っていろいろ教えてくれた。今日は、まさにその服を着ている。

オーバーサイズのハイネックニットチュニックを着て、プリーツロングスカートを穿いた。靴はショートブーツ。そして、お気に入りのマフラーを首に巻いた。

全体的に茶色を基調とした落ち着いた雰囲気のコデで、可愛らしい。本当にわたしが着て似合っているのか、不安になってしまった。

朝、写真を撮って椎名くんに「これで大丈夫？」と確認を取ろうとした。雫を待っていると、携帯の通知音が鳴った。

椎名くんからだ。

「完璧。超可愛い。楽しんでおいで」

そのメッセージを読んで、思わず口元が緩んだ。

「先輩。お待たせしました……わあ」

このことは、雫には秘密にしてもらっていた。初めて見て、どんな反応をするのか気になったから。

「えっと、その、先輩」

感想を待っていたのだが、雫にしては珍しく、歯切れが悪い。

やっぱり変なのかな、と思っていると、

「すみませんでした！」

予想外にも、謝られた。

「え、ちよつと、どうしたの？」

「実はわたし、なんとなく気づいていたんです。先輩が、『かっこいい』って言われるの、あまり好きじゃないんじゃないかって」

「……」

「先輩は確かにかっこよくて、わたしにとって憧れの人です。

だけど、可愛いと感じることは何回もありました」

雫は、申し訳なきように、続けた。

「それなのに、年下のわたしが先輩に可愛いって言うのって変じゃないかな、とか考えてしまったり、周りに流されたりして、言い出せなくて。本当にごめんなさい！」

雫は深く頭を下げた。本当に、反省しているのだろう。雫

が悪いことなんてないのに。

「椎名くんから聞いたよ。椎名くんに相談してくれたんですよ、わたしのこと」

コーデイナートしてもらった日に、「実は雫から相談を受けてき」と教えてくれた。

「それは……。でも、結局わたしはほとんど力になれなかったですし」

「そんなことない。わたしが可愛くなりたいてって思ったのも、実際に変わったのも、雫がいたからなんだよ」

雫がいたから、わたしの気持ちに変化が起きた。

わたしが好きなわたしになった。

「ありがとう。ねえ、雫」

「？ はい」

「わたし、可愛くなれたかな」

まだ少し不安な気持ちを抱えながらそう訊ねると、雫は明るく微笑んだ。

「はい、とっっても！」

## ずっと、いる

県立甲南高等学校 一年

坂下 綾菜

「本物の田舎には何も無い」。これを知っている人間はなかない。コーヒー片手にほごく都会人とかは尚更だ。

自分をゴテゴテに飾り付けるための化粧道具を売っている場所もないし、洋服屋もないし、スーパードって車で十分の場所があれば、ずっと運がいい。でも食事には滅多に困らない。なぜか？ 自然豊かな場所は野菜果物が多く獲れるし、どこかしこに無人販売の簡素な棚がある。精米所だってある。知らないだろ？ 車が通れるほどの道路に、色あせた看板と大きなドラム缶のような容器が乗った小屋みたいな場所でお米が調達できる。しかも田舎はただでさえ人が少ないから、会う人は皆顔見知り。その「顔見知りネットワーク」なるものを侮ってはいけない。羨ましいことに、時折食べ物を提供してくれる。特に農家だったら嬉しき通り越してドン引きする程の食べ物を分けてくれる。まあ、片田舎の人間に食べられるか分からない程の量だから、貰った食料の八割は都会に住んでいる子供や孫に郵送される。その方がよっぽどりズナブルだ。何で俺がそんなこと知ってるかって？ ずっと田

舎にいたら分かる。アイツみたいに、ずっとな。

俺の前に、まず俺の「友達」を紹介してやるよ。

ソイツは田舎町にずっと立ってるんだ。立ってるっていうのも警備員じゃない。いや、ある意味「警備員」か。守るものは人間の警備員とは違う。しかもソイツが着ているのは反射材付きのベルトとかヘルメットとかじゃなく、作業着にタオルに麦わら帽子に軍手。可哀そうな格好だよな。

さっきから気になっていることを当てやろうか？ 「人間の警備員」だろ？ ソイツは人間じゃない。本人曰く「畑の番人」らしいけど、俺聞いたんだよ。都会から来たガキ共が「気味悪い人形」って言うてて。腹抱えて笑ったね。

ソイツが何年も立っている場所は、とある農家の水田の一角。夏には冴えた緑色が風を受けるごとに波打って、秋には黄金色の稲穂が頭を下げている。良い景色だと思うか？ だったらずっと見てろよ。すぐに飽きてくるから。

…：俺？ 一応教えといてやる。都会のゴミ捨て場で袋を破いて、その中を漁る黒い鳥。それが俺と同族の鳥だ。

「早く刈り取ってくれないかしら。虫も美味しいけど、お米のあの甘さ！ 特に黄金色のものは堪らなく美味しいのよ」 山に囲まれてるせいで太陽はまだ見えなくても、十分明るい田舎町。朝の田舎に響くこの声の主はスズメだ。

「じゃあ秋まで待つてくれよ。夏になったばかりなんだから。今の時期の稲はまだ青いし、雑草みたいなものだろう？」

カカシはそんなにグルメなのかよ、と心の中で考える。

「あら、心外ね。カカシってそんなにグルメだったの？」

「とにかく、今年も刈り入れるまでは食べないでくれよ。刈り取られた後のおこぼれを食べるって約束しただろ」

だったわね、とスズメが透き通った声でチツツと笑う。

カカシは言わば「通訳士」の立場だ。特に鳥たちと、刈り入れ時の稲穂を食べないように交渉している。もちろん、俺達にとっては不利な交渉だ。だから「取り引き」をしている。

まだ刈り取られていない稲穂は啄んではいけない。ただ、畑の持ち主の老人に見つからなければ、刈り取った後に畑に落ちている粒は食べてもいい。カカシの提案のおかげで、俺たちは毎年甘くて美味しい粒にありつけている。

「それにしても、アンタは長く、ここに居るのね。飽きないの？」

「飽きても動けないから。でも、ここは田舎の変化がみられて面白いから全く飽きないよ」

「変なヤツね。私みたいに羽があればどこへでも飛んで行けたのに」

スズメは自分が飛べるのを良いことに、季節が変わるごとに短い旅をしている。盗み聞きをするのには気が引けるが、俺も興味がある。旅先にはどんな奴がいて、どんな生活をしているのか、とか。

「確かこの前は都会に行ったんだよね？」

「都会はすごいよ。空を反射する硝子の箱が建ってるの」

「空を反射する、ガラスの箱？」

ビルっていうものだろう。俺も見たことがある。

「細長くて高いの。トビが飛んでいる辺りまであるんじゃないかしら。その中にたくさん人間がいるのよ」

「へえ。君みたいに人間も高い場所が好きなのかな」

「でも、下を見ようとしてる人間は一人もいなかったから、怖いんでしょうね」

「地面にはどんな人がいたの？」

「ここでは見たことがない恰好をした人たちが大勢いたの。しかも髪の毛が青い人もいたり、ピンクの人もいたり、それはカラフルだったわ」

田舎と都会では進化の具合がずいぶん違う。

「でも！鳥はここ以上に性格が悪かったわよ。それこそアンタとは話を通じないくらいにヤバイ奴らがどこそこ飛んだのよ。しかも人間が落とした食べ物も平気で貪り食ってるの」

ゾツとした。俺はそういうヤツは好きじゃない。目の前の獲物に貪欲なのは、視野が狭くなった証拠だ。

「何で人間が外に食べ物を落とすんだい？」

「そういう文化じゃないの？」

「神社のお祭りみたいな感じ？」

「お祭りが毎日あったとしても、都会に落ちてた食べ物の量には及ばないと思うわ」

興奮気味なスズメは響く声で都会のことを一通り話すと、



「エサを探さない」と雑木林の方に飛んで行った。

「やあ、カカシ」

盗み聞きしてたのに白々しい、と思いつつ、カカシの腕に着地した。スズメとは違って、翼がバサバサと荒々しい音を立てる。我ながらその音にげんがりさせられた。

「さつきスズメが『都会にいたヤバイ奴ら』の話をしてくれたんだけど」

「らしいな。都会は何もかも有り余って羨ましいぜ」

本音だ。田舎でエサに困ることは滅多にない。でも、都会の奴らはきつと、稲みたいに美味しいものを毎日食べてるんだろう。ふしだらな奴らのくせに。

「君たちの事じゃないだろうね？」

「まさか。少なくとも、俺とここら一帯にいる俺の仲間は、そこまで非常識で汚い真似はしないさ。モラルっていうもんをわきまえてるんでね」

自分で言うのもどうかと思うが、俺を含めて俺の仲間ではきるだけ行儀良くしている。賢さは人間と同じレベルだ。

「君がここに来るのは珍しいね。草が食べたいなら道端にくらでもあるよ」

「残念だが俺らは肉食だから。心遣いありがとな」

互いに皮肉を言い合う仲、というのはストレスフリーだ。カカシも多分こちらが本性なんだろう。スズメと話するときは少しだけ気を遣っているように見える。

「要件があるなら早く言ってくれよ。もうすぐ持ち主が来る

時間なんだから」

普段よりも素っ気ない。ということは何かがあったわけだ。

「あっそ」

俺は翼を畳み直すと、カカシの顔をじっと見た。

「お前、カカシ、もうすぐお役目御免って本当か？」

「どこからそんな事聞いたんだか」

明るい口調でも声が震えているからバレバレだ。コイツ、嘘をつくのがヘタクソだ。

「お前さ、俺らがどれだけ頭が良いか分かってんの？ 人間の言葉は完全には分からないけど何を話してるかは何となく理解できるんだぞ」

何日か前、農作業をしていた老人がカカシを一瞥して、

「そろそろ替え時だな。こいつの代わりを早く作らないと」

と、呟いて水田を出て行った。道にはきつと林から拾ってきたんだらう、長い木の棒が何本か無造作に置かれていた。

水田の持ち主、もといカカシの主が不愛想なのは日常茶飯事だが、その時ばかりは変な気分になった。からだの中に重い石をいくつも入れられたような気分。人間はいつもこうだ。

まるで息をするように俺たちを不快にする。

「…：僕って、持ち主にとって役立たずだったのかなあ」

「さあな。人間の考えることなんて知らねえ。ただ…：単純に寿命なんじゃねえの？」

「寿命って」

「俺らとは違う意味のな。何だっけ。『老朽化』って言うだ



ろ？ 物は長く使われるほど脆くなつていくんだよ」

カカシを見ると、いろいろな所に「働いた痕跡」が見える。からだの中に詰め込まれた藁が腐り始めている臭い。水分をたくさん吸ったからか、着ている服に生え始めているカビ。木の腕と脚に生えている苔まがいの植物。洗い流すとか、服を変えるとか、俗にいう「リメイク」をしたらカカシもまだまだ現役。でも、人間にとっては、その作業が面倒らしい。「人間はな、とにかく面倒臭がりなんだよ。んで、新しいものにとんでもなく弱い。特にこころ辺の人間は金持ちだからちよつと古くなった物はさつきと新しい物に変えちまう」

前にカカシに言った言葉が、急に頭の中で再生された。

「君は人間が嫌いなのかい？」

「まさか。笑えるほど学ばないクセに威張りちらしてる所が大好きなんだ。見ていて面白いぞ」

「それは人間の性ってモノだろう。今更言及したところで治らないと思うけど」

「まあな。それしか能がねえんだろうな」

俺は人間のダメな所を見て笑うのが好きだ。だけど、今回は別だ。人間のダメな所に反吐が出そうだ。

朝靄が田舎町に覆い被さっている。少しヒンヤリしていて湿った空気が漂っている。

「よお、カカシ」

「おはよう、カラス」

カカシはこう言ったきり黙りこくってしまった。俺は努めて明るい声を出した。自分のキャラクターに嘘をついているようで気持ち悪かった。

「どうしたんだよ、カカシ。いつものお前だったら」

「カラス、持ち主が来る。すぐどっかに行ってくれ」

困惑した。持ち主が来るにしては朝が早すぎる。しかも、いつも穏やかな口調で話すカカシの、こんなに切羽詰まった声は聞いたことがない。

「僕に近寄らないでくれよ。君の翼に臭いが染みついたら気の毒だ」

「臭いが染みつく」。その言葉で悟ってしまった。

「…：お前のおかげで人間は稲を収穫できたし、鳥は美味しい粒にありつけたのに、火炙りは酷すぎるだろ」

「人間がそんなこと分かるわけない。僕らに何の関心も無いんだし」

「俺に出来ることは、」

「ない。もう、何もできないんだよ…：！」

カカシの言葉は覚悟では無い。カカシは生き物じゃない。そのカカシに「死」が近付いている。それを分かっている、それでも受け入れられない焦り、混乱が滲み出ている。

「せめてここから離れてくれ。君がここにいたら、持ち主が君に何をするかわからない」

まだ戸惑っている俺に、カカシは毅然と言い切った。

「カラス。君はここにいて何よりも賢いだろうか？」

俺が飛び去った後すぐにカカシの主がやって来た。持ち主はカカシを地面から抜くと、雑草が伸びた空き地に投げ捨て、その他にもいろいろ投げ込むと、それらに着火した。その光景に現実味は一切無い。時間が止まった世界で自分だけが動いている。そんな感覚だった。

何か空を切る甲高い音で我に返った。目の前の野焼きか？いや、煙が燻っているだけで音の発生源じゃない。いきなり今までに見たことがない速さで飛んでいる「何か」が視界に映った。その「何か」がスズメだということに気付くのに時間がかかった。しかも野焼きに突っ込むとする程の勢い。そのスピードで飛んで翼がもげないのが不思議だった。それと同時に頭の中で危険信号が鳴った。思わず俺は飛び立つと、スズメを足で掴み、無理矢理野焼きから遠ざけた。でも、スズメが俺よりも小さいからといって完全に侮っていた。俺の足の中でジタバタと暴れて何かを叫んでいるスズメを掴みながら飛ぶのは本当に危ない。気を抜くと、スズメが逃げ出して、また野焼きに突っ込んでいくか、俺ごと墜落しそうだった。俺は難航しながら、もつと上空に影を見つけて上昇した。「おい！ もつと上の方に上がってくれ！」

影の正体はトビだ。俺はトビの体を嘴で何度も突いた。鋭い目を向けたトビは小さく溜息をつくと、急上昇した。すると思いの外すぐに、足元で暴れていたスズメの動きが止まった。上空の空気が薄すぎて気を失ったらしい。「危ねえ……。ありがとな。こうでもしねえとコイツ、一生

暴れ続ける気がして」

「早く降りろ、小僧。儂に気絶したお前さんたち二羽を地上まで送り届けろと言うか」

そんなつもりはない。俺も息が苦しくなってきた。トビへの感謝もそこそこに、今度は地面の方に頭を向け、降下した。

雑草が伸びきった空き地にスズメを降ろすと、俺は電線に飛び乗った。そのまま野焼きの様子を眺めていた。やけに冷めた気分だった。何も考えたくなかった。本当にあつけない。俺はまだ、何もできていないのに。

「……なあ、カカシ」

カカシは何も言わない。

「お前、スズメに言っただけだったのかよ。俺が言及しなかったらどうするつもりだったんだよ」

カカシは何も言わない。俺には、カカシの声は聞こえない。

「お前って、本当に馬鹿だよなあ」

カカシは何も言わない。次々に言葉が噴き出してくる。

「そうだよ、本当に馬鹿だよ。お前が何も言わないせいで、心の中がグチャグチャなんだよ。お前、そんなの知らないだろう」

カカシは何も言わない。俺は声を張り上げた。

「何か言えよ！ お前のせいでアイツは、スズメは、もう少しで焼き鳥になってたかもしれないぞ！」

ポストと音を立てて、煙の塊が噴き出した。カカシが思わず吹き出したように思えた。

「笑い事じゃねえっ！」

煙がもろに当たったからなのか、悲しいのか、俺の目からは涙がボロボロこぼれていた。俺の中で欠けてはいけないモノの一つを人間は容赦なく奪った。人間は、自分勝手だ。

俺は一本の友達を見捨て、一羽の友達を「助けた」形で傷つけた。俺も人間に負けないほど、自分勝手だ。

野焼きの跡からは、黒焦げになったカカシが出てきた。

でも、何度話しかけても、何回嘴で突いても何も言わなかった。黒焦げのカカシはもう、カカシじゃない。

いつの間にか大雨が降りしきる時期になっていた。雨に濡れながらボンヤリと田舎の風景を眺めていると、何かが横に降り立った。電線がほとんど揺れなかったから、俺よりも小さい奴なんだろうと見当がつく。

「……よお、元気か？」

スズメとは野焼きの後から会っていなかった。沈黙が精神に刃を立てて迫ってくる。俺は耐えられなかった。

「スズメ、『輪廻転生』って信じるか？」

スズメは暗くて虚ろな目を俺に向けた。ゾクツと羽が逆立つ。初めてスズメに恐怖を覚えた気がした。スズメは何も言わない。俺は無理やり言葉を繋げた。

「輪廻転生ってな、死んだらまた何かに生まれ変わるって考え方なんだけど、それをお前は信じるか気になってさ」

「……何で今更そんな事言うのよ」

スズメは静かに呟いた。

「……飛べない私を置き去りにした群れに復讐できるなら、生まれ変わって強い動物になりたかった」

スズメという生き物は群れで生きる動物だ。だけど、目の前のスズメは上手く飛べなかったことを理由に群れの仲間恋愛をつかさね、初冬にこの田舎町に置き去りにされた。そこからずっと飛ぶ練習をして、四度冬を越した今ではハヤブサも顔負けのスピードで飛ぶことができる。そして、「旅」と称してかつての仲間を探し出して復讐しようとしている。

「カカシが生まれ変わって別の何かになってたら、どこにいるとしても飛んで行って、また話したかった。……でも、『りんねナントカ』って嘘でしょ？ まだ私は弱っちいスズメなの。誰かに迷惑かけてばかりなの」

『輪廻転生』という思想に嘘もホントもねえよ。あと、お前が誰に迷惑をかけたんだ？」

「私がカカシと仲良くなったせいで、畑の持ち主がカカシが『害鳥』に効果が無いって判断して燃やした。そのせいで自暴自棄になった私を、あなたがなだめる羽目になった」

はは、と諦めたようにスズメは笑って、顔を戻した。

「……本当は、カカシが燃やされること、知ってたんでしょ？」

「……ああ」

「……何で、何で今まで教えてくれなかったの？」

返答に詰まった。理由は自分でも分からない。

「……私に少しでも話してくれたら、私だって私なりにどうにかしたのよ。カカシのためなら、友達を守るなら私は何だっただけ。持ち主に攻撃することだって容赦しなかった。それなのに……何で何も話してくれなかったのよ……！」

泣いているのか怒っているのか、びしょ濡れのスズメが怒った顔をして俺の方を向いた。俺は、答えを見つけた気がした。

「……俺たちが、人間よりも弱いからだよ」

それがスズメに何も言わなかった一番の理由なんだろう。

「人間は動物を食って生きてるんだ。それだけじゃなくて、同族を殺すくらい強くなっちゃった。田舎町にいる動物全部集めても、田舎町にいる人間たちにすら勝てない」

「私じゃ持ち主に勝てない、って言うの？」

「そうだよ。人間一人で五羽の鳥を簡単に殺せる。俺は、お前に死んでほしくなかった。お前に勇気があるのは認める。だけれど、お前があそこで死んだら、俺はどうしたらいいんだ？ 親しいヤツをいっぺんに失った絶望の中で死ぬまで生きるのか？ 俺はカカシにもまだここにいてほしかったし、スズメにも生きていてほしい。でも、この世界は欲張ることを許してくれないんだ。……ごめんな、俺は自分勝手なカラスだ」

涙が止まらない。雨と涙が混ざり合って流れていく。

「……私ね、これから海の向こうに旅に出るの」

はっとした。それってまさか、

「太陽が沈む方か？」

「ううん、太陽が昇る方」

前に親しくなった渡り鳥曰く、太陽が昇る方の海には陸地が無いらしい。スズメに言うべきか。でも、彼女はきつと分かっていて。前の旅先の都会も、太陽が昇る方向にあった。

「で、俺は付いて行った方がいいのか？ 別にいいけど」

「カラスにはここにいてほしい」

スズメは一息つくつと、寂しそうに笑って飛び去った。俺が最後に見たスズメの姿は、ここよりも超越した場所に向かっているように見えた。

「あなたがここにいてくれないと、ここに帰って来たか分からないの。私はあなたと違ってバカなのよ」

それから蝉が大合唱する夏を三度過ぎ、今は黄金色の稲が頭を垂れる秋だ。だがスズメが帰ってくる気配は無い。

世界は移り変わっていくもので、カカシがいた場所に別のカカシが立ち始めた。そして、老いた仲間をいくつか見送った。変わらないものといえば、俺の思い出の中の、雨に濡れながら寂しそうに笑うスズメの姿だ。

（お前が帰ってきたら絶対崇められるし、もし帰って来なかったとしても、俺が死ぬまでお前の話を語り継いでやるよ。『運命に抗って飛び続けた一匹の勇敢なスズメ』とかな）

時々心の中でそう考える。俺は俺の命が尽きるまでここで生きるつもりだ。

ずっと、俺はここにいます。

## 救いの神様

県立甲南高等学校 一年

松岡 七望

「生まれ変わりたい？」

私と少女の出会いには、その言葉から始まった。

虹彩異色症。オッドアイ。左右で目の色が違う形質。私は人間では珍しく、その形質を持って生まれてきた。私の左目は空のような淡い青色。だからいろんな人が興味津々で私の顔を見てきた。

「天音の左目は、神様が天音にあげた贈り物なんだよ」

母はいつもこう言っていた。だから私はみんなと目の色が違うことで悩むことはなかった。家族だけでなく、友達もみんな、私の左目を見ても普通に接してくれた。だから疑いもなかった。この平穏な生活が、一変してしまうことなど。

「急でごめん、天音。僕の仕事の都合で、東京に引っ越すことになったんだ」

中学二年生の冬。学校から帰ってきた私に、お父さんが突然そう言った。

「引っ越し？」

私は視界が真っ暗になった。生まれてきてからずっとこの

町で過ごし、たくさんの友達ができた。その人たちと離れ離れになる、という事実は私の心を深くえぐった。

「もう、みんなとは会えないの？」

声が少し震える。

「大丈夫。ちよくちよくこっちにも戻るつもりだから。いつでも会えるさ」

私はその言葉に胸をなでおろした。そう、永遠の別れではないのだ。またいつでもここに帰ってこられる。だからそんなに不安になることなんてない。そう自分に言い聞かせた。

「長野県から来ました、来栖天音です。よろしくお願ひします」

登校初日。新しい制服に身を包み、新学期が始まる。窓の外には東京タワーが見えて、私、東京にいるんだと実感する。

「来栖の席はあそこな。みんな、仲良くするように」

はいとみんなが口を揃えて言う。先生はそれから軽く連絡事項を伝えて教室から出ていった。そのときだった。

「！」

クラスみんなが、私のことを見ていた。物珍し気に、けれどその瞳の奥には私に対する嫌悪のようなものが含まれていた。

(怖いな)

私は生まれて初めての感覚に恐怖を覚える。今までこの見た目で気味悪がられることはなかったが、ここは前とは違う



場所。変に思われても仕方がないが、まだ初日だ。大丈夫。

私はこのとき、時間がたてばみんな慣れてくれるだろうと思っていた。けど、現実はその甘くなかった。

私は結局この日誰とも話すことができなかった。否、話しかけられなかった。私が近づくとみんな私から距離を取った。加えて、まるで人間じゃないものを見ているような目で私を見てくる。最初だからか、と思っていたが違った。それは段々エスカレートしていき、陰口や嫌がらせが増えていった。

「化け物」

ある日誰かがそう言った。今までどんな言葉もはつきり聞こえなかったのに、それだけは聞き取れた。まるで私の存在自体が否定されたかのようなその言葉をきっかけに、私の心は壊れてしまった。もう学校に行く気力も、誰かと話す気力も、なくなってしまった。結果それが不登校に繋がりに、引きこもりに繋がりに、私の性格は変わってしまった。

そのまま一年が過ぎ、受験生になった。だが、私はもうそんなことはどうでもよかった。今更勉強する気にならないし、高校も、学校に行きたくない私にとっては地獄でしかない。そんなある冬の日のこと。私は珍しく早く目が覚めてしまった。いつもは昼まで寝ているのでなんか変な感じがする、と思いつつながら、私は階段を降りてリビングに向かう。

「なんもないじゃん……」

何か食べようと思つて冷蔵庫を開けたが、中には何も入っ

ていなかった。

「買いに行くか……」

あまり外に出かけたくないが、何か食べないと体がしんどくなってしまうので、私はコートを羽織ってコンビニへ向かった。

買い物を終え、家に向かって歩いていたら、ふと公園が目に入った。こつちに来てから何回か見たことがあったが、実際に入ったことはなかった。少し時間もあるし、入ってみるか、私は足を踏み入れる。

ブランコに座り、空を仰ぐ。冬の空はどんよりして、今にも雪が降りそうな気配だ。

「はあ……」

と大きなため息をつく。白い息が出て、消えていく。私は一体何をしているのだろうか。いじめられて、学校から逃げ、人から逃げて。全部、全部この目のせいだ。普通の目だったら、こんなことにはならなかったはずだ。普通だったら。普通だったら。

「……もう嫌だ」

死んでしまいたい。死んで、生まれ変わって、そして普通の人生を送るんだ。そうしよう。それがいい。

「生まれ変わりたい？」



ふと、そんな声がした。顔を上げるとそこには、私のことを真っ直ぐに見ている一人の少女がいた。腰まで届く金色の髪の毛、黒いワンピース、裸足。私を見つめるその目は、両目とも真っ赤だった。

「誰……？」

状況が理解できず、咄嗟に出てきた言葉がそれだった。

「ボクはミア。君を助けに来たんだよ」

理解不能だった。突然音もなく現れた少女は、私を助けると言ってきた。助けるとはどういうことだ？

「君、今生まれ変わりたいって思ってたでしょ。だから、その願いを叶えてあげる」

「な、なんでそれを知ってるの!？」

「君のことならなんでも知ってるよ。なんたって神様だからね」

「は？」

一体何を言ってるんだ、この子は。さっきから助けるだの神様だの、私は夢でも見てるんじゃないのか？

「夢じゃないよ。ボクなら、君の願いを叶えてあげることができるけど」

「願いを叶えるって……。私を、殺すってこと？」

「さあ、どうでしょう。それは君次第だよ」

ミアはそう言って笑う。でも目が笑ってないように見えるのが怖い。

「天音はどうしたい？」

「……」

信じられない。この子はきっと、昨日見たドラマか何かに影響されてこんなことを言っているんだ。迷子かもしれない。でも、周りに親らしき人はいない。こういうときって交番行けばいいのかな。近くの交番どこだっけ。

「天音、聞いてる？」

あれ、じゃあ何で私の名前知ってるんだ？ 独り言でつぶやいてたか？

「もう！ ボクは迷子の子どもじゃないから！ 神様なんだよ！」

「分かった分かった。もういいよ、お母さんのとこに帰りな」

「だから違うんだよ！」

これ以上子どもの相手をする訳にはいかない。私はプランコから立ち上がると、バイバイと言って去った。

外に出たことを後悔したのは、それからすぐのことだった。

「あれえ？ 来栖さんじゃーん」

甘ったるい声。その後には響く甲高い笑い。忘れるはずがない。私をいじめていたグループのリーダー格である葉山明里が、目の前にいた。後ろには葉山さんの友達がびったりとくっついてる。

（最悪だ……）

この人には一番会いたくなかった。この人が主体となり、私を追い詰めて、私は不登校になった。

「こんな時間にいるなんて珍しいじゃーん。何？ 買い物？」

学校には来ないくせに買い物はするんだあ」

後ろの女子たちがクスクス笑う。私は早くここから逃げ出したくてたまらなかった。でも、恐怖で足がすくんで、動けない。

「来栖さんの左目って、ほんと綺麗な青色だよねー。いいなあ、羨ましいなあ。なんでオッドアイなんだろうねえ。あそつか！ 来栖さんって化け物だもんねえ！ 人間じゃない目えしてるし！ あっははははは！」

ああ、本当に嫌だ。こんな風に言われても、何も言い返せない自分に腹が立つ。でも、口答えしたらもっと酷いことを言われる。だから黙っていることしかできない。葉山さんはふと私に近づいて、耳元で囁いた。

「この町に化け物があるってだけで私たちは迷惑なのよ。もうさ、消えちゃったほうがいいんじゃない？」

「っ！」

ああ、今一番言われなくなかったことを言われてしまった。葉山さんたちはもう満足したのか、ケラケラと笑いながら帰っていった。

『消えちゃったほうがいいんじゃない？』

そうか、そうだよ。やっぱ私はいらぬ人間だったんだ。私がいるせいで色んな人に迷惑がかかるんだ。じゃあもう、

「消えればいいんだ」

気が付くと、私は人通りの少ない橋の上にいた。時間の経過がよく分からない。でも家を出たのは朝だったはずなのに、辺りは薄暗くなっていた。そんなに長く歩いたのか。それより、こっつてどこだっけ。

手すりを乗り越える。頬に当たる風が気持ちいい。もう何も感じない。あとはここから飛び降りれば……

「え？」

なんで、足が、動かないの。私は何回も足を前に出そうとした。でも私の足は、鉛でもついているかのように、そこから動かなかった。死ぬ覚悟は出来ているはずなのに、なんで……？

「天音」

私を呼ぶ声があった。振り返るとそこには、朝に公園で会った、ミアと名乗る少女がいた。

「飛び降りないの？」

なんで子どもがこんな時間にいるのか、親はどこにいるのかとか、聞きたいことは山ほどあったが、私が口にしたことはそれらとは全く違うことだった。

「足が……動かないの……」

なんでこんなことを、さっき会ったばかりの子どもに言ってしまうんだ。でも、私は自然とそんなことを口にしていった。

「じゃあ、それが君の答えだよ」

「え……？」

「死にたいけど死にたくない。それが君の答え」

「死にたくない……？ ふぎけないでよ！ 私がどれだけ苦しんでるか分かってるの!? どれだけ生まれ変わりたいって思ってるか知ってるの!？」

「知ってるよ。言ったじゃないか、ボクは神様だって。だから君のことは何でも知ってるんだよ」

「じゃあ何で……」

「確かに君は死にたい、消えたいって思っている。でも、それは本心かな？ 君は本当に、消えたいと思ってる？」

「そうだよ！」

「じゃあ何でためらってるのさ。そんなに消えたいなら、さつさと飛び降りればいいじゃないか」

「っ！」

ずっと笑っていたミアの顔が、今は真顔になっている。目にも光がなく、私は思わずたじろいでしまう。

「結局、本心では死にたくないんだよ。君は。死にたいって思ってるだけ」

「でも……私は……」

「君はこれまで本当に絶望しかない人生だったのかな。救いのない人生だったかな」

そう言われ、私は言葉に詰まる。絶望しかない、救いのない人生だったか。いや、そうじゃない、そうじゃなかった。

「君のことをちゃんと人として見てくれる人たちがいたんじゃないの？ その人たちが、君の救いなんじゃない？」

私のことを、人として扱ってくれる人たち……。あの町の人たちは決して、私のことを化け物扱いしなかった。その人たちが、私の救い……。

「君のオッドアイは、君のことを傷つけるためにあるんじゃない。君の誇りにしていいものなんだよ。他の人と違うものを持っていたって、君は人間だ。化け物なんかじゃない」

「っつ……!」

他の人にこういうことを言われても、きれいごとだと言って聞く気にもならないけど、ミアに言われると何故だか、すんなりと耳に入ってくる。

「天音。長野に戻ったほうがいいんじゃないかな。今ボクに出来るのはここまでだ。後は君が自分で何とかするべきだよ」

「え……」

「甘えちゃダメだ。ボクは救いの神だけど、人に手を差し伸べすぎて、その人自身を本当に救えたことはあんまりないんだ。人を助けるって、誰もが簡単そうに言うけど、本当は凄く難しいことだよ。その人のために何もかもしてあげると、結局その人自身は何も変わっていないことになる。かと言ってあまりに遠ざけてしまうと、それも人を助けたとは言えない。だからボクは、困っている人の逃げ場になろうと思ったんだ。天音、さっきボクが言ったことはあくまでもボク個人の意見だよ。後は君がどうするかを決めないと」

「でも……」

「生まれ変わりたいんでしょ」

「！」

「生まれ変わるって、何も死んで輪廻転生して再び違う人生を歩むって意味だけじゃないと思うけど。考え方一つで、人生が変わることだってあるんだ。ボクが最初に言った生まれ変わりたいってのは、少なくともそういう意味じゃない」「死ななくても、生まれ変われるってこと？」

「そう。難しいけどね。でも、天音ならできるさ」

後は、自分が。ミアは私に、新しい考え方を教えてくれた。道を教えてくれた。後は私が、その道を歩くかどうか決めるんだ。

「ふふっ。やっぱり天音、その左目は隠さないほうがいいよ」

気が付くと、私の前髪が風に揺れて、左目がはつきりと露出していた。

「あっ」

私は思わず癖で隠してしまう。

「だからいいって。天音、後は頑張っただけ。もし、また辛くなったら、ボクのこと、思い出して。ボクは救いの神だ。いつでも君の逃げ場になるよ」

「ミア……」

ミアはにこっと笑って、手を振りながら消えていった。やっぱりあの子は神様なんだな、と、今更ながら気付いた。

「私次第か……」

空を見上げる。どんよりしていた空は、今はもう澄みきっていて、一番星が見えていた。

「天音！ 置いてくよ！」

「ごめんごめん！」

私は急いで靴を履いて駆け出す。今日は綺麗な青空で、雲一つない晴天だ。

「天音が戻ってきてくれて本当に嬉しいよ。また一緒に遊べるね！」

「そうだね」

結局、私は長野に戻ることに決めた。私にとっての救いとなる人たちと一緒にいたい、自分でしっかり考えて決めた結果だ。そして、やはりここに戻ってきて正解だったな、と思う。自分らしくいられる場所は、やはりここだと実感できた。お父さんは仕事があるため東京に残っている。けど、私とお母さんはたまにお父さんのいる東京に会いに行っている。やっぱり東京に行くとしんどくなってしまうが、最近は大分慣れてきた。何回か葉山さんも見たことがあったが、あっちは私に気づいていない。多分、私のことなんてもう覚えてもいないだろう。けど、それでいい。もう私は、かつての来栖天音ではないんだ。

「天音、東京行って、ちょっと変わったよね？ 気のせいかな」

「気のせいなんじゃないかなあ」

友達には、私がいじめられていたことは話していない。心配させたくないし、何より私とその話をしたくなかった。も

うそれは過去のことだと割り切って、私は今、新しい人生を歩んでいるんだと考え、忘れようとしている。

「あ、そうだ天音。この話知ってる？」

「ん？」

「この町に、光信神社ってあるでしょ？」

「うん。あの山奥にあるやつだよ」

「あそこに祀られている神様は、救いの神様なんだけど、その神様、数百年に一度、神社の祠から出てきて、困っている人の前に姿を現すんだって」

「へ、へえー……」

「なんか、どこかで聞いたことのある神様だな。」

「その神様って、どんな姿なの？」

「色んな姿らしいよ。背の高い女性だったり、ガタイのいい男性だったり、小学生くらいの女の子だったりするみたい」

「な、なるほど……」

小学生くらいの女の子……。私はミアの姿が出てきたが、直ぐに頭を振ってそれを追い払う。そんな訳がない。まさかミアが光信神社の神様だなんて、そんな偶然あるわけない。「まあ言い伝えだからねえ。ほんとのことは分からないよ」

「だよねえ」

所詮は言い伝えだと、私は思うことにした。

その日の夕方。私は一人で光信神社に来ていた。友達から聞いた話を信じている訳じゃないけど、何となく来てみたくなかったのだ。

拝殿の前に立ち、お賽銭を入れて手を合わせる。この神社の神様はミアじゃないかもしれないけど、救いの神様っていうくらいだから、知り合いかもしれないと、私は感謝の気持ちで伝える。

「ありがとうございます」

礼をして、帰ろうと振り返る。そのとき、風が吹き、それに乗って声が聞こえてきた。

『生まれ変わりたい？』

ミアだと一瞬で理解する。姿は見えないが、確かに声が聞こえる。私はふっと笑って拝殿を見る。ここの神様は、ミアだったみたいだ。私は小さい頃からこの神社にお参りに来ていたから、ずっと私のことを見ていたのか。どうりで君のことなら何でも分かるよって言うわけだ。

「そんなの決まってるじゃん」

私は今までで一番の笑顔で言う。

「生まれ変われたよ、ミア！」

また強い風が吹く。目を開けると、山の奥から覗く夕陽がミアの眼みたいに真っ赤で、嬉しそうに笑っているように見えた。

# 桜の息吹

県立甲南高等学校 二年

富田 恋羽

―関東地方は、おおむね晴れるでしょう。九州地方は、季節外れの暑さとなりそうです。―

食パンをかじりながら、朝の天気予報を眺める。鶯がどこかで鳴いた。

―それでは、桜の満開予想日を見ていきましょう。―  
私はふと彼女のことを思った。また逢えたらいいのに、と心が言つて、私の意識はあの陽だまりの中にいる。

丸天井の下には大きな桜の木が咲き乱れ、小さな花びらはその一つ一つに命があるかのように舞い散り、床に散らばったガラスの破片は木漏れ日に反射してきらきらと地面を彩る。静かな陽の光は私の肌に斑点模様をつくつて揺れ動き、海底から水面を見上げているような感覚になる。そこに突然、彼女は現れるのだ。長い黒髪はさらさらと流れる小川のように白い肌はまだ溶け残っている雪のように、そして、彼女の着ている、着物ともドレスともつかないような服は、折り重なった透き通る桜の花びらのように、美しい。彼女と逢うのが何度目であっても、眩暈に似た恍惚感が訪れるのだ。恍惚―

確かに、別の意味でも恍惚なのだ。意識がぼんやりしてはつきりしない。どうやって彼女と決まって年に一度出会っていたのかもわからないし、あの場所がどこなのかも思い出せない。

「お姉ちゃん、箸、止まってるよ」

妹に声をかけられ、はっと我に返った。食卓に目を落とすと、花束が飾られてあるのが視界に入る。差し込まれたカードには、『十八歳、誕生日おめでとう！』と書かれている。もう十八になったのか。他人事のようにぼんやり考えた。

小さくため息をつく。

そう、先ほどまで考えていたことはあくまで夢の中の話なのだ。小学生の幼い私が見ていた夢。だから、そういうファンタジックなものから卒業した中学生になってからは、ぱたりと彼女と逢うことがなくなったのだ。いや、あの夢を見なくなったと言った方が正しいか。

「いつてきます」

今日も電車で揺られながら、山を越えた都会まで。あの陽だまりとは程遠い、忙しく冷たい都会だった。

「俺、昨日の夜、すげえ怖えもん見ちゃったんよ」

「もしかしてお前もあれか？ 例の黒髪の女」

「そうそう。白い着物に、ながい黒髪の」

「そういえば私も見た。血が流れてたから、私、声をかけたの。そしたら急に立ち上がって、何かよくわからない言葉を



発しながら私の方に歩いてきたから、もう本当に怖くて怖くて。全速力で逃げたわ」

「しかもその幽霊、俺が見た時は道に落ちてる花びらをゲロ吐きながら食っててクソ汚かったぞ」

「やだあ。あはは」

私は机に突っ伏してクラスメイトの話す声を聞いていた。幽霊なんて馬鹿みたいだ。高校生にもなって、まだそんな話で盛り上がっているのか。誰が本当のことを言っているのかもわからないのに、よくもまあ信じられるものだ。幽霊とか妖精とか精霊とか、そんなものは子供を喜ばせるための作り話、あるいは幻想や妄想だ。もちろん実在なんかしていない。

そう、私が幼い頃に夢見ていたあの場所も、彼女も。

「—はい、じゃあ、資料の百五十六ページを開けて。そこに載っているのが、古事記に書かれている神様の絵だ」

眠気が体にのしかかる日本史。半分しか開いていない目で神様たちを眺めるも、どれも同じように見えた。

「そうだ、今日は桜の満開日だそうさ。図六を見てごらん。この神様はコノハナサクヤヒメといって、桜の語源となっている神様なんだ。桜の如く華やかに咲いて、桜のように儂く散った絶世の美女と言われている」

しかし、その絵に目を滑らせたところで、私の目は大きく開かれた。

幾重にも折り重なった、透き通る衣。咲き乱れる桜の下、

雲の合間で舞い踊るその姿は顔立ちは異なっているものの、彼女としか言いようがなかった。

でも、そんな。これはきつとただの偶然だ。夢に見たことのあるような景色に遭遇することだって、たまにあるって言うではないか。

しかし、資料の絵の中で微笑むコノハナサクヤヒメの口ははくはくと動きだし、私に語りかける。

—貴女が十八の時を数えるとき—

私は虚を見つめ固まってしまふ。回線速度の遅いネットワークのように、ありもしない記憶が頭の奥からゆっくりと流れ出す。

—この桜の花はもう…：私…：から—

肝心な部分にかかるノイズに苛立ち、頭をかき乱す。どうしてこうも思い出せない？ あの大きな桜の木の下、少し寂しそうな顔の彼女は何を言った？

教室の開いた窓から風が吹き込む。どこかで雷が鳴った。

私は思わずはっと顔を上げた。

「私たち、ともだちだよ」

誰も買わない自販機。東に回って手前から二番目と三番目の木の間。山道。川。坂道。小鳥のさえずり。木漏れ日。トネル。

陽だまり。

すべての記憶がよみがえる。

気が付けば走り出していった。

あの山へ。あの館へ。

雷雨の中、私は大通りを駆け抜ける。過ぎ去る車のヘッドライトや信号機が反射して、濡れた道路を彩っていた。

歩道に沿って植えられている桜はどれも中途半端にしか咲いていない。今日が満開日のはずだが。でもそれは彼女がずっと前から知っていたことなのだ。

もうすぐで駅に着く。せわしなく歩く人々にぶつかりながらも、私は先を急いだ。

その時、視界の縁に何かが映った。

立ち止まる。路地裏の方だった。

足を踏み入れると、分厚い雨雲のせい、途端に薄暗くなった。人気のない路地裏では一本の桜の木が電灯の灯りによってまるで光源であるかのように輝いている。

そして、そこにうずくまる人がいた。

白く長い裾はアスファルトに押し付けられてすっかり泥に染まり、雨に濡れてその足に絡みついていている。袖の辺りは赤い。それは内側から染み出ているようにも見えた。白と混ざり合った赤は、薄い紅色になっていくつかの筋をつくる。長い黒髪で顔が見えない。肩を震わせながら必死に何かを貪っていた。

学校で話題になっている彼女。そして、私がずっと探していた彼女。

「よしの……？」

彼女は動きを止めた。強く握りしめられた拳には折られた枝と花弁があった。

ゆっくりと振り向いた彼女はひどくやつれていた。

「あき……」

たった一言だけ零して、目を落とした。

「ねえ、何をしているの」

私の問いかけに無視をして、彼女は手に持つものを再び食べ始めた。嗚咽交じりにただひたすら口に詰め込んでいく。時折彼女の体内から吐き出される花弁は唾液や胃液と混じって道路を汚した。つんと鼻を突くような香りと美しい香りが広がる。それでも尚、彼女は食べ続けた。

「ねえ、もう止めなよ。何故そんなことをしているのよ」

私はよしのの肩を掴んだ。その肩は私が思っていたよりも華奢——というよりも痩せ細っていた。もう少し力を加えたら簡単に折れてしまいそうで怖かった。

「ねえ、あき。私、もうだめなの。昔、貴女に話したじゃない」

「……」

雨水が地面に叩きつけられる音が大きく聞こえた。

「ほら、見て。私の腕」

袖を捲ると、細いその腕の表面には青白い毛細血管が鳥の巣のように絡みついていていた。見てみるとそれは皮膚を破って破裂して、飛び散った血液はぼたぼたと赤く服を染め上げた。すると新たな毛細血管ができあがり、うごめいて、また絡ま

った。いずれこれも破裂してしまうのだろう。そしてそれは腕だけではなく、両方の脚も同じようになっていた。

「それにね、私、わかるの。だんだんと内臓が消えていくのが。空っぽになるの」

突風によろけてよしのは笑う。慌てて抱きかかえた。その軽さに私は驚く。本当に、中身が無いような軽さだった。

「そんな……。でも……。どうしてあなたは桜を食べているの」  
「私はもうじき全て切断されて死ぬわ。私は少しでも長く生きたい。ただそれだけよ」

「死ぬなんてまだわからないじゃない」  
「それは貴方の方がよく知っているはずよ」

「……どうということ」

よしのは優しく微笑んだ。でもそれが心からの笑顔じゃないことは容易にわかった。

「貴女、まだ完全には思い出せてないよね。続きはあちらで話しましょう」

よしのはそう言うと、私にはここから見る事ができない、あの山の方を指さした。そして私の手を引いて歩き出す。昔もこんな風に二人で歩いたことがあったなど、波立つ心とは裏腹に、頭ではそんなことを思い出していた。

ふと、よしのは振り返って言った。  
「そうだったわ。あき、お誕生日おめでとう」

館は私の記憶の中のものとは変わりにはなかった。相変わらず

微睡むような空気が館全体を包んでいて、それが今は鬱陶しかった。

しかし、大広間に入り私は啞然とした。

そんな私を無視して、物語を読むような口調で彼女は話し始める。

時は江戸末期、十八になった日に、私はこの館に連れてこられ、「ソメイヨシノ」の神として、この館に祀られるようになりました。なぜなら私「染井吉野」自身が「ソメイヨシノ」だったからです。人間の姿かたちをした、桜の魂とでも言いましょうか。それが私であるそうなのです。名前がその桜の木の名称と等しいのもこのためだそうです。理解し難い話ですが、実際、「ソメイヨシノ」というこの大きな桜を見上げてみると、確かにそこには大きな私が立っているのです。

驚愕するも、館の外には出ようにも出られませんので、私はこの事実を受け入れなければなりませんでした。

それからこと、全国的に私が植えられ、染井吉野は桜の代名詞となりました。

そして、何十年もの時が経ち、貴女が初めてここに來たのは今から十一年前。本当に久しぶりのお客様でした。

しかし、毎年桜が満開になると訪れる貴女を見て、なにか様子が異なっているのを感じました。それと同時に、体のあちこちが痛み始めたのです。長い年月を経て、ソメイヨシノ——私は天狗巢病や中身の腐敗を患っていたのです。

現界の人々は醜く危険な状態になった私を切断していきました。私という本体は、最後の一本が切り倒されるまで死ぬことはないのですが、痛みだけは感じるのです。痛みとも感じました。

私はもうじき死ぬと。

そして、私が切り倒された場所には、別の桜が植えられました。

『ジンダイアケボノ』

その花は、私よりも赤みが強く、白に近い色をした私よりも鮮明で美しいように感じ、血色の良い肌付きのあの子に似ているように思えました。

貴女の名前はやはり「神代曙（かみしろあき）」でした。貴女が私の跡継ぎなのです。

五年前にそのことを伝えられた貴女は、それを聞いて泣き叫びました。そして、もしも本当にその日が来るのなら、その日まで忘れていたいと言いました。だから私は、その通りにしたのです。

よしのは、ようやく口を閉じた。

私とよしのは、大きな桜の木を見上げた。赤みの強いその桜は私の目には私が立っているように見える。よしのはどんな感情でこの桜を見上げているのだろうか。

そして、あんなに憧れを抱いていたコノハナサクヤヒメの衣だったが、身に着けられたその服は、ただただ重たいだけ

だった。様々なものが私の肩にのしかかっていた。

「あき、全て思い出せたかしら。私は次々に切断されて、そこに貴方が生まれているの。貴女の存在は私の死なの。貴女はジンダイアケボノ。これからの世の中、桜の代名詞は貴女になるわ」

「あなたは…あなたはこれからどうなるの」

「私はもう神様じゃなくなったの。かといって、人間でもない。私は私の最後の一本がなくなってしまいうまで醜い妖怪としてこの世を彷徨う…。私は私を食べ続けるの」

彼女は赤い血液を滴らせて笑う。それは悲しさを象徴していた。

「私は、このままここに祀られるのよねージンダイアケボノの神、だから…」

「ええ、そうよ」

「よしのちゃんは、もう此処には来られないの」

「…ええ。こんな場所、早く出たかったから良かったわ。何処にも行けないなんて、窮屈なもの」

よしのはそっぽを向いた。どんな表情でその言葉を告げたのか、私にはわからない。

「私、もう行くわね。これから先、頑張ってるね」

「待って！」

去っていく後ろ姿を私は呼び止めた。

「私、あなたと出会えて本当によかった。私、毎年あなたと会えるのをとても楽しみにしていたの。よしのは本当に綺麗

で、素敵で。私はずっとあなたのこと、夢の中で会えるお姫様だと思ってた。でも夢じゃないってわかって嬉しかった。お花見の時期には日本中の人々の心を上に向かせるよしのを、心から尊敬してる」

よしのは黙って聞いていた。時の流れる音が聞こえてくるようだった。

「ねえ、私たち、約束したでしょ？」

私はいつかのように彼女の小指に自分の小指を絡ませて言った。

「私たちは友達。必ずまた会いましょうって」

よしのの目から大粒の雫が流れた。長いまつ毛の間から流れるその涙は、白い花びらにのった朝露のようで、どこまでも繊細で柔らかくて清らかで、美しかった。それからよしのは言った。

「あき、私も貴女に出会えてよかった。貴女と過ごす時、私はとても楽しかった。窮屈で何の変化もないこの場所に、貴女は様々なお話を残してくれました。本当に素晴らしい時間だったわ」

目を見つめられながらそう言われて、少し顔が赤らんだ。桜の木がざわざわと揺れた。

「私ね、ずっと死ぬのが怖かったの。醜くなって朽ち果て、殺されてしまうのが怖くて仕方なかった。でも、貴女と話せて、私が生きていたことに意味があったことを知れて、心が軽くなった。死ぬことは怖いけれど、今まで何十年、何百年

と生きてきたんだもの。寿命の最後に貴女と出会えて、私は限らない幸せを感じているわ」

よしのは私の手を強く握りしめ言った。

「貴方の方こそ、今、悲しみや寂しさを深く感じていると思う。私もそうだった……。突然現界との交流を絶たなくてはならないなんて辛いわよね……」

その言葉に私も涙を誘われる。溜まっていたものが溢れだす。その背中をよしのは優しく包んだ。

「大丈夫。私はずっと貴女のことを想っているわ。それに、貴女という新しい色で彩られ、春が作られていくこの世の中を見るのがとても楽しみよ」

私は何度も頷いた。それは、自分自身に言い聞かせ、この運命を受け入れるためでもあった。涙は止まらない。いろんな感情が一気に押し寄せて、何に對して泣いているのかもわからなかった。ただ、とにかく、寂しいのだ。

彼女は手をほどく。そして言った。

「私たちは友達。必ずまた逢いましょう」

あれから何度年号が変わったことだろう。私の記憶はあの時で止まっていて、気が付けば感情も波のない大洋のように穏やかになっていた。

それでも、何故か時々、涙がほろりと零れ落ちてしまうのだ。

それはそれは、美しい花びらの舞だった。



いただきます。

県立鹿児島中央高等学校 二年

久雅 永遠

いつからだろう。

食べ物を見ると、吐き気をもよおすようになったのは。

母が言った。

「食べ物全てに命があった」と。だから、感謝して頂く。そのため、「いただきます」という言葉がある、と。

その瞬間、私は自覚した。

命あったもの——私と同じように呼吸をし、心臓で身体中へと血液を送り出し、脳ミソでものを考える——を命ある自分是一部にして生きているということ。

家族で食事をする。その時必ずみんなで「いただきます」を言う。

私は弱々しく震えた声でそれを言い、ごめんなさい、ごめんなさい、と心の中で唱えながら口に運び咀嚼する。

そして逆流してきそうな胃液を押し込むように飲み込む。母に「食べ物全てに命があった」と教えてもらってから、

私は食べることに罪悪感を覚えるようになっていった。なるべく食べないようにし、生きるために最低限必要な分だけ食べるようにした。

私たちの食べ物を用意するのは母でも父でも無い、家族でもない、知らない人。

私たちが食べ物にありついている姿を見ると、満足そうに、にんまりとした顔をするから、少し不気味だ。

しかし、家族みんなで過ごさせていて、比較的満足な生活が出来ているから、食以外のことについては、私は私なりに幸せを感じては、いた。

ある日のこと。

私がいっものようにしつかり食べないから、とうとう痺れを切らしたのだろうか、母が怒った。

家族一緒にいるためにはそれしか選択肢が無いと言う。

その後も食物連鎖がどうのこうの言っていたが、耳を通り抜けていった。

でも、正直、父も母も兄も私の二倍くらいの体重がありそうに見える。もう少し痩せてもいいんじゃないかと思うくらい。

まあ、そもそも食べる量も多いのだけれど、加えて私が食べない分も食べているせい、ぶくぶく体重が増えていく。知らない人は最近、食べ物を用意しながら何か言っている



感じがしたが、理解できなかったので気にも留めなかった。しかし、母や父は食べないとダメだと、家族のためにそうしろと、口うるさく言う。

いつもの通り謝罪の言葉を心の中で唱えながら食べ物を口に無理やり押し込み、軽く咀嚼して喉に通す。そうしていると、今度はいつも何も言わない兄が口を出してきた。

「お前、俺たち家族をバラバラにしたいのか？」

「どういう、こと？」

「もう、いいよ」

「なに？ 言ってくれないとわからないよ」

「だから、もういいんだって」

私がさらに追及しようとする、

「お前の代わりなんていくらでもいるんだぞ！」

突然の怒号に私は体を飛びあがらせる。いつもは母と一緒に軽く小言を言うてくるだけなのに。

急に怒ったと思ったら、すぐに気をしばませ、

「でもな、父さんはお前が大切なんだ……」

聞こえるか聞こえないか分からないくらいのか細い声。

私は聞こえなかったふりをして、そのまま眠りについた。

目が覚めると、妙な満腹感があった。

口の端々に、少し粘ったとした液体と、食べ物の滓がついて

いた。

まさか。

家族の方に目をやると、手に食べ物がついていた。

寝たら無理やり食べさせられる。

しかし、睡魔には抗えずその日から毎日のように目覚めると腹には満足感があった。

私の体は、咀嚼が終わると条件反射で食べ物を飲み込んでしまうらしい。

私の体重はみるみる増えていった。

家族一緒がいい。

でも、食べ物を食べることは私にとって、毎回十字架に磔られるような思いをする行為だった。

それに、私が生きていたら、助かる命が助からない。

家族のために、食べ物たちのために、私は死を決意した。

死を……決意した。しかし、死とはどうすれば来るものなんだ？

どうしたら死ぬる？

私には分からなかった。

食べ物をくれる知らない人が、私たち家族を動くものに乗

せてどこか知らない場所に連れていった。

その知らない場所の知らない人と、何か話し始めた。

「—なひんしゅで——」

「これは—で——するのがいいですよ」

ひんしゅ？ なんだろう。聞いたこともない。

「家族一緒に良かった」

母がもう悔いはない、とその口調で語る。

何？ 何の話をしているの？

「次もまた家族だ」

父が独り言のように言う。

「バラバラになっても、ね」

兄が声を震わせながら言う。

「それでは、しゅつかじゅんびにはいらさせていただきます」

しゅつかじゅんび？

そう言うと、知らない場所の知らない人は私たち家族を—

且家に似た場所に入れて、まずは父を呼び出した。

「私が最初か。じゃあ、少し先に待っているよ」

父は帰ってこない。暫くして母が呼ばれる。

「じゃあね。家族一緒にいれて過ごせて本当に良かったわ」

父は帰ってこない。母も帰ってこない。また暫くして兄が

呼ばれた。

「俺が先だったか。寂しいかもだけど、すぐにこっちに来れ

るさ。じゃあな」

父は帰ってこない。

母も帰ってこない。

兄も帰ってこない。

暫くして、私が呼ばれた。

何かの台に乗せられた時、肉の塊が見えた。

ああ……。

包丁が振り下ろされる。

その時、私はやっと理解ができた。

私も、食べ物だったんだ。

## 話売り

県立鹿児島中央高等学校 二年

四元 綾音

「そのアナタ、お話一つ如何です？」

夏の夜空に街灯が灯り始めた頃、街の大通りを歩いていた僕の足は僕の意味に関係なく動きを止めた。声は立っている僕よりも下のほうから聞こえる。

「おや、聞いてくれるのですかな？」

男とも女ともつかず、それでいて甘美で聞き惚れてしまうような、不思議な声はまたしても僕に話しかけた。僕は視線を落として声の主を見た。

その人は虫襖色の少し長めの髪を軽くまとめ、全身黒い服を纏い、地面にさも当然のように座っていた。顔はお世辞にも血色がよいとは言えなかったが、随分と整っている。見ただけでは性別どころか年齢すらわからない。その人は切れ長の深い藍色の目でにやにやしなから僕を見ていた。話し方にも少し違和感がある。

ふと、暗くて深い、僕なんかでは全く見当もつかないほど果てしなく続く海のイメージが僕の中を巡った。

固く閉じていたはずなのにいつのまにか乾燥している口を開き、その人に向かって、

「聞きたいです」

と、僕は言った。その人は嬉しそうに、それでいて返答を悔やむほど不気味に笑った。そしてサッと立ち上がり、僕についてくるように言った。僕の足はやはり僕の意味で動いてはいないように感じられた。

しばらくついていくと、「裏道横丁」の看板を下げた、明らかに入ってはいけないであろう道に着いた。中は真っ暗で、朽ち果てた自転車や横転したまま放置されていたり、割れたビール瓶とその破片が散らばっていたりなどしている。流石に意思が通じていないと思われていた足も、明確すぎる危険に感じていくことを躊躇って、立ち止まった。

その人はくるりと僕のほうを向いた。

「アナタ、よくここまでついてきましたねえ。それでは、ワタクシの自己紹介でもさせていただきますよう」

先刻までの怪しく、人間なのかも疑うほどの雰囲気は少々薄まり、緊張が少し緩んだ。

「ワタクシ、名前という名前はございません。しかしながら皆様、ワタクシを海やら深海やらとお呼びになります。故、お好きなようにお呼び下さいな」

僕の思ったイメージはやはり万人にもそう感じられるようだ。だんだん雰囲気だけでなく話し方の違和感も減り、砕け

た感じになってきた。海は話を続けた。

「いやあ、数か月ぶりですなあ、新しく話を聞きたいと云った人は。街の皆様はお声がけしても見ず聞かず、ですから。ワタクシ、話売りという仕事をしていましてね。こちらに求めるのもこちらが求めるのも「話」という、普遍的な商売というよりは遥か昔の等価交換に近いのですよ。で、こんなところまでついてきてくださったのですから、当然もう帰る、などと哀しいことは云いませんよなあ」

話の終わりと同時に、海は先程の不気味な笑顔をこちらに向けられた。職業の話まで聞いたあたりで、あまりの怪しさに僕は帰りたくなってしまっていた。しかし最後の最後で帰る、という選択肢はいとも簡単に塞がれ、僕は恐怖と後悔の狭間で力なく頷くよりほかなかった。

海に手を引かれて裏道横丁に入ると、足元には先刻まで遠くから眺めていた割れたガラスの破片や、見えなかった黒いごみ袋の小山があった。しかし入ってみればそれまでで、喉元に心臓がやってくるほどの恐怖―などは一切なく、非日常的な愉快さが僕を迎え入れた。ほんの数分、或いは数十秒だったかもしれない。進んだ先には引き戸の入り口に暖簾が揺れる懐かしさを持つ家のような店があった。

暖簾を揺らして中に入ると、居間であろう場所に二つの座布団が卓袱台を挟んで向き合わせで置かれていた。あまりに日常とかけ離れているすべての事象に僕は気分が高揚してい

て、今や好奇心などの感情が心を占領していた。海は奥のほうの座布団を指さし、

「それでは此処に座ってくださいいな。まずはアナタのことを少し聞かせていただきましょう」

と、言った。それに従って僕は座布団に正座し、海が目の前に置いた程よい温かきの緑茶を一口飲んで、随分遅めの自己紹介を始めた。

「僕は森木カイです。歳は十六で高校一年生」

そこまで言って、僕は固まってしまった。これ以上何も言うことがないのだ。少し下に向けていた視線を前に戻すと、海は古そうな紙を麻糸で綴ったノートにメモを取っていた。

困ってしまい、僕が外のほうを向こうとすると、海は、「それでは、こちらをご覧ください、聞きたい話をお決めになってください」

と、急に丁寧な物言いになり、「品書き」と達筆に書かれたノートを手渡してきた。中には話の題名と思われる項目が並んでいた。初恋の人を殺めてしまった話や愛に縛られている人の話、死にたがりな人の話、等々。

僕はその中で、虹を追う人の話に惹かれたのでそれを指差した。海は、

「その話でしたら、対価としてアナタが今までで一番怖かったことについての話をお聞かせいただけます。それでは、ゆるりと」

そう言うと、部屋の明かりは薄暗くなり、僕は静かに目を

閉じた。海の不思議な声で、物語が始まった。

「虹というものは、今も昔も、人々を魅了する存在でありませぬ。しかしながら人という生き物は少々度が過ぎる節がございます。これは、虹を追いすぎた人間のお話です。」

ずっと、昔のことでございます。ある男は旅をしていました。男は名をケイといい、旅の目的は虹の根元に行くことでした。ケイは旅人同士の中で「変わり者」として有名でございました。

その理由は、齢二十五にして虹を追うと真剣に話しているということだけでなく、虹が立つと人柄が豹変するというところもあるのでございます。気さくで笑顔を絶やさぬような人間が、雨が上がり虹が立つと何かに取り憑かれたように虹のほうへ駆けて行くのです。傍から見れば奇人と言われても仕方ありません。

ある時、半日も大雨が降る日がございました。ケイは丁度山を越えていましたので、近くの大木の下で雨宿りをすることにしたのです。そこにはもう一人物売りの男がおりました。その男と世間話をするうちに、ケイの旅の話になりました。ケイはこの男も自分の話を笑うだろうと思っておりました。しかし、男は神秘的な面持ちでケイの話を聞き、最後に、『お前さんが虹を追うのは勝手だが、あまり寄ると良くない。物事には適度な距離ってもんがあるんだ。気をつけろよ』と言いました。ケイは初めて真面目に話を聞いてくれたと

いう事実ばかりに気を取られ、男の忠告をうっかり聞きこぼしてしまったのです。

しばらくして雨が止むと、空には大きくて美しい虹が立っておりました。しかもケイから見て、虹の根元はほんの少ししか離れていないように感じられました。物売りの男は、『随分と近くに虹が立ったな。俺はここで失礼するよ。くれぐれも距離を間違えるなよ』

と言うと、その場を離れて行きました。ケイは男に礼と別れを告げ、大急ぎで虹の根元と思われる場所へ走り出しました。走って走って、そしてついに虹の根元に辿り着いたので。

ケイはあまりの嬉しさに男の最後の警告さえ忘れ、虹の根元に手を伸ばしました。

虹に手が触れたその瞬間、ケイの左目に、激痛が走り出しました。目玉が焼けるように痛いのです。ケイは虹から離れ、しばらくの間痛みに悶えておりました。

長く辛い痛みには耐え、強く瞑った目を開く頃には虹はすっかり消えてしまっておりました。ケイは自身の眼球の無事を確かめるために近くの水溜まりを覗き込みました。結果から申しますと、ケイの目玉は不思議な変化をしておりました。痛みが襲ったほうの目の色がくすんだ虹の色をしていたので。この目が及ぼす影響がどのようなものかはすぐにわかりました。目に映る世界の色がくすんでいのです。しかし、それだけではありませんでした。ケイは虹を視認できなくなったのでございます。虹が立っていることも、どの方向にあ

るのかもわかるのに、見ることでできなくなってしまったのです。これはケイにとって大変なことでした。虹をこよなく愛するケイにとって、虹を見ることができないというのは何よりも辛いのです。

しかし、どうしようもございませんし、何よりケイの旅の目的は果たされております。そこでケイは自分の故郷に戻ることにいたしました。当然、変色してしまっただけは人目に触れぬようにしなければなりません。ケイは持っていた包帯を左目に巻き、ゆっくりと故郷に帰る旅を始めました。運の良いことに、ここから故郷までさほど離れておりませんでしたので、半年も歩けば故郷に着けるはずでした。

ところがケイは道中、大変魅力的な女性に出会ったのです。そして、そのまま出会った町で夫婦となりました。女は朗らかで、慈愛に満ちておりました。籍を入れる前、ケイは自身の左目について話をいたしました。女は微笑んで、『そんなの、私が貴方を愛することを辞める理由になんてありません』

と切り切ったのです。そうして長くケイと女は仲睦まじく過ごしておりました。

しかし、二人の間に生まれた子は、色を認識できませんでした。ケイは、過去の自分が受けた虹の呪いを子にも背負わせてしまった罪悪感で心の臓をぎゅうっと握られているようでした。

そうしてケイは、我が子が大人になる頃に失踪してしまい

ました。ケイの妻と子は必死に探しましたが、翌年の大雨の後、ケイの水死体が発見されました。その日の空にはひと際大きく美しい虹が立っておりました」

物語が終わると、僕はゆっくり目を開けた。海はニコニコと僕を見ていた。しばらく話の余韻に浸ってから海は、「カイ様、いかがございましたか。これは百五十年ほど前にワタクシの曾祖父が聞いた実話であるそうでございます」と言った。僕はこの話が本当のことだと信じ切ることはできなかったが、とても面白かったのは確かだ。

「とても面白かったです。鮮明に映像が浮かんできました」と、少ない語彙力で僕なりに精一杯伝えてみたが、伝わったかどうかは定かでない。すると海がノートと万年筆を手に取り、僕に、

「それでは対価として、アナタが今までで一番怖かったことについてお話を聞かせてください。ワタクシの品書きに新たに加えていただきます」

と云い、僕は今までで一番怖かったことについて話すこととなった。

「僕、今年の少し桜が咲き始めたくらいに家族旅行で京都に行っただけです。父さんと母さんと、僕と妹で。それで、桜の木の下で川下りに参加したんです。その時の船頭のおじさんは怪談話が好きで、僕の家も怖い話は好きなので船頭さん



の話聞いていたんです。それは、満開の桜の木の下を川下りしている最中に人が水面に吸い込まれるように落ちてしまふという話でした。僕たちが通っていた川で数回起こった事件らしく、桜が咲き始めると、この川下りは一時的に休業しているのだそうです。

幽霊などの話とはまた違った怪談話でしたが、川下りを終えて旅館で夕食を食べ終えた頃にはすっかり忘れてしまいました。それから、慣れない土地で疲れてしまったのか布団に入つてすぐに寝てしまった僕は、深夜一時頃、父さんの呼ぶ声で目を覚ましました。父さんは、

『か、母さんがいないんだ。カイ、知らないか？』

と、かなり慌てた様子で寝起きの僕の肩を掴みながら言いました。母さんの行方を知っている人は僕含め、一人もいませんでした。それから妹を起こして、警察に捜索願を提出して母さんの捜索を始めました。

起こされてから一時間が過ぎた頃、ふと船頭さんから聞いた話を思い出し、あの川に向かいました。何故だか、母さんがそこにいる気がしたんです。僕は慌てながらも連絡用にスマホを持って、必死で走りました。

船に乗った場所に着いた時、そこは昼間に見た光景とは全く違っていました。

桜が、満開になっていたので。

昼に来たときは蕾が少しあるだけだったので、明らかにおかしいと今なら思います。しかし僕はその時、なんて綺麗で

恐ろしい桜だろうかと思いました。母さんを探しに来たはずの僕は、あろうことか桜の妖しい美しさに目も心も奪われてしまっていました。

どれだけの間、桜を眺めていたかはわかりません。我に返った僕は川の下流のほうへ向かいながら母さんを探しました。そして、母さんを見つけたのです。

母さんは、大きな満開の桜の下に浮かんでいる船に座っていました。僕は大きな声で何度も母さん呼びました。返事が返ってこないどころか聞こえている素振りも見せてくれませんでした。とにかく父さんをここに呼ばなければならぬと思ひ立ち、僕は電話で父さんに、

『母さんいたよ！ 川下りしたあの川の大きな桜のところに来て！』

と言いました。父さんは、妹を連れて今すぐ向かう、と言うと電話を切ってしまいました。僕はとにかく母さんの近くに向かいました。

僕は母さんの近くまで行って初めて、母さんの乗った船がなぜかその場から動いていないことに気付きました。水面は風に揺られて幾重もの模様を作り出しているのに、船はまるで桜の木の一部のように、木の下から動かないのです。桜の木は依然として美しく妖しく花をつけていました。だんだん桜の木に対する恐怖が僕の心の大部分を占めていきました。桜の木の下に足を踏み入れ、母さん呼びましたが、母さんの目は僕でも川でもなく、桜を映していました。目と鼻の先

から声をかけているのに反応がない母さんに僕はどうしようもなくなり、川に入って母さんを連れ戻そうと思いました。ちょうど到着した父さんにも伝え、川に入ろうとしたその時でした。

母さんは急に立ち上がったって手を伸ばし、桜の花びらを指先に乗せました。するとどこからか大きな黒い蝶が飛んできて花びらの上に舞い降り、母さんはそれを水面にそっと置きましました。あまりにも唐突で、理解できない行動に僕たちは呆気にとられていました。次の瞬間、母さんは水面から飛び立つ無数の黒い蝶と頭上から舞い落ちる桜の花びらに連れ込まれるように船から川へと滑り落ちたのです。慌てて僕と父さんで母さんを引き上げたので命に別状はありませんでした。

しかし、母さんは布団に入ってから病院で目を覚ますまでの記憶がすっかり抜け落ちてしまっていました。僕たちは警察からの事情聴取である夜の話を話しましたが、母さんが船から落ちたことは単なる事故で、僕たちは目の前で見てしまったショックで記憶が曖昧になってしまっている、ということとで落ち着いてしまいました。何故なら翌朝にはひとひらの花びらすら残らず、まだ蕾の状態の桜の木が川辺には並んでいたため、僕たちの証言は全く信じてもらえなかったからです。その結果事件性もない転落事故として処理されました。

これが、僕が生きてきた中で一番怖かったことです」

僕の経験上一番怖かった話を聞き終えた海は、話している

最中一度も止めなかった筆をおき、  
「大変良い話でございました。カイ様のお母様が無事で何よりでございます」

と笑った。その顔は少し残念がっているようにも見えた。それから僕は、出されていたお茶を飲み干し、家に帰ることにした。海は、

「お帰りになるのですね。それではお会いした場所までお送りいたします。外はもう闇で満たされつつありますし、何より最近は何物騒ですからね」

と言って立ち上がったので、僕も立ち上がり、来た時よりもだいぶ暗くなった生温い風が吹く夏の夜を裂くように、いや、日常と非日常を縫い合わせるように歩いて行った。

明るい街の中、僕と海が会った場所に着いた。僕は振り返り、後ろから着いてきているはずの海に、お礼を言った。

「今日は楽しい時間をありがとうございました」

振り向いた先に海はいなかった。いたはずの海が、いなくなっていた、と言うよりはそこにいるのに見えない感じがした。

「本日はお話一つ、ありがとうございました。縁がございましたら、又お会いいたしましょう。それではお気をつけて」  
いないはずの海の声は僕の頭に直接入り込むように聞こえてきた。来た道を振り返ると、暗くて深い、それでいて少し温かみのある、果てしなく続く海がそこにはあった。

# 大親友

県立鹿児島工業高等学校 一年

谷川 日菜

「ねえあのさ、二人でドラマ撮ってみない？」

いつも通りの発声練習。なんとなく気だるげに、彼女はそう言った。寄りかかった椅子が、ぎしぎしと音をたてる。

「え、ドラマ？ できるかな、私演技力ないし……。先輩に頼んだ方がいいんじゃないの？」

隣で背伸びをして、自信なさげに呟く。渡り廊下から見える空は嫌気がさすほど青かった。

「いいじゃん、せっかく二年生は私たちだけなんだしき。それに私ね、ひまりのお芝居すっごく好きなんだよ？ 脚本はこの大、天、才の沢渡ゆうに任せてみてさあ、二人芝居しようよお。お願いします大親友ひまり殿、撮り終わったらダツツ奢りますので！」

私はため息をつく。いつもこうだ。この沢渡ゆうとかいう少女は、軽い気持ちで重いことを頼んでくる。まあそれを断れない私も私だけどき、なんて自嘲してみる。

ドラマを撮ることには抵抗は無いのだ。しかし、その編集時に自分の下手くそな姿を何度も見るハメになるのは嫌なの

だ。思っているよりも幼い自分の声。不要な動きが含まれた演技。それを何度も流されては、たまったもんじゃない。これ以上の辱めは無いと言っても過言じゃないだろう。

「お願いです、絶世の美女深見ひまり様、一生のお願いですからあ！」

ゆうは椅子の上で体を揺らし懇願する。私はどうにもこの声に弱かった。ゆうとは高校生になってからの友達だが、今まで何度『一生のお願い』を聞いたか。もう両手両足の指では数えきれない。その度に自分のお人よし加減を呪った。

「はあ、わかった。やればいいんでしょ？」

「わーい、ひまりちゃん、マジ天使ー！」

つくづく、人に甘いと思う。昔からそうだった。頼み事を二つ返事で受けては後悔し、また新しい頼み事を受けては後悔しを繰り返してきた。その成果が、学年委員長兼放送部次期部長、なのだ。

ため息をつき、教本を持って部室に向かう。

「ただし。ダツツのこと、忘れないでよ？ ストロベリーとバナラとクッキーアンドクリームね」

「え、待って三つとか聞いてないんだけど！」

ゆうは慌てて立ち上がり、ひまりの後を追いかけた。ぽつぽつと、夕立になりかけていた。

「ねえ、お願い。私が好きな君を、嫌いにならないで」

「やっぱり、諦めないで。君の初恋は、ここで終わらせてし

まわらないで。だって、その恋心は君だけのものじゃないんだから」

「大丈夫、あの子ならきつと、全部を許してくれる。何もかもを赦して、受け入れてくれるはずよ」

「これから先ずっと、永遠に……私だけのものになっちゃおうよ」

ドラマのタイトルは、『大親友』。

高校生のヒヨリとユイが、ゆるりと日常を過ごしていくだけの話。

主人公のユイは、高校二年生で放送部の部長。ごく普通の家庭で生まれ育った、何不自由なく暮らしている少女。天真爛漫だが、物事を考え過ぎてしまう傾向にある。

対してヒヨリは、ユイの同級生でクラスの委員長。人付き合いが苦手で、唯一の友達のユイといつも過ごしている。図書館の主と言われる程に読書好きな少女。

ゆうの作った台本は、至って普通の台本だった。少女二人が、いつも通りの日常を過ごす。結ばれない恋をして、でも諦められなくて。最後は、大好きな人に告白をする。それで結ばれてめでたしめでたし。そんな、ただのつまらない話。

最後は、ユイの台詞で締める。

「これからも、よろしくね？ 私の、大事な、大事な、大親友ちゃん！」

そんな、ただのつまらない二人芝居。

台本自体に不満はなかった。ゆうにしては上手い台本だっ

たのだ。ただ少し、ほんの違和感があった。登場人物が、あまりにも私とゆうに似ているのだ。もし自分がその立場に置かれたら、必ず取るであろう行動。心を映し取ったかのような心理描写。そして、あまりにも都合の良い展開。

「ねえ、ゆう。これじゃ、試写会しても批判の嵐だと思うけど。いいの？ 先生もぼろぼろに言ってくるだろうし、話練り直した方が……」

「いいの、いいの。これは、先輩たちにも、後輩にも見せるつもりないし。ひまりと私だけだよ、見るの」

「それなら、いいんだけど……」  
見るのは、ゆうと私だけ。ただそれだけのことなのに、心のどこかに引っかかっていた。

『ねえ、ひまり。いつもあの子の子守り大変だね』

『あの子って？』  
ドラマの一話を撮り終わった日。先輩からメッセージが届いた。

『もちろん、沢渡ちゃんのこと！』  
「ああ、ゆうのことか」

たしかに子守りかもしれない。クラスでも隣の席なのに、部活でもいつも一緒。休み時間は必ず私にくっついてきて、今まで何度も聞いた話の繰り返し。聞いたことのない話かと思えば「私可哀想でしょ」アピールだったり。少しうんざりしているのは確かだった。

「まあ、子守りかもしれないけど……」

『あはは……』

『大丈夫、私もあの子のこと嫌いだから！』

一体、何が大丈夫なのかはわからない。でも、少し安心してしまったのは事実だった。

『ちよつと、ウザいなって思います』

『だよね？ やっぱりあの子さ、ひまりちゃんに依存してるよね！』

それから延々と続いた、ゆうの悪口のオンパレード。所々共感できるものもあった。

『わかります、あの子、パーソナルスペースが無いっていうか、距離感が近いんですよね』

『だよね！ あとさ、』

その日は結局、零時を回るまで連絡し続けていた。

「おはよ、ひまり」

「ん、おはよ……」

ふあ、と欠伸が出る。

「ひまりちゃん、おねむ？」

「まあ、色々あって」

先輩の愚痴のせいで、寝不足だ。散々人を付き合わせておいて、『眠いから寝る！ おやすみ！』だなんて、傍若無人極まらない。

「おっはよー、ひまりちゃん！」

「わっ……。やめて、ゆう。暑苦しい」

ぎゅつと抱きつかれ、思わずよろける。ストレートパーマをかけた髪が耳をくすぐった。

「あはは、ごめんごめん！ そんなことよりさ、ドラマの話なんだけど、結構うまくいきそう！ ありがと愛してる！」

私には無いぱっちり二重が顔を覗き込む。

「あつそ。よかったわね」

いつも通りの愛の安売りを聞き流す。そんな私には興味が無いのか、ゆうはつまらなさそうに机に戻っていった。

「……ね、ひまり」

「ん？ どうしたの？」

友達が、周りを気にしたように声をひそめた。

「ゆうちゃんさ、なんかひまりに依存してない？ なんかいつもくつついてるしさ、ひまりえらいよね。私なら絶対縁切ってるもん」

「依存、か……」

先輩にも言われた。確かに、依存されているのかもしれない。ずっと私にべったりだ。登校中も、授業中も、休み時間も、昼休みも、部活中も、下校中も……。ゆうと離れる時間なんて、一秒たりとも無い。

「そうそう。ゆうも、ひまり離れればいいのに。ひまりもさ、嫌ならちゃんと言いなよ。伝わらないよ？ まあ、あの子が言われて素直に離れるとは思えないけどさー」

妙に納得した。先輩にも言われたし、たしかにあの子はう



「いい。私が友達と話していると割り込んでくるし、私の椅子を許可なく使うし、べたべたくっついてくるし。」

離れた方が、いいのかも。

「……うん、ちよつと距離置こうかな」

「それがいいよ」

この日から、私はゆうを避け始めた。

ゆうは、私から避けられても特に気にしていなかった。

「ひまりちゃん。ラストシーンの撮影に行きますよー」

「ああ、うん。わかった、今行く」

傷ついた様子も無いし、別にどうでもいいんだろう。

このドラマのラストシーンは、ユイの部屋が舞台だ。ヒヨリがユイの部屋に行つて、ユイの日記を読む。最後のページに書かれたヒヨリへの愛の告白を読み、「私もあなたを愛しています」と言ったヒヨリに、ユイが「これからも、よろしくね？ 私の、大事な、大事な、大親友ちゃん！」と言つて終わる。

「さてさてとうちゃーく。マイルームへよーこそ！」

ぼーっとしてたらいつの間にか着いていたらしい。集中しない。

「じゃ、撮影はじめよっか」

外は、雨が降っていた。

「お邪魔します」

「ドーゾー」

ゆうの部屋は綺麗で、可愛くて……。なんというか、『女の子の部屋』を具現化したような、たくさんのピンク色できていた。バニラの甘い香りがする。

部屋をぎっと見回していると、ふと、目につくものがあった。

「ゆう、これ何？ 首輪？」

「あーうん、猫飼つててき。……ちよつと前に、死んだんだけど。こなつて名前」

淡いオレンジ色の小さな首輪。きつと、可愛い子だったんだろう。

「へえ、そうなんだ。……あれ？」

相槌を打つと同時に、気づいたことがあった。ゆうが髪をかき上げたときにちらりと見えたこめかみが、青く変色していたのだ。

「ねえ、その頭の傷。どうしたの？ あざだよね？」

私のその一言に、何か引かかるところでもあったのか、ゆうの口調がどこかぎこちなくなつた。

「え、あ、うーんとねえ……。その、ぼーっとしててぶつちやつて」

嘘なのはわかりきっていたが、追及してまた依存されても迷惑だ。聞かないでおくことにした。

ゆうを避け始めて、二週間が経った。そのお陰か、ストレ



スを感じるものが減り、ゆう以外の友達と仲良くなれた。だけど、やっぱりなんとなく寂しい。あのハスキーな声を聞かないと、少し落ち着かなくなる。

わがままでなとは理解している。

でも、どうしようもない。

「やっぱり、仲直りするべきだよね」

わがままでごめん、ゆう。でも私、やっぱりゆうとは友達でいたい。

そんな折、ここ最近欠席しているゆうからメッセージが届いた。

本文には、『大親友ひまり殿へ。ドラマ完成したから、見に来てくださーい！ 私の部屋にデータがあるんで、うちに来てねん。部屋の場合、覚えてるよね？ 二階の突き当たりだから、よろしく！』と書かれていた。

ゆうらしい。ちゃんと謝って、また友達に……いや、親友に戻ろう。仲直りができたら、駅前のドーナツでも一緒に食べようかな。ゆう、ドーナツ好きだったし。

空は気持ちが良いほど晴れ渡っていた。

ひんぽーん。

「ひまりです。完成品見に来たよ」

……沈黙。

何度インターホンを押しても、応答はなかった。

仕方なく、ドアを開けてみる。無防備なことに、鍵が開き

つばなしだった。

「あ、開いてる……。泥棒でも入ったらどうするんだろ、あとで言うておかないか」

とんとんと、階段を登る。持ってきたお菓子、気に入ってくれるだろうか。ゆう、と書かれたドアプレート。ここだ。

「ゆう、入るよ」

断りを入れて、ドアを開ける。

「あのさ、ゆう。今まで避けてごめん。友達とかから、なんか依存気味じゃない？ って言われて距離置いてさ。ほんとごめんね、また仲直りしよ。今度さ、駅前のドーナツ食べに行こうよ。ゆうの好きなホイップだったしき。ね？」

そう言っても、ゆうは返事をしてくれない。聞こえるのはエアコンの音だけ。

「ねえ、ゆう、なんか言っ、て」

顔を、上げた。

目の前には、少し浮いたゆうがいた。

ぎ、ぎ、と、縄が軋む音がする。

華奢な体が、揺れている。

さらさらな髪が、顔にかかっている。

ぱっちり二重の目には、生気が宿っていない。

ゆうは、死んでいた。

「……え。待っ、て、嘘でしょ、ねえ、ゆう、なんか言っ

よ、お願いだからさ、嘘でしょ、これドッキリなんでしょ、

ねえやめて、こんな悪い冗談よくないって！」

「どれだけ私が狼狽えようと返ってくるのは縄が軋む音だけ。本当に、彼女は、死んでいるんだ。もう生きていないんだ。」

「と、とにかく、警察呼ばなきゃ……」

震える手で、私は通報した。その場で待機していてください、と言われた。

私はどうしても彼女が死んだって信じたくなくて、生きる証拠を探そうとした。宙ぶらりんのそれに触れた。やはり冷たかった。呼吸も脈も止まっていた。

冷たい肉塊の隣には、『ひみつのほうせきばこ』と拙い字で書かれた日記帳のようなものがあつた。

ただの日記帳だ。だというのに、耳の奥が、どくんどくと鳴っている。読むな、見るなと脳が情報を拒んでいる。

一ページ目。

『人げんになりたい。そのしかくがほしい。おとうさんにやなことされたい、ふつうの女の子になりたい。おかあさん、わたし、こなつと一しよにがんばるね。』

二ページ目。

『人間になるしかくはまだもらえていない。相変わらず、アイツには、いやなことされてるし。お母さんが死んだからって、わたしをはけ口にするこたないのに。アイツはぜっ対ころしてやる。』

三ページ目。

『ようやく、高校生になれた。人間になる資格はやっぱり貰えていない。どうにかして、もう少しだけでも生きてみようと思う。今はこなつだけが支えだ。』

四ページ目。

『ああ無理だダメだもう死にたい死んでしまえばいい死ねみんな死ねあの子以外みんな死ねアイツは絶対殺してやる。』

ページの下には、ぐちゃぐちゃに塗りつぶされて読めないところがあつた。

五ページ目、上段。

『あの子の記憶の中で生きてみることにした。あの子は優しいから、きつと覚えていてくれるとは思うけど、それだけじゃ足りない。私の全部を網膜に焼き付けてほしい。私の全部を見て、知って欲しい。私のことを死ぬまで、いや死んでも覚えていて欲しい。』

五ページ目、下段。

『台本を書いた。我ながらなかなかいいシナリオだと思う。私みたいな女の子と、あの子みたいな女の子。多少現実とは違うけど、まあフィクションだからいいや。』

六ページ目。

『あの子の記憶の中で生きられると考え始めてから、ずっと楽しい。あの子以外はもうどうでもいい。アイツのこともどうでもいい。』

笑顔が至る所に描かれている。

七ページ目。

『ようやくフィナーレだ。小道具も全部用意した。準備万端だ。明日、またあの子がこの部屋に来る。ドキドキしてきた。ドキドキしすぎて、手が震える。こなつ、今行くからね。』  
八ページ目。

『やつほー、ひまり！　ちゃーんと全部読んでくれた？　まあ読んでくれてるよね、だってひまり律儀だもん！　ありがとう、私これからひまりの記憶の中で生きてみることにしたんだ！　これからも、よろしくね？　私の、大事な、大事な、大親友ちゃん！　愛してるよー！』  
好き、大好き、愛してる。愛を表す言葉で余白が埋められている。

吐き気が込み上げた。口の中が酸味で満たされる。  
「え、う、え、おえ、えええ……」

全部、彼女の計画通りだったんだ。私は彼女の手のひらの上で転がされていたんだ。ああそうだ、確かに彼女の計画は遂行された。完璧なまでに。お陰で彼女との思い出は忘れてくても忘れられなくなった。全部が網膜に焼き付いた。

吐いているとき、ずっと彼女の声が頭から離れなかった。部屋中の彼女の跡が気持ち悪かった。少し甘い彼女の匂いも、きついバナラの匂いも、それに混ざる吐瀉物の匂いも、全てが私の神経を逆撫でた。

はあはあと荒い呼吸を繰り返す。その合間にまた嘔吐した。  
「これからも、よろしくね？　私の、大事な、大事な、大親

友ちゃん！」

耳元で、彼女の声が聞こえた気がした。その遠くで、サイレンの音が響いていた。

## 化粧直し

県立川内高等学校 三年

鹿祭 福歩

新しい生活は思いの外、淡々と過ぎていた。

化粧品店での仕事は順調で、休日と一緒に遊びに行ける友達もできた。ただ、一つ、自炊だけはいつまでたっても慣れない。米の磨ぎ汁の白く濁った色、包丁が、まな板叩く乾いた音、味噌の香り。かつて私を幸福にした台所の全てが、今日の私を殴り、蹴る。その痛みと後悔が、じくじくと膿のように私の皮膚の下に溜まっていく。それを引きずりながら、生きていく。

引越してすぐに、玉葱と卵のスープを作った。彼が毎週土曜日に作っていたスープ。一人暮らしの彼の部屋に泊まりに行ったときに、よく食べさせられた。コンソメが効きすぎているのに、甘かった。彼はいつも目をつむって玉葱を切っていた。こうすれば目が痛くないぜ、と言って笑っていた。よく動く彼の指は絶対に間違えない。するりと小さくなった玉葱が鍋に入る。卵、コンソメの素が後を追う。彼の指を思い出しながら真似て作ったスープは、辛くて少しも美味しくなかった。冷めたスープの玉葱の匂いが、私の目につくと沁

みて、涙が出た。

だから私は外食ばかりしている。

彼、高野ゲンとの別れは、夕立と共にやってきた。大学がある町の小さな夏祭り。一年に一度の祭りに、子供も大人も浮き足立って、まだ空が赤いうちから、神社から商店街に続く参道は、屋台や催し物の熱気で溢れかえっていた。

「今日はまた一段と張り切ってるな」

私の顔をじっと見つめる彼の瞳に、私の顔が映っていたので慌てて目をそらす。

「そりゃあ、今日は夏祭りだから……変？」

彼は綺麗な坊主頭を撫でながら、

「……いや、めっちゃカッコエエよ」

黒い眼が人混みに流れていく。

「でも、化粧してないときの方が可愛いぜ」

祭りの熱気で高まっていた私の鼓動が一瞬、冷めた。

「可愛いのは君の頭の方でしょ」

余計なお世話だとかめっ面を浮かべる彼を見て安心する。やっぱり、この人にだけは、本当の私が見えている。嬉しくて、金魚の入った袋を振り回してしまう。アホかと口元を緩めた男の目には、少しだけ焦燥と困惑の色が混じっている。だから私は、もう一度ビニールの袋を回転させてしまった。

小市民たちのどんちゃん騒ぎに引き寄せられた入道雲が参道を覆うと同時に、大粒の雨が、温まっていた地上を冷やし

ていく。とりあえず入った喫茶店は私たちと同じく雨宿りの客で一杯だった。頼んだコーヒーはなかなか来ない。そうこうしているうちに、外では夕日が雨の滴に反射して幻想的なムードを漂わせていた。

やっと届いたブラックコーヒーは結構熱い。けれど彼は臆さずにぐいっと一気にやつつけてしまう。そして、

「俺、彼女できたんだ」

西日が入る窓から水滴を通過した光の筋が、私の化粧の落ちかけた頬を照らしていた。彼の瞳の黒さを初めて知った。

「マジ。おめでどう」

「それでさ、その、彼女が、今日の花火二人で見たいって言うって、だからさ、一緒に見れなくなっちゃうけど、いいかな」

「なんで私に聞くのよー。彼女にあんまり悪口言っちゃだめだよ」

下手に作り笑いするのはダサイ。

「ごめんな。急に話しちゃって」

本当に申し訳なさそうにしているアナタが嫌い。

「あ、じゃあさ部屋の鍵、返しとくよ。彼女に渡して」

まくし立てながら、バッグから冷たい鍵を抜き出す手が、少し震えているのを横目で感じる。情けない手の平に、ぐ、と力を込めてやる。硬くなった拳を彼の目の前に突き出す。

「はい」

「ちよ、待てよ。別におまえが鍵返すこと」

「彼女、かわいい？」

鍵がテーブルに落ちる乾いた音がコーヒーカップに響く。

「……んー、すっぴんのおまえの方がかわいい……かな」

「君さあ」

「いや、彼女も言ってたぜ。この人お姫様みたいーって」

「勝手に人の顔見せんよ」

ニタニタ笑う彼の顔が一瞬、変わった

「でも」

私の、見たことない、顔だった。

「でもさ、おまえよりカッコイイぜ」

良かった。惨敗で。

「あんま彼女を人と比べない方がいいよ」

ダッサイ捨て台詞。作り笑い付き。

顔から引きつり笑いが取れないまま、財布から千円掴みだして無理やり押し付ける。どしたの、と呆氣にとられている彼の顔が、私の目には映らない。

「ま、私からのお祝いで、コーヒー代、ね」

彼に捕まる前に、小走りで出口を目指す。早く、外に出よう。化粧が崩れたのを雨のせいにするために。とつくにどこかに行ってしまった雨のせいに。

朝、目が覚めたら、まず髭を剃る。絶対に、剃る。剃刀の刃が肌の上を滑っていく感覚が好きだから。それに、頭も冴えてくるし、自分が男だということを認識できる。いつだっ

たか、ドキュメンタリー番組で、眠ると全ての記憶を失くしてしまう少女を見た。彼女は、朝起きたときに、自分がどんな人間で、何をしなければならぬかが書かれたメモを見ることが、毎日を生きていた。私の剃刀は、彼女のメモと同じようなものだ。

髭を剃ったら顔を洗って、朝食を食べる。以前は、朝食を抜くことが多かったが、外食や、コンビニ飯が続いているせいで肌が荒れ気味なので、少しでもビタミンが摂れるよう果物を採り始めた。最近はおっぱらリンゴとバナナをヨーグルトで和えたものを食べている。簡素な味は、思い出したくない記憶をちよほどよく中和してくれる。

食べ終わったら歯を磨いて、化粧をする。

私は、子供の頃から、自分の顔が大嫌いだった。初対面の人から「かわいい」というセリフを聞くたびに、吐く息の量が増える。だから私はメイクする。いや、へたくそな神様が作った私の顔をリメイクするのだ。化粧の最後に口紅を塗る瞬間。パズルで最後のピースをはめる瞬間みたいな喜びがある。私の、肌と、目と唇と、鼻と、睫毛、眉。全てが、朝の私を別のいきものに変身させる。高一の春、初めて化粧をして人前に出て、初めて女子の制服を着て学校に行った日を出す。あの日、静かに、そして確実に私の周りの世界は溶けていった。

職場まで徒歩で向かう。バスの一区間位の距離だ。汗をあまりかかず、適度に運動もできる距離だ。前に進むとおきる

風が心地よくて、横断歩道の真ん中で、つい目をつむってしまふ。

私が働いている「ピンクフロイト」という化粧品店は、ちよつと大きいショッピングモールの2階にある。ピンクの看板が目立つ。今日のスタッフは、店長の金倉さんと、先輩の吉村さん、そして私の三人。緊急シフトであまり組んだことのない二人との仕事なので、少し体がこわばりつつも、挨拶をして作業に入る。

「岡崎ちゃんってさあ、やっぱ男の子が好きなのお？」

金倉店長と喋るのは面接以来だ。

「え、あーいや……そーういうの思ったことはあんまり……」

「エーそうなのーじゃあやっぱり女の子？」

「あーいやあ、そういうわけでもなくて……」

「店長―無駄口叩いてないで仕事してください。もう開店ですよ」

裏から出てきた吉村さんが店長をたしなめる。店長はぶつぶつ言いながらも大人しく洗顔料の陳列作業に戻っていった。吉村さんは、やれやれとため息をつきながら、店内のモップがけをしていた私にそつと、「ごめん」と一言残して去っていった。彼女の声は女性にしてはハスキーな方だから、耳元でささやかれるとかなりシビれる。

店に入りたての頃、新人歓迎会の時に、酔っぱらった吉村さんがやたら触ってきたことを思い出す。その時のことを謝っていたのか、店長の絡みのことを謝っていたのか、どっち



なんだろうと思いつながら、濡れたモップを動かしていると、シヨップピングモールの開館五分前を告げるチャイムが、静かで広い建物の中に響いた。戦闘、開始。少しだけ頬をつり上げてモップを片付けに走る。

他のメンバーに戸惑うこともなく、自分の仕事を普段通りこなす。在庫の確認や、レジ打ち、接客、試供品の補充をしながら、店のあちこちにおいてある鏡に、自分が映るのを目で見るに感じる。

「ねえ、岡崎ちゃん。あのお客さんおかしくなあい？」

店長が怪訝そうな顔で尋ねる。彼女が顎で示した先にいたのは、一人の少女だった。水色のゴムで止められた髪は、華々しくピンク色に染まっている。

「そうですか？ 普通にお客さんっぽいですけど」

もしかして万引きでもするような素振りを見せたのだろうか。

「いやねえ、お客さんはお客さんなんだけど、あのコ、もう二時間近く店にいるのよ」

そういえばだいたい彼女の前には彼女の小さい後ろ姿を見たような気がする。

「何かお探しかかって聞いても大丈夫です、って言うんだけど、さっきからおんなじ場所ぐるぐるしてるし、どうしたのかしらねえ」

「私がもう一回聞きに行きましょうか」

「そうしてもらえると助かるわあ。何かあったらすぐ言って

ね」

そう言うと彼女はレジ業務に戻って行った。彼女の背が少し小さく見えた。脳を切り替え、歯磨き粉売り場でたたく少女のもとへ向かう。一瞬の、緊張。

「お客様、何かお探しかかっていますか？」

こちらに体を向けた少女の瞳は、その後ろ姿からは想像できないほど確かな色に輝いていた。どこことなくゲンに似ているなどという思いを噛み殺して、渾身の笑顔で心を開かせようと試みる。

少女の頬はみるみる紅潮し、子供らしい表情に変貌していく。その様は、蝶がさなぎに戻っているみたいで、不思議な感じがして、私はその感情に名前を付けることができなかつた。数秒の沈黙の後、私が口を開きかけた瞬間、少女は店の外に響き渡るほどの大声で告げた。

「滅茶苦茶好きですっ！ 付き合ってくださいっ」

私の中の何かコトン、と音を立てて滑り落ちた。気がした。

「あ、あ、あの、すごいあのカツコよくて、本当にあの、好きなんです。なんか頭の中からアナタの声とか目とか離れなくて、い、言わなきゃ駄目になるって思ってた」

「ありがとうございます」

思わず口から出た淡白な言葉。たった一言だったが、その重さはずしりと私の喉を押した。それは、不快な重みではな

かった。

「あ、でも、今仕事なので……続きは、仕事終わってから  
でもいいですか？」

我に返りつつも、彼女のピンクの髪から目が離せない。

「勿論です！ あ、お仕事中にこんなこと言っちゃって、ホ  
ントにすいません！」

「いえいえ、話しかけたのはこっちですから。あと、名前、  
聞いてもいいですか」

彼女は、リュックをこそごと漁って小さなケースを取り  
出すと、そこから一枚、長方形の紙を取り出した。名刺だっ  
た。

「御手洗カコです。よろしく願います！」

風体に似合わない名刺には、近所にある少し有名な私立大  
学の名が印字してあった。デザイン学科二回生御手洗過去。  
明るい青をベースにした文字が、小さな紙の上で凛と澄んで  
いる。

「大学の課題で作ったんです。あ、過去は当て字です！」

丸い童顔がはにかむ。近所の喫茶店で会う約束をすると、  
御手洗カコは去っていった。喜びを身体の表面から発しなが  
ら。彼女の中の私は、男なんだろうか。女なんだろうか。

「いやー、にしても、こんなところで告白なんてスゴいコね  
エ」

早速、業務そっちのけで飛んできた金倉店長と吉村さんに

囲まれた。

「いや、スゴいっていうか、結構ヤバくないか、その子……  
大学生なんだろう？」

「あたし全然分かんなかったわよお。何なら最初、小学生か  
と思っちゃったし」

二人の会話を右から左に流しながら、彼女のことを思い出  
す。今思うと、なぜあんなにもすぐに彼女と会う約束ができ  
たのか、自分でもわからない。

化粧。あの日の雨で崩れてから、何度やっても、何を変え  
ても、感じなくなった。鏡や、水たまり、ガラスに映る自分  
の顔を何の躊躇もなく見てしまえるようになった。そこに、  
私はいなくなった。

だからこそ、御手洗カコの告白で、初めて腕を掴まれた透  
明人間のように、私の鼓動は高鳴ったのかもしれない。

約束の喫茶店は意外と空いていて、すぐに御手洗カコを見  
つけることができた。二人掛けのテーブルに座っていて、こ  
ちらに気づいてペこりと頭を下げている。鮮やかな前髪が勢  
よく揺れる。

「ウインナーコーヒー二つお願いします！」

店員が立ち去ったと同時にカコは『ピンクフロイト』の時  
よりは数段落ち着いた声で言った。

「改めまして、滅茶苦茶に好きです。付き合ってください」  
「あの、一口聴きたいんだけど」

「ハイっ」

「私の…何が好きなの？」

カコの瞳がほんの数秒落ちる。

「カッコイイ…：…ところですかね」

その先は。

「どういう風に？」

「一つ一つの仕草に、意志があるんですよ。すっごく強い」

「意志？」

「そうです」

カコがほほ笑む。

「アナタは、ココロの中で、いつも戦ってるんじゃないですか？」

「戦い…：…」

「その戦いの中で散る火花が意志で、その熱さに私は浮かされてるんです」

ふと、私の脳裏に記憶の断片が浮き上がってくる。子供の時、何度も女の子と間違われたこと。初恋の疼き。初めて心のままに生きた日に彼らが吐いていた言葉。そして、ある映画のワンシーン。閉じ込めてきた思いと、私は無意識に戦っていたのか。

「カッコイイ人を見てたらなーんか、生きてるなあ、って感じるんですよ。心臓の鼓動が早くなって、頭の中が熱くなって、五感が研ぎ澄まされてく。みたいな」

だから、アナタを見ると、生きてることがリアルに感じ

られるんです。

カコは届いたコーヒートのクリームを溶かしながら、また、笑った。

カコと別れた後、私は部屋に戻って料理を始める。

私は、彼女をふった。もう二度と、会うことはないんじゃないかなと思う。しっかりと目を開けて玉ねぎを切っていくと、目の奥に染み入る痛みが、少しだけ心地よく思えた。

鍋の中のコンソメスープは、きらきらと光って、熱の流れでゆっくりと揺蕩っている。そこに映し出された私の顔は、今までで一番澄んでいて、つい、目を背けてしまった。

# この世から消えても

県立鹿屋高等学校 一年

秋篠 尚斗

「なあ最近、出るらしいぜ」

学校の休み時間。騒がしい教室の片隅で仮眠をとっていた自分に、降りかかった一コマ。

七月中盤。高校一年から二年へと進級し、新しいクラスにも慣れてきた時期であり。スチームサウナみたいなモワモワとした蒸し暑さと、西に傾いた太陽に苦しむ時期でもあった。

そんな暑さの犠牲者がここに一人。この変なテンションで語りかけてくる変人は、瀬戸口勇太。二年生に進級してから何かと絡んで来ており、ガン無視しても話しかけて来る。本当に変人だ。

「何です？ 何が出るんですか」

それに対して、俺は、夏の暑さや休息を妨げられた苛立ちで若干キレて返答した。

「何でキレてんだよ。まあいい。最近、なんと！ 幽霊がこの辺で現れたらしいぜ！」

両手をだらんと下げ、さも「うらめしやく」とでも言っつきそうなポーズをし、講師さながらに語りかける。

「何でも、学校の近くを歩いていた少年Aが」

「誰ですか、少年Aって？」

「どうでもいいだろ！ とにかく、そいつが学校からの帰り道に幽霊を目撃したらしいんだよ！ 更に俺調べによると、少年Aだけではなく、少女Bや青年Cなどが『見た！』との多数の目撃情報と証言が寄せられてんだぞ！」

「そんな曖昧な目撃情報じゃ、実際に見たかどうかなんて分からないと思いますけど」

興奮状態で話しかけてくる彼だが、いかんせん話が胡散臭い。ヘタな宗教勧誘のようだ。

話に興味は無いが、再び寝ようにも気が削がれてしまった。休息はお預けらしい。仕方なく読書をする事にした。

「何だよ、お前幽霊信じない派か！」

「何というか。そういうスピリチュアル系を信じていないんですよ。大体は作り話ですし、何かと勘違いをしたとかが多いですから」

手元の本に目を落としながら、片手間で返答した。

「はあー、夢がねえなあ」

声色から、つまんねえの、という感じがした。

きーん、こーん、かーん、こーん。

間延びしたチャイムと共に、勇太は焦った顔をし、ドタバタと慌ただしく自分の席へと去っていった。

生まれてこのかた、幽霊のゆの字さえ信じてこなかった。都市伝説などは、人間の狂言か妄想であると一蹴していた。

けれども……。

「ほー。俺の事、噂になってんのかあー。いやー、やっぱ、幽霊でも存在感は消えんのかねえ」

俺の頭上から、癩に障るようなケラケラとした笑い声が降り注ぐ。俺の頭上に、文字通り黒髪の青年がいた。そいつは、水の中にいるように宙に浮き、身体がステンドグラスのように薄く透けていた。淡く儂げな姿をしたそいつは、一言で言うに幽霊である。

俺は、交通事故で運悪く死んだはずの親友、坂井陽介に取り憑かれている。

事の発端は一本の電話からだった。陽介が交通事故で不運にも亡くなった。そう、親戚から告げられた。その場では信じられなかった。

しかし斎場まで来てしまうと、もう疑いようもなかった。最後のお別れだと、瑞々しい花を渡された。

久しぶりに見た陽介の顔は、中学よりかは大人びたが、だいたいは同じように見えた。でも、ちよつと血の気が薄いような、その程度の変化しか分からなかった。線香の匂いが、鼻腔から、脳へと、麻痺させて、いく。周りの、境界が曖昧に、なって、そして……。

気が付くと、自分はベッドに横たわっていた。時計に目を

やると深夜を指していた。どうやって家に帰ってきたのか、まるでそこだけの記憶が虫食いされた様に要所要所しか思い出せない。

ずっと、夢見心地な気分であったのか、一気に現実が襲ってきた。

死んだ。陽介が、死んだ。

両目を手で覆い隠し、気持ちの整理をつける。暗い部屋に向けて、溜め息混じりに呟こうとする。

「……ッ……」

しかし、そんな嗚咽さえしぼり出せなかった。

ああ、馬鹿馬鹿しい。

自嘲しながらも、騒々しい感情を止めようと、指を脛にグツと押し込む。

「すまねえ、俺も死ぬとは思ってなかった」

一人しかいないはずの部屋に、自分以外の声が響いた。

枕元から、確かに聞こえた。そしてその声を、俺は覚えていた。だって、その声は。

「よう、すけ？」

幻聴だ、空想だ、まやかしだ。でも、それでもいい。溢れ出る感情に身を任せ、声の方向へと視界を向ける。そこにいたのは、おおよそヒトとは呼べないナニカだった。地に足着かず浮遊し、体は半透明。その朧気な風貌は、幽霊、という言葉がしっくりとくる。

目の前には人間に見えない陽介。明らかに人間じゃない陽

介。思考は停止。感情には蓋をされ。これ以上結論が出なかった。

いきなり幽霊みたいなのと邂逅した場合、俺はどのような反応を示したのだろうか。

「うわああああああ！！！！！！」

「うぎやああああああ！！！！！！」

絶叫する。

そうして、今に至る。夢だったら楽だったのだが、現実だったので頭を抱えてしまう。しかし同時に救われたとも思ってしまう。

陽介の死というものは、自分にとっては、何故長い間会わなかったのか、といった後悔でもあり。埋めきれない大穴を開けられたような、そんな気分だった。

それがどういふ神の気紛れか、陽介が幽霊として再び自分の前に現れた。そんな奇跡に、自分はどのようにしていいのか分からない。

そんな悩みの種は、今も呑気そうに教室内を右往左往している。

「……………とは……………という意味で……………」

教卓に立つ先生は熱心に弁を振るっている。だが、何を言っているのかはよく分からない。取り敢えず、板書を適当に写しておくことにした。

少しして、間延びしたチャイムが再び鳴り、窮屈な時間が

終わった。

今日は終礼はない。きつきと帰って休みたい。そう思い、教科書、ノートを整え、バックに詰め込んでいると。

「さて、明日から夏休みだか、予定はあるのかい！」

隣からまたしても変人が来た。

「……………そうか、明日から夏休みか」

変人の言葉にふと思いつく。そう、明日から夏休みなのである。と言っても、俺には特になんの予定もない。しかし、人とは極力関わりたくない。

「……………俺は、夏休みに暇はない」

「そ、そうか……………暇なんだったら、クラスの奴らと遊びに行こうとしたんだが……………残念だ。もし予定が空いて、興味あったら言ってくれ」

言葉のとおり残念そうな顔をした彼を見て、良心が痛んだが、それを掻き消すがごとく。

「ああ！ おいおい、誘われてんだぞ！ 行くしかねえだろ！

そんなんだからヒョッコなんだよ！」

頭上から陽介が、ブーイングと両腕でポカポカと叩いて来るが、幽霊なのでお互い触れられず空振りとなっている。後付けの理由だが、お前がいると心霊写真撮れそうだから行きたくもない。

猛烈な抗議を受ける中、俺は少し元気がない変人に軽くお別れを済ませ、そそくさと玄関へと向かった。



通学路。物足りなく感じる道を歩きながら、俺は、ぶすくれている陽介の気を逸らすため、ずっと気にしていた疑問を投げかけることにした。

「お前、何で俺にずっとついてるんだ？」

その言葉に陽介は酷く神秘的な顔付きとなった。自分にとっては何気ない一言なのに、触れてはいけない何かに触れたように。

その沈黙は、何分続いたのだろうか。実際は数秒の場面なのに、そこだけスロー再生された様に遅く感じる。長い静寂の中、陽介がこちらを覗き、笑顔でこう答えた。

「少し、遠回りしないか？」

雑木林。提案を受け、無言の陽介を追いかけながらこんな場所までやって来てしまった。

どこを見ても木木木木木木、と無限かと思うほど立ち並んでいる。

「なあ、覚えてるか？」

ようやく喋り始めた陽介。いつものおどけた雰囲気を出そうとしているが、その言葉の奥には何か感情が見え隠れしていた。

「ここ、オレたち二人でよく遊びに来てたよなあ」

そうだ。そうだった。ここはよく陽介と二人で遊んだ雑木林だ。芋づる方式で記憶が蘇り始める。

「木に登ったり、棒でチャンバラしたり、木のロープでター

ザンしようとしたり。ま、ターザンはロープが千切れて落ちたけど」

草笛、水切り、川で水泳。くだらないことで争ったり、そんなんでケガしたりなんかした。お互い泥まみれになりながらも、それを見合って笑い転げた。あの頃は無邪気で、ただただ純粹だった。

そんな思い出すらも、今では懐かしさを感じてしまう。

そんな事を考えているうちに、ある場所へと辿り着いた。

「まだ残ってたんだな、オレらの『秘密基地』」

鬱蒼とした木々を通り抜け、開けた視界にあったのは大木だった。崖際に力強く立つこの山の主である。

その大木のお膝元には、少し大きな窪みがあった。見た瞬間に思い出し続ける、懐かしくも褪せた思い出の日々を。

「……俺たち、洞窟みたいなこの木の下で、雨宿りなんかしたりして……」

「……そうだなあ……」

再び、沈黙が漂い始めた。何故、こんな場所に連れて来たのかも言えず。太陽は西へと流れ続けている。

夏の夕日をスポットライトに、蟬のオーケストラが空気を読まず不協和音を奏で続ける。それに合わせて木々は揺らめき、静かに二人を見守っている。

「オレ、一人でここから離れるのが、怖くてな」

突然、陽介がポツリと溢した。

「怖えんだ、怖い。一人でどこに行くかも分からない、そん

な場所に行くのが、堪らなく怖いんだ」

それは何なのか、死後の世界か、自分には分からない。ただ、一つだけ分かったことはある。そこには、底抜けに明るい青年ではなく、ただ子供のように怖がる一人の少年がいる、という事だ。

「だから、お前を道連れにしようと思った。そんな最低な考えが浮かんでしまったんだ」

その言葉に驚愕してしまった。そんな様子も受け止め、まるで懺悔の様に陽介は言葉を吐き出し続けた。

「お前と一緒になら、怖くない。でもそんなこととして親友を裏切ってしまうのは、怖い。そんな矛盾ばつかなんだよ。オレがお前に憑いてる理由なんて、そんななしよーもないジレンマなんだよ。最低だよな、オレ。くだらねえくらいにどうしようもない、だって……！」

「馬鹿なんじゃねえーの！」

陽介の言葉を遮り、気付かぬうちに声を大にして叫んでいた。

「何勝手に自分を卑下してんだよ！ お前はバカ国のバカ代表のバカか！ さつきからずっと『くだらねえ』を連呼し続けて、本当……何というか……馬鹿じゃねえの！」

言いたいことが纏まらない。後先なんて考えず、思った事を全部ぶち撒けているだけの、剥き出しの本音。

「連れてくんなら連れてけ！ そんなことも決めきれない奴だったのかオマエは！ 坂井陽介はバカで、アホで、トンチ

ンカンで。いつつもうるさいけど、人を助けるため死地に飛び込む、変な正義感を燃やした即決バカ人間だろ！」

崖から町中に自分の声が響き渡る。頬に感じる思いは、今の気持ちを代弁してくれる。

「底抜けに明るいお前のおかげで自分は救われたんだよ。だったら、自分の命くらいお前にやる」

そう言い、陽介に触れようとするが、やはり触れられなかった。

いや、手を伸ばすことさえ叶わなかった。香るはずのない線香の匂いがする。あの時のように、抗えない感覚が襲う。

「……ありがとうな、こんなオレのために励ましなんかしてくれて。そろそろ醒める時間が来たみたいだ」

自分は叫び続ける。「さよなら」も、「行くな」も言えない。意識だけが遠のく。

「じゃあな、親友。お前と出会えて、こうしてまた話せて、本当に嬉しかったよ」

「なあ最近、出るらしいぜ」

学校の休み時間。騒がしい教室の片隅で仮眠をとっていた自分に、降りかかった一コマ。

七月中盤。高校一年から二年へと進級し、新しいクラスにも慣れてきた時期であり。スチームサウナみたいなモワモワとした蒸し暑さと、西に傾いた太陽に苦しむ時期でもあった。そんな暑さの犠牲者がここに一人。この変なテンションで

語りかけてくる彼は瀬戸口勇太。二年生に進級してから何かと話しかけて来ている。

「何です？ 何が……」

何故だろうか、この会話、一度聞いた覚えがある。

「ん？ どうしたんだよ？ まあいい。最近、なんと！」

「幽霊がこの辺で現れたんですか？」

彼の話を遮り、質問をする。

「ん？ 幽霊？ 何じゃそりゃ？ 夏バテで頭やられたか、寝惚けてんのか？」

「いや、確かに少し頭は寝惚けているけど……」

凄く長い夢を見た気がした。凄く大切に、忘れちゃいけない、そんな夢を。でも、どんな夢なのかは思い出せなかった。

そんな自分を勇太が気遣ってくれていると。

きーん、こーん、かーん、こーん。

間延びしたチャイムが鳴った。勇太は焦った顔をし、ドタバタと慌ただしく自分の席へと去っていった。

おかしい。このシーン見たことがあるはず、しかしどこで見たのだろうか。そんな事をグルグルと考えていた。

「えー、このように、『胡蝶之夢』とは、夢か現実か分からない様。若しくは、人の世の儚いことのとえとして使われません」

教卓に立つ先生は熱心に弁を振るっている。板書をノートに写す。少し経つと、あの間延びしたチャイムが鳴った。

「さて、明日から夏休みだか、予定はあるのかい！」

授業終了後すぐさまに勇太がやって来た。夏休み。そうだった夏休みだ。そして勇太が話しかけると言うことは、十中八九遊びへの誘いであろう。断るべきか。

(そんなんだから、ヒョッコなんだよ)

どこからか変な声が聞こえてきた。癩に触るような、うるさいような、でも、優しい声が聞こえてきた。

人とは極力関わりたくない。そんなことを考えていたはず。

でも、何故だか変えてみたくなかったのだ。

七月中盤、教室の片隅での小さな一コマだった。

## 夏に固執する

県立鹿屋高等学校 一年

水野 愛心

一瞬だった。

ふと再生した動画に心を奪われた。

「……すごい」

鳴り響くギターの音、思い思いに叫び喚く観客、演奏者を照らし続けるライト。ベースを掻き鳴らす君。私とは生きる世界が違って、見るものが全てが綺麗に映った。

その中でも、楽しそうに歌う君が一番綺麗だった。ミスをしなくても楽しそうに演奏して、カメラが向けられる度に光を反射した汗が輝いている。

いつも教室で見ている時とは違う表情をしている君。

どんな言葉で形容すればいいのか分からないほど素敵な笑顔で、カメラ越しにこちらを見ていた。

なんて楽しそうなんだろう。私も、その景色の中に入れたら。

その景色が、私の全てを色付けた。

午前七時半、教室の机の上で頬杖をついた。窓が開いてい

るからか、頬に触れる風はまだ冷たい。もう五月に入るというのに。そんな事を考えながら、前の席に座っている人物に目を向ける。

エメラルドグリーンのイヤフォンコードを耳から垂らし、今日も今日とて、物思いに耽っている彼女の名前は矢島花咲音。花に咲く音、と書いて『かさね』と読むらしい。入学式の日の名前を見かけた時、「綺麗な名前だなあ」なんて思っていた。私は彼女のことをあまり知らない。物静かで、こちらから話すことが多いからだ。唯一知っている事と言えば、音楽と猫が好きだという事。以前二人で会話した時に猫が好きだと話していた気がする。

何より私が見つけたあの動画。私の全てを色付けた動画。今の彼女からは想像もできないほど生き生きとしている姿が写っている動画。たぶん、あの動画の存在を知っているのはこの学校でも私だけだと思う。

本当は今すぐにでも彼女にあの動画のことを聞きたい。でも高校に入ってから知り合った相手に、そんなことを急に聞かれても困ると思うので我慢している。

多分、他のクラスメイトはあの動画の存在を知らないと思う。私だけが知っている、みんなが知らない彼女の別の顔。あんな笑顔で微笑まれたら、誰だって夢中になるはずだ。

私は、誰も知らない彼女の秘密を抱えて過ごしている。

ショートホームルームの後、授業はあつという間に四限ま

で終わり、あつという間に昼休みになった。特段仲の良い友達もいないので、いつも通り一人で昼ご飯を食べる。一人で食べていると、いつも静かな空間に耐え切れなくなるので、動画を流すことにした。どんな動画を流そうかと思つて画面をスクロールしていくと、彼女が演奏している動画が出てきたので、それを流すことにした。この動画はあまり有名ではないが、私はとても好きだ。かつこいいベースラインが始まるのを聴きながらおにぎりを食べようとした。

「湯川さん、隣いい？ ……えっ」

本人だ。動画に映っている本人が来てしまった。私がこの動画を見ていることは彼女に伝えていない。

「あ、矢島、さん。隣どうぞ」

「…：あ、うん、ありがと」

気まずい。とても。例の動画はさつき、矢島さんが隣に来た時に私が止めたので、沈黙が続いている。どうやって説明しよう。

『今日たまたまこの動画を見つけてさ』

いや、それでも空気はこのままだ。もっと気まずくなるかもしれない。

『前から好きで』

いや、これもきつと同じ結末になってしまふだろう。

どう説明しても気まずくなるのなら、もう正直に説明してしまおう！

「えっと、矢島さん！ この動画は」

そう言いかけたところで、彼女の耳が赤くなっているのに気づいた。

「えっと、矢島さん、耳が」

「い、言わないで！ ……まさか、クラスメイトに知っている人がいるなんて、思わなかった、から」

照れている。あの矢島さんが。教室では表情が全く変わらないのに、今はコロコロと変わっていく。

「私、矢島さんのベース、好き、だよ」

「あ、ありがと…：…？」

顔は赤いまま、こつちを向いてありがとうと言う矢島さんを見て、なんだかこつちまで恥ずかしくなってしまった。

二人で頬を赤らめて、目が合つては逸らす、を繰り返していたら、昼休みが残り五分ほどになってしまった。

このままだと話の収束がつかない！ どうしようかと頭を悩ませていると、頬の赤みが引いた矢島さんが口を開いた。

「周りの人に、面と向かって感想を言われることがなかったから、…：嬉しい、ありがと」

『私も、ずっと見てきた憧れの人からお礼を言われるの、とっても嬉しいよ』

頭の中に浮かんだこの気持ちは、彼女に伝えないことにした。

「湯川さんさえ良ければ、ライン交換してくれないかな？」

「えっ、いいの!? ぜひぜひ！」

スマホを出してQRコードを読み取ると、『かさね』という

文字と猫のアイコンが表示された。

お互いラインを交換した後、その場で別れて教室へ向かった。

まさか本人にバレてしまうとは。でも、嬉しそうだったからいい、かな？

そんなことを考え、矢島さんと話せた嬉しさと、あの動画の感想を伝えられた嬉しさに包まれながら教室の後方の扉を開いた。

午後の授業で現れた眠気を噛み締めながら靴箱へと向かった。今日は終礼がなかったので早く帰れそう。後ろに人がいるのを感じながら、靴箱でスリッパから靴に履き替えて靴を自分の棚に戻すと、上の棚へと腕が伸びて、背後にいるのが矢島さんだと気づいた。

「あ、矢島さんも今帰り？」

「うん、今日は用事があつて早く帰りたくて」

「そうなんだ、私は特になんだけどなんだか早く帰りたい」

私がそう言うと彼女はふふって眉を下げて笑った。

「わ、わらった！」

あの動画の笑顔とは違ったけど、とても綺麗で可愛かった。

「えっ、あ、ごめん……！」

「なんで謝るの、すごい可愛いのに！」

私は気持ちが高まると、考えていることをそのまま口に出

す癖があるらしい。

「か、かわいくはないけど、ありがとう……」

そんなふうにお礼を言って、矢島さんはまた笑った。

しばらく靴箱で話した後、別れて帰り道を歩いた。

「矢島さんと、少し仲良くなれた、かな！」

そんなことを呟いて少しスキップして家の門に手を置いた。

朝学校へ行つて、矢島さんに挨拶をして席について、授業を聞いて、昼休みに一緒にご飯を食べて、帰りに少し話してから帰る、という学校生活をしばらく続けていた。あつという間に七月に入り、あと三日で夏休み。

「矢島さん、夏休みは何するの？」

「まだ少ししか決まってる……」

「どんなことするの!? 知りたい！」

えっと、と少しはにかみながら彼女は口を開いた。

「最近流行ってる曲、あるじゃん」

そうやって彼女が口にした曲名は最近、十代や二十代の間で話題になっていると言われている曲だった。

「あ、あのアーティストさんのやつだよ」

「あれをベースカバした動画、出そうと思つて」

彼女の唇から紡がれた言葉に一瞬フリーズしてしまった。

また、矢島さんのベースが聴ける……!

「えっ、すごく楽しみ! でもあの曲、ベースすごく難しい

よね？」



「そう、なんだよね……。だから夏休み中にたくさん練習して、八月後半に動画を撮ろうかなー、って思ってた」

矢島さんは照れている時に耳を触る癖がある。今もそうやって耳を触って、私に話してくれている。

前は、話す時に合わなかった目。今は、ちゃんと私に合わせてくれる。

前よりも距離が縮まって、仲良くなれているんだなと思うと、すごく嬉しい。

「動画、すごく楽しみにしてるね！ 私にできることがあったらなんでも言ってみてね！」

「ふふ、ありがとう。手伝ってほしいことがあったらまた連絡、するね」

「……うん！」

にぱーっと笑った私に、彼女は誰もが見惚れるほどの笑顔で私に笑いかけてくれた。

『私がベースを弾いている姿を撮ってほしいんだけど、お願いできないかな？』

そんなメッセージが可愛い猫のスタンプと共に送られてきたのは、八月中旬のこと。宿題も一通り終わり、アイスを食べながらネットの海を漂っていたときだった。

「えっ、もしかして、あの動画のやつかな……！」

返信しようと文面を一生懸命考えながら、部屋の中をぐるぐると回っていた。

『うん、私で良ければ！ どこで撮影する予定なの？』

『学校の屋上で撮影しようと考えてるよ』

屋上って、夏休みも開放してあるのだろうか？ そんなことをふと考えて、尋ねてみる。

『学校の屋上って夏休みでも開放してあるの？』

何分かすると返事がきた。

『知り合いの先生に頼んで一日だけ開放してもらえるようにしたんだ』

予想外の返答。そんなことをして怒られないのだろうか？ 色々と考えたが、結局は先生が共犯なので、怒られないのではないかという結論に辿り着いた。なるほど、策士だなあと考えた。

『撮影はいつ？ 予定が無かったら手伝えるよー！』

そんなことを打って送ったが、八月下旬の予定なんて無いに等しい。遊びに誘えるような友達もさほど居ないし、課題もほとんど終わらせてしまった。家族との予定も無いので矢島さんにいつ撮影だと言われても参加できると思う。自分って本当に可哀想な人間だ、と我ながら思ってしまう。しようがない、コミュニケーションが苦手という短所が招いた結果だ。返事がくるまで暇だな、何をしようか。目を閉じて物思いに耽ってみる。

「……演奏でも聴こうかな」

あの演奏を聴くのはこれで何回目だろう。今月に入って三回は聴いていると思う。それだけ好きなのだ。普通のバンド

の演奏を聴くのは全く違う、体験したことのないような、形容し難い感情が生まれる。普通の人が抱くような「応援したい」、「推したい」というような言葉では言い表せない、そんな感情。

『八月三十一日、空いてる？ 空いてたらそこで動画を撮りたいな』

矢島さんから返事がきた。ふわふわとした感覚から一気に現実へと引き戻される。

少しだけ文面を考えて、納得がいかず取り消すというのを何回か繰り返し、満足のいく文章を送る。

『うん！』

そんなこんなで、八月の終わりが近づいてくる。

## 私の居場所

県立鹿屋高等学校 一年

山下 智子

高校生になって早四か月。ようやく、クラスの人の名前と顔が一致し始めた。だが、まだまだクラスの雰囲気には慣れない。よく話しかけてくれる人はいるが、ごく少数だ。自分から話しかけることができる人はさらに少なく、片手で事足りてしまう。

そんな私ではあるが、兼部している。そのうちの一つが「軽音楽部」だ。バンドは難しいと感じることも多いが、その分やりがいもある。

最近、クラスの人や、バンドメンバーとの距離感がつかめた気がする。

しかし、やはり慣れない。

そんな時、私が私でいられる場所に行きたくなる。だが、そこには毎日行けるわけではない。他の部活と同じ部屋だからだ。だからこそ、その日が楽しみになる。

その日は水曜日だ。ちょうど一週間の真ん中の日。その日は、朝からワクワクする。遠足の前日みたいだ。私にとって遠足と変わらないのかもしれない。学校の中だけで終わる

遠足。学校にいるのに、全く違う世界に行くことができる、そんな遠足。

そこに行くには、通行証、切符が必要だ。最近の切符は「短歌」。前日までに、顧問の先生に提出する。それだけだ。

他の曜日は、他の二つの部活が使っている。というか、もともとはこの二つの部活の部室だったのだ。そこに後から入ってきたと聞いた。もう少し、うちの人数が増えたら部室貰えるかな。

三年生二人、二年生二人、一年生四人。私の隠れ家。唯一逃げ込める場所。入学したときは、あるなんて知らなかった。新入生を対象とした、部活動説明会。そこで、存在を知った。初めて聞いたときは、「本当にあるんだ」と思った。本の中だけだと思っていたから。『文芸部』なんて。

ものは試しと体験に行ってみた。

部室は明るかった。もちろん蛍光灯がついているからという意味ではない。雰囲気は明るかったのだ。皆さん、とてもやさしそうで、仲がよさそうに見えた。

入部してみてもよかったと思えたのは、ここが初めてだった。ここでは、たくさんの「初めて」を体験した。

短歌を作って意見を言い合うこと。同級生から頼られること。そして、私自身を私と認識して、認めてもらえること。

まだ入って数か月なのに、これだけある。「初めて」は減っていくかもしれないが、ここなら最後まで楽しんで活動できると思えた。

もちろん不安もあるが、頑張っていこうと思う。

頑張るといえば、大会だ。先生に言われるまま大会用に短歌を作ったら、予選突破した。びっくりだ。団体戦だから、一人で行くことがないのがせめてもの救いか。

始めたばかりなのに、初めての大会が全国大会。おかしいと思ってしまう私の方がおかしいのだろうか。だれか教えてほしい。

それに、行き先も行き先なのだ。私たちが住んでいるのは鹿児島県。南。一方、向かうは青森県。北。遠い。南から北まで日本縦断だ（そこまでではない）。というわけで、前泊・後泊をしないと、とてもじゃないけれど間に合わない。大会当日に移動まで入れたら……。考えたくもない。

というわけで、せっかくそこまで行くのなら、後泊の時に観光……。もとい課外学習をしようということになった。だから、皆大会よりもそっちの方が気になっている。

「……はちゃん。……み……は……ん。みずは……。水葉ちゃん」

そう私を呼んでいるのは、心愛（ここあ）ちゃん。

私と同じ、軽音と文芸を兼部している。しっかり者だ。

「……ん。ごめん。ぼーっとしてた。どうかした？」

「どうかした？　じゃないよ。何回も呼んだのに」

たまに、考え事をしていると、周りの音が聞こえなくなってしまう。私の悪い癖だ。

「ごめん。先輩たちじゃなくて、私なんかで良いのかなって考えてて」

「みーちゃん、みーちゃん、みーちゃん」

そんなやり取りをしているところに突撃してきたのが瑠璃（るり）ちゃん。長女だけど、どこか末っ子感がぬぐえない子。そして瑠璃ちゃんに首根っこをつかまれて引きずられてくるのが拓斗（たくと）君。なんだかんだ、瑠璃ちゃんに一番絡まれている。ちなみに、この二人は同じクラスだ。

「ちよつと、心愛さんと話してたのに……」

「みーちゃん。あのな、ここ行きたいんやけど」

拓斗君。そこまで気にしてくれてありがとう。

「いや。大丈夫だよ。そこまで重要な話じゃなかったから。

それで瑠璃ちゃん、どこ？」

「この、アクエリガーデンってとこ」

「違う違う。アクアガーデンな。それだとスポーツドリンクになるからな。瑠璃さん」

どんな間違え方してるんだろ。

「別に、アクアでも、アクエリでもいいやん」

「それはだめだから」

漫才もどきを繰り広げながら来なくてもいいと思う。

「どんなところ？」

「ふむふむ。なんか、水族館と植物園が合体したところらしい。写真みる？」

拓斗君のタブレットを皆でのぞき込む。

「わあ。綺麗だね」

「だろ？　だから行きたいんよ。俺」

瑠璃ちゃんは一人称俺だよな。

「ちよつと待ってね。いま、リストに追加するから」

今しているのは、行きたいところのリストアップ。とりあえず皆に行きたいところを挙げてもらって、場所を地図で確認して行けるかどうかを判断する。

「：ほかにどこか行きたいところがある人、いる？」

「『アニメイト！』」

「ごめん水葉ちゃん。私も」

瑠璃ちゃんと拓斗君は勢いよく。心愛ちゃんは、申し訳なさそうに伝えてきた。

「別に謝らなくてもいいからね？ 心愛ちゃん。じゃあ、ここは皆が行きたいから確定でいい？」

満場一致で決定。

「これで、一か所確定つと」

こんな感じで進めて行ったが、何しろ皆、行きたいところがバラバラだ。言い争いに発展しない方が少なかった。おかげで、時間だけが過ぎていく。

早く絞らないと。確認しないといけないことは多いのに、何から手を付けていったらいいのか分からない。

放課後、部室にて。

「おーい。携帯いじってないで、こっち来てくれない？」

「えー。なんでー？」

「なんでー？ じゃないから。ほら、そろそろ計画決めて先

生に出きないと、直前に出したら却下されるかもよ？」

「それはいや！」

あいか変わらず、反応が早い瑠璃ちゃん。

「じゃあ、今日で決めて先生に提出しよ」

「はーい」

三人とも、息びったりだ。

皆で輪になって座る。

「じゃあ、昨日言ったけどどこか行きたいところ、考えてきた？」

「うん」

「じゃあ挙げてくれる？」

「水族館！」

「動物園！」

「高いところ！」

手を挙げながら皆、勢いよく言う。

うん。ばらばら。さっき息びったりって思ったの、撤回しようかな。

「具体的にどこに行きたいの？ 場所の名前教えて」

「わかんない」

「わからない。じゃないから。今、行きたい場所決めて。今から三十分とるから」

「わかった」

場所を具体的にしてもらわないと話にならない。

とりあえず、持っていないかといけない物をリストアップ

しておこう。そして、先生に確認取ってから、連絡しとかない。任せっきりにしていたら忘れ物しそう……。

えっと、持ち物は、制服・靴下・着替え・ハンカチ・ティッシュ・筆記用具……。

「水葉ちゃん。決まったよー」

「わかった」

結果。皆が行きたいところが遠すぎるからどこか一つに絞らないといけなくなった。

「と、いうわけで、どこか一つに絞らないといけないんだけど、どこにする？」

「高いところってことは、タワーでしょ？ お土産とかも買えるから決定でいいと思う」

「確かにね。他の皆は？」

「別にいいよ」

「ええで」

じゃあ、どうしようか。できれば誰か一人が行きたいところだけっていうのは避けたいのだけれど。

「じゃあ、動物園じゃなくて植物園にする」

「いいの？ 拓斗君」

「うん。よく考えたら、俺ら近くに動物園あるから」

「確かに」

そういえば、植物園ってさっきも聞いたような……。

「あっ」

「どうした？ 水葉さん」

「あのさ、二人が行きたいところじゃなくなるかもだけど、それでもいい？」

「水葉ちゃんは変なこと言わないけど、一応聞く」

「えっと、アクアガーデンってあったでしょ？ 瑠璃ちゃんが見つけてきたやつ。あそこが水族館と植物園が混じった場所だから、そこはどうか？ って思ってる」

「そこだ。ナイス水葉さん」

「水葉ちゃん、ありがとー」

「みーちゃん、よく覚えてたな。見つけたの俺なのに忘れてたわ」

正直ここまであっさり受け入れられると思ってなかった。

「じゃあ、高いところは、有名なタワーで、後はアクアガーデンと、アニメイトと……」

決定したところを読み上げていく。

「……で、最後に空港。空港に着く時間は早くはできても、遅

くなったら帰れなくなるから、気をつけてね」

「なんで、遅くなったら帰れないの？」

「まず、空港に着いたら即飛行機に乗れるわけじゃないって

いうことは分かるよね？」

「えっ?! そうなの？」

「えっ。まさかとは思うけど、三十分に出発する飛行機に乗

るのに、二十分に着けばいいとか思っていないよね？ 電車とかフェリーみたいに」

「違うの？」

「違うの？」



「えっ？ 乗れるんじゃないの？」

「みーちゃん、乗れないん？」

頭痛くなってきた。嘘でしょ。常識ではないのか？ 私が  
おかしいのだろうか？ ほんとにちよっと誰か助けてほしい。

「先生ー。飛行機って空港着いても乗れないの？」

「いや、なにその誤解しか招かない言い方」

そして先生、いついらっしやっただんですか。気配無さすぎ  
です。おぼけかなにかですか。

「乗れないですよ。手荷物検査したり、荷物預けたり、いろ  
いろしなければならぬので。例えばですが、三時十分に  
発する飛行機に乗るためには遅くとも二時十分には着いてお  
きたいです」

「ですが、先生。慣れ親しんだ空港ではないので、もつと多  
めに時間を取っておいた方がいいと思います。迷子になっ  
たり、忘れ物がないか確認したりしたら時間なんていくらあ  
っても足りないです」

「みーちゃん、それほんと？」

「確かによく思い出してみれば、飛行機って乗る前にいろい  
ろしてた気がする」

飛行機に乗ったことのあるらしい拓斗君。

「というわけだから、時間ギリギリになるのはできるだけ避  
けたい」

「わかった」

じゃあ、これからは心愛ちゃんに指揮を執ってもらおうか

な。

「後は、心愛ちゃん、よろしく」

「えっ。なんで？」

「疲れたから」

「やだよ。私にできる気がしないもん」

「疲れたは冗談。大丈夫だって。行き方伝えるだけだから」

私は、後泊の時の旅行の日程、移動手段、時間のスケジュ  
ール管理を任されている。そして心愛ちゃんは青森から東京  
までの新幹線を担当している。だからなんだけど……。

とりあえず、こっちは一段落ついたからあっちに行ってこ  
よう。

「後よろしく」

「待ってみーちゃん、どこ行くん？」

抱き付いてくる瑠璃ちゃんに捕まった。

「軽音の方だよ。そろそろ時間だから」

「そっか、水葉ちゃん、練習今日だっけ」

「うん。終わったらすぐ戻ってくるから。ちゃんと心愛ちゃ  
んと先生の言うこと聞くんだよ？」

「わかったー」

……

「保護者か！」

皆考えることは一緒らしい。

やっと終わった。今日も練習を進めることができた。もっ

と上手になるために、練習しなければ。

などと考えている間に部屋に戻ってきた。意外と軽音楽と文芸の部屋は近い。さて、どうなっているだろうか？

「ただいま」

「助けて水葉ちゃん！」

入ったと勝手に抱き付かれた。

「ど、どうしたの？」

「持ち物ってどのぐらいの重さになると思う？」

「あー。飛行機の機内持ち込みの重量制限？」

「うん。調べてみたら、帰りの方が機内持ち込みできるサイズも小さいし、重量も少なかったんだけど、どうしよう」

そうなんだ。帰りの方がお土産とかもあって重くなってしまっただけ。いや、待てよ？

「でも、心愛ちゃん。行きは新幹線の時間とかに余裕がないから荷物を預けられないけど、帰りは時間関係ないから、荷物預けても問題ないと思うよ？」

心愛ちゃんだけでなく、いつの間にか聞き耳を立ててた拓斗君と瑠璃ちゃんもポカンって顔してる。

「……どうした？」

「ううん。そっかあって思っただけ。行きが預けちゃだめだから、帰りもだめだと思ってた」

「ただ、帰りをどうするかで変わるかもしれない」

「えっ？」

「えっと、親に空港まで迎えに来てもらうか、空港からバス

センターまでバスに乗って帰るか。この二択で変わるかもしれない。ちょっとバスの時間、調べてみるね」

さすがに、帰りに疲れ果てて荷物待ちでバスを逃して三時間待つ、というのは避けたい。

……よかった。思った以上にバスの便があった。二、三時間一本まで覚悟してたから、良かった。

「いい報告。バスは一時間とかに一本いるから、もし逃しても空港内で休んだりしてたらすぐに来るよ」

「やったー」

「でも、俺、親が迎えに来るって言ってた」

「そっか。心愛ちゃんと、拓斗君は？」

「バスだと思う」

「なら、この三人だね。先生は車ですよね？」

「ええ。自分の車の方が便利なので」

「じゃあ、空港で解散だね」

「だったら、これで、日程全部決まった？」

心愛ちゃんと顔を見合わせる。

「うん」

「やったー！」

瑠璃ちゃんと拓斗君が声をそろえて喜んだ。

やっと終わった。大会まで残り一週間。ギリギリだった。間に合ってよかった。これで、一番やらかせないものが終わった。あとは、持ち物と、迷子防止策を考えるだけだ。

「いやー。間に合ってよかったですね。ようやく、一段落つ

きましたね。では、今から歌会をしましょうか。大会前ですが、久しぶりに自由詠にします。時間は十分間。自由詠で一首です」

自由詠。久しぶりだな。大会が題詠といって、題となっている言葉を入れないと失格になってしまうものだから、最近はずっと題詠ばかりしていた。

いまさらだが、短歌とは五・七・五・七・七の三十一音でできた短い詩だ。感情をいかに書かずに表現するか。工夫の見せ所だ（といっても、その部分が一番苦手なのだが）。

というわけで、自分で考えるのは難しいが、他の人の歌を読み解くのは楽しい。

「後五分ですよ」

どうしよう。

とりあえず、使いたい言葉を羅列してみよう。そこからいくつかに絞って、写真みたいな情景を考える。こんな感じで私は短歌を作ったりする。

桜・青空・夏・花火・紅葉・雨・星・銀河・天の川……

こんなものかな。今回は、桜と青空にしよう。

青空に舞う桜……。桜って書いたりすると直接的すぎるって言われそうだから、花吹雪に変えよう。

そうしたら……。

「時間ですが、皆さんできましたか？」

皆できたらしい。

「水葉さんは？」

「できたよ」

「では、何か紙に書いて私に渡してください。誰が作ったかわからないように読み上げるので。そうですね。心愛さん、瑠璃さん、拓斗さん、水葉さんの順で評をしていきましょうか」

評とは、その歌に関して感じたことや、どんな歌なのかを考えて発表すること。

「じゃあ、一首目。『アメンボが……』です。では心愛さん、評をお願いします」

司会は先生がしてくれるらしい。心愛ちゃん、この歌どう解釈するのだろうか。

「えっと、この歌は、沈むっていう表現があるから、暗い歌なのかなって思いました。なんか、小さい子が無邪気に遊んでいるような感じがして、それがまた恐怖をおおるといっかなんというか」

確かに。そう言われてみればそんな感じもする。他の人の評を聞くのは新しい価値観や、違う視点の人もいるのだと再認識できて面白いと思う。

さて、私の歌は皆にどう捉えられるかな？

花吹雪力の開花告げていく 明日の太陽見守っていて

いよいよ、この『隠れ家』から来週旅立つ。

どうなるだろうか。楽しみだ。

## 愛及好本

県立大島高等学校 三年

暁 月

わたしは本が好きだ。そのレベルは学校の文芸部員達から『本の虫』と呼ばれるほど。そして、私自身この称号を誇らしく思ってる。

「史華（ふみか）ってほんつと本好きね！ 休み時間ぐらい本読んでないで脳を休めたら？」

「いいじゃん！ 昼休みはお昼ごはん食べてたら、時間なくなるし、放課後は部活があるし、読むための時間が休み時間しかないんだよ！」

「でも史華は、昼休みは読みながら食べてるし、放課後は文芸部で帰宅時間ギリギリまで本読んでるじゃん。それに、うちら三年はもう引退してるのに毎日部室に行つて読んでるよね」

「ぐううううう」

「リアルでぐうううううっていう人、初めて見たわ。ほれほれ、そんな真顔で本読みながら会話してるとうち以外の友達いなくなるよ」

そう言いながらわたしの眉間を弄る。

「…あかねと本があればわたしは十分だよ」

「うれしいこと言ってくれるねえ」

「あかねのことは愛及屋烏（あいきゆうおくう）っていうぐらい好きなの」

「きゃー。嬉しー。ただねえ、そんな愛の告白も本から顔をあげて言わなきゃ、うち以外には伝わらないものよ！」

あかねに本をとりあげられて目が合う。

「あれ？ 史華さんや。意外と赤らんでないかい？」

「どうやら、わたしの顔は赤らんでいるらしい。」

「ちよつと暑いだけだから」

「へー。そんな史華が照れるほど？ ねえ、愛及屋烏ってどういう意味」

「え？ えつと愛及屋烏っていうのはその人を愛してると、その人の住む家の屋根にいる烏まで好きになるって意味で、その人に関係しているもの全部が好きってこと」

「それは照れるね」

「わたしはてつきり少女マンガ作家のあかねなら知ってると思つて…」

「へー。うちが知つてると思つて愛の告白してきたの。史華さんはかわいいねえ」

「やばい。あかねがニマニマ超えてにやにやしてる。これずつといじられ続けられて、マンガのネタにされるやつだ。」

そもそもわたしが『本の虫』っていわれるほど本好きになつたきっかけは、このあかねだ。中学生の頃、あかねの書いたマンガがノベライズ化され、それが中学女子の間で話題になった。噂を知った担任が、あかねのマンガとノベライズ化された小説をクラスの女子全員に配ったのがきっかけだった。貰ったからには感想をきちんと言おうと思い、読んでみたら恋なんてしたことないのにキュンキュンして切ない感情まで伝わってくるようで、それをあかねに語ったのをはつきりと覚えてる。今はミステリー小説のほうが好きだが、あいかわらず、あかねの描いているマンガは毎回買ってるし、あかねの好きな小説やマンガなんかは私も好きだ。そういう意味では、パツと出てきた言葉だったが、愛及屋鳥というのは間違つてないかもしれない。いや、愛及好本というべきか。語呂が悪い気がするが。

「史華がうちのこと好きなのは、ずっと前から知ってるから今更照れなくてもいいのにな」

「ふえ!?!」

そこでチャイムが鳴ったからそれ以上は聞けなかったが、次の休み時間に聞いただしてやると決意した。

授業が終わわりあかねのもとに行くと、あくびをかみしめ、ひたすら眠そうなあかねがいた。

たしかにさっきの授業は眠たくなるような内容だったが、わたしはさっきのあかねとの会話が気になって授業半分にし

か聞けなくて、まったく眠気に襲われなかった。ただ、たぶん気になるのはそこじゃなくて……おそろく……。

わたしとあかねの温度差だ。

明確にはなんて言うか分からないけど……。あかねのことで授業半分に聞いていたわたしだが、あかねは授業をきちんと？ ではないが、まるでさっきのことなんてなかったことのように授業を受けていたのだろう。

わたしはあかねの前の席に座って告白をした状況で直視しにくいながらも顔を覗く。

「なあに？」

のぞいた瞬間、あかねが顔をあげ、尋ねた。

「愛及好本」

これがわたしのめいっばいだ。

「ふふふ。史華、顔真つ赤だよ」

「もう！ しょうがないでしょ！ それで答えは？」

「昼休みに話をしようか」

「は？ 今答えればよくない？」

「なんていうかな？ なんか誤解してたみたいだからね？」

「誤解ってどういう……」

「あとは史華の熱烈な告白を聞いて、うちも告白四字熟語をつくってみようかなーって思ってた。史華は赤面症かな？」

「誰のせいだ！」

かなり違和感があるが普段と変わらないあかねに安心した。普段と変わらなくてもやもやしてたのに、普段と変わらなく

て安心するとは、どういうことか。

「まあ、史華さんや。いまほんつと眠たいので寝かせてくれないませんか？」

「授業そんな眠いもん？」

「いや、徹夜」

「面白い本でもあった？」

「のんのん。面白い本を書いているっていう時点である意味では間違っていないかもだけど。今書いている作品がもうすぐ終わるから、次の考えててね。あと休み時間何分？」

「五分」

あかねは腕を枕に机へ伏した。

徹夜するほど書く時間に追われてるなら通信制行ったほうがよかったんじゃないかと思うが、そこらへんはあかねの自由だろう。

それと大した理由でもないと思うが、あかねの書くスピードはかなり速い。専門のPCを使っているからというのもあるだろうが、三週間に一冊とかプロでもそうそういない。あかねがプロじゃないとかじゃなくて、文芸部所属で週に三日も時間があるにもかかわらず、読んでばかりでイラストを書く必要のない小説を月に一作品も作れなかったわたしがいるのだから、比べなくともあかねは凄い。

昼休み。わたしたちは図書館の談話スペースにいた。教室はにぎやかで本を読むのに向かず、図書館は人が多くても静

かで昼休みの談話スペースを利用する人はいないので、話をするにはうってつけだった。

「それで誤解って何？」

「怒らないでね？ 史華さんはレンアイテキにうちを『愛してる』って解釈でOK？」

あかねに対する違和感がすごい。

「『愛してる』かどうかは置いておいて恋愛的に好きなんだよ？」

「うん。理解したよ」

「それで誤解って何？」

「史華は、うちが描いた作品が好きだからうちのことも好きなのであって。なんか、ファンみたいなさ？ 意味で好きなんだと思ってるだけだよ」

「だけど？」

「最初に愛及屋鳥の意味を聞いてファンのなことだったら意味として間違ってるし、あんなに照れていることないよなって思ってる。もしかして…あの告白は本気なのかなって思ってるね」

「本気じゃなかったら、ど」

と、言い終わる前に、あかねが詰め寄るように、尋ねてきた。

「ねえ、いつからうちのこと好き？」

息をのむ。誤解だなんだ言っても単純に人を好きになるか、関係のあったモノから人を好きになったかの違いであって：



：別に今好きならどっちでも良くて……それに少女マンガを書くあかねなら理解してくれると思った。

でもほんとはあかねが描いた本が好きで、そうして本が好きになって、本を好きになるきっかけをくれたあかねが好きで……。

ちよつと混乱してきた。恋愛的について、どういう意味だ？そもそも愛も恋も好きも違いがわからない。ラブストーリーでは、詳しく書かれるけど作者によって解釈は違ってる。

「いつからって聞かれたらいつから好きかなんてわからないよ。それにわたしは愛も恋も好きもまったく違いがわからないから」

「個人的な解釈でいいなら、愛は愛しいって感情で理性がかなり効く。反対に恋っていうのは束縛、所有欲、独占欲みたいな欲を相手に強く求めるようになる。好きは好き嫌いでバロメーターがあるとしてどっちに傾くか。だと思う」

ちよつと倫理の専門書を聞いてみたいで難しい。

「史華には欲がないよ。恋をしているのなら欲が欠けてる。誰かを愛してるっていうのなら史華が愛してるのはうちじゃなく本であって、『愛及屋鳥』でも『愛及好本』でもないよ。それでも、うちのことが好きって言えるなら……」

「うるさい、うるさい！好きって伝えただけなのになんてそんなに言われなきゃいけないの!？」

「別に責めてるわけじゃないから静かに……」

「攻めてるじゃん！わたしはあかねに好意を伝えただけだ

よ？それなのになんて欠けてるなんて言われなきゃいけないの？余計なお世話だよ！」

「うん。ごめんね。うちが悪かったから、ちよつと落ち着いてね。深呼吸。深呼吸」

ほんつとなんで恋してないとか欠けてるとか言われなきゃいけないの……私にどうして欲しいのかがわからない。嫌いなら、振ってくれればいいのに……。

「あー。恋愛感情を分析したがるのはうちの悪い癖だわ」

「そーだよ。あかねが悪い」

「うん。これだけ言っても、うちのことが好きだっていうなら……一緒に恋愛しよ？」

「……」

どうしてそうなる。

あかねのわたしに対するイメージもわからない。

恋愛感情が欠けてるって言っておきながら、好きだって言う？しかも『一緒に恋愛しない？』ってどういうこと？

「うちは史華のこと好きよ。恋愛四字熟語は作れなかったけど」

このタイミングで掘り返さないでほしい。

「うちはうちなりに『求愛拾餌』してきたつもりだよ。史華が本好きになったきっかけの本って、うちが書いた本でしょ。『本の虫(笑)』になったきっかけの東野圭吾の作品を薦めた

のはうちでしょ。いまでも史華の読む本はうちが好きな本ばっかだよ。気づかないのは鈍感ヒロインぐらいよ。だから

ね。それくらい史華に恋してるよって伝えたくて」

背筋がほんのちよつとゾクツとした。でもこの感覚は嫌いじゃなくて、あかねに恋してるって言われるのも嫌いじゃなくて、寧ろ嬉しくて、でもわたしだけが与えられてばかりでいるのは嬉しくなくて……だから……。

「あかね。私と付き合ってくださいませんか？」

「もちろん。今日何回も告白させちゃったね。うちの恋人になってください」

「そのうえで史華が『昼想夜夢』するくらいうちのことを想って愛してくれると嬉しいな」

「たりないかもしれない。授業中だって集中できないくらい想って、あかねの家にいる鳥に感謝感激して主人公の相談相手として小説の中にでてくるかもしれない」

「嫉妬しちゃうね。その小説ぜったい読ませてね。なんなら、うちの腕でコミカライズもさせるから。とりあえず、お昼ご飯食べながら内容詰めていこう」

「そうだね。お昼休みで食べ終わるかわからないけど、とりあえずタイトルは決まった！」

「どんなの？」

「『愛及好本』」

## 夜に吠える

鹿児島実業高等学校 三年

濱田 瑞輝

「なあ、狼女って知ってるか？」

友人から、その質問を投げかけられた時、僕は訳が分からず、二秒間ほど、彼の目を見つめていた。いや、上の空だっただけかもしれない。

「狼男の間違いじゃないのか？　なんだよ、狼女って」

質問に質問で返し、友人の言葉で止まっていた手を再び動かした。先程自動販売機で買ったホットコーヒーを口に当てる。買ってから時間が経っているからか、生ぬるい。

「それに信じるも何も、聞いたこともないし、知らないよ」

僕の答えが予想外だったのか、まるで説明なんて考えてないと言うように少し考えてまた口を開いた。

彼は口を開くと特徴的な八重歯がよく見える。少し犬っぽい。

「お前聞いたことないのか？　最近噂になってるぞ、狼女」

「へえ、そうなのか。聞いたことも見たこともないな」

と言うと同時に友人が不思議なものを見るような目でこちらを見てきた。

まるで昔からタイムリープしてきたかのような気分だ。

「見たことも……ってお前、そもそも狼女ってのは若い男を標的に誘惑して食べちまうらしいぜ。ま、そもそもお前みたいなヒョロい男には興味無いだろうけどよ」

「失礼な奴だな。何も知らなかったんだから仕方ないだろ」  
友人はまだ少しにやけている。僕の言ったことが相当彼にとっておかしかったのだろう。

「んで、その狼女がどうしたんだ？」

友人が、にやけたままで続ける。

「ああ、そうだったな。最近、この辺で狼女を見たって話をよく聞くんだ」

何を馬鹿なと思いつつも少し興味が湧いてきた。こういう話はなぜか聞き入ってしまう。

「そもそも、食べられちまうんだったら、なんで噂が広まってるんだって話だけだな。誰かが適当な噂広めてんだろうよ。

まあ、こういう話って聞くだけで面白いからな。真偽なんてどうでもいいんだ」

僕は、いつだったか読んだ地方の伝承について書かれていた本の内容を曖昧だが思い出した。

「そもそも狼男も外国の伝説だとか迷信みたいなもんだろ？　ほら、日本でいう妖狐みたいな」

僕はあまり狼男だとかそういう類の存在は信じていない。むしろ否定派だ。

「まあ、俺もそんな信じてないし、そんなに気にすんなよ。」

娯楽娯楽」

言われずとも、信じるつもりは微塵もない。しかし、もしも本当に狼女が存在しているならば、考えそうになってやめた。

今はそれどころじゃない。やるべき事に集中しなければいけない。

僕は友人へ挨拶を済ませ、大学のカフェテリアを後にした。

「おっと」

漫画に時間を取られすぎてしまった。時計を見上げると時針は二時を少しばかり過ぎていた。

秒針は変わらぬテンポで進み続けている。自分の部屋の時計は音が心地いいから好きだ。

漫画に時間をかけすぎた少しの後悔と読んでいた漫画の余韻に囚われつつも、仕方なくWordアプリを開く。PCを起動するのもめんどくさいのでスマートフォンを起動する。Wordアプリから原稿のファイルを開いた。大きな溜息を吐き捨て、3×3のスマートフォンキーボードに手をかけ、文字を淡々と書き殴っていく。

二時間ほど経っただろうか。結局手を付けていた小説のファイルは、いつの間にか作品のファイルの上から二番目に位置していた。

結局中盤を過ぎた辺りで納得がいかず、新しい作品に手をつけてしまった。新しく開かれたファイルも白紙のままだ。画面上には文字を書き始める指標になるカーソルが点滅を続けている。

最近はこのことばかりだ。新しい作品に手を付けては途中で投げたの繰り返し。

純文学、恋愛小説、ホラー、SF、ミステリー、文芸批判、大学に入ってからの一年間あらゆるジャンルに手を出した。最近はまだ好んでいなかったライトノベルにも手を出していた。勿論すぐにやめてしまったのだが。結局私は何が書きたいのか自分でもわからない。

高校生の一途な恋愛、ゾンビもの、異世界転生、どれも実際に経験していない。だから書けない。自分が脳内で作り出した人間に、感情移入できないのだ。

つくづく僕に作家は向いていないと思う。なのに小説を書いている。愚かだ。

しかし僕は感情に振り回されている人間のほうがよっぽど愚かだと思う。

映画、本、漫画、ドキュメンタリー番組。全ては他人の体験でしかない。フィクションも空想の人物の空想の経験だ。人は勝手に人物に自分を重ね、勝手に体験した気になり、勝手に感動したり、はたまた面白くないなどと戯言を抜かす。

僕も、その愚かな人間の一人なのだ。しかも、ほかの人間よりよっぽど。そんなことをだらだらと考えているうちに、外は少しずつ朝の顔を見せ始めた。

「ワオーン」

どこかの家の犬だろうか。遠吠えが聞こえてくる。

今日の昼間の友人とのやり取りを思い出した。

狼女。

どこかに存在しているのだろうか。寝ていないからか、そんなことを考えてしまう。

「狼女かあ。現れてくれたりしないかな」

頭がぼーつとしてきた。無理もない。昨日の夜から起きっぱなしだ。原稿を起きたあとの自分に託すことにし、床に就いた。

うるさい。

また昨日の犬だろうか。遠吠えで目が覚めた。

あれ、アラームをかけ忘れたのだろうか。自然に目が覚めることなど滅多にない。外を見ると、月が僕に夜を知らせていた。悪い勘は当たっていたようだ。小説サイトのコンテストの締め切りまであまり時間がない。こんな自堕落な生活をしている余裕などないというのに。

起きてひとまず水を流し込む。少し目が冴えてきたのを感じ、冷蔵庫へと向かう。中は空っぽ。

一人暮らしの冷蔵庫などこんなものだろう。空腹感に苛まれて、晩御飯は近くのコンビニで済ませることにした。部屋着のまま家を出た。

近くと言っても徒歩二十分程で、少し距離がある。おまけにうちのアパートからコンビニまでの道は少し不気味だ。

これといって、要因があるわけではない。だが不気味なのだ。恐怖などではなく只々不気味なのである。女性が住もうというのなら私はあまり勧めたくはない。といっても僕には友達と呼べる女性はいないのだが。

僕ですらこの夜道は慣れないし、未だに警戒しながら歩いてしまう。犯罪防止の少し青っぽい街灯は、寿命が近いのか点滅を続けていた。道端の自販機には蛾をはじめとした虫が群がっているのが見えた。

これを夏の風物詩と見るかただの不快な集合体と見るかは人それぞれだろうが、私は圧倒的後者である。昔から虫は苦手だ。好みの問題ではなく体が受け付けない。だから私はこの自販機を使った試しがない。昼であつても夜のこの景色が浮かび上がってしまうのだから、触れられたものではない。そうこうしているうちに家から一番近い（といっても徒歩二十分は近いと言えるのだろうか）コンビニの看板が見えてきた。二十四時間営業という言葉はなんだか安心する。駐車場に車はなかった。それもそう、スマートフォンロック画

面の数字は02・43を示していた。晩御飯（いや、夜食になるだろうか）を買ってさっさと原稿を進めねばならない。コンテストの応募期限は三週間を切っていた。

コンビニに入ると飽きるほど聞いた入店音と共に店員の気だるそうな「いらっしやいませ」が聞こえてくる。

一時間千円そこらの時給のために本気を出したくない気持ちには共感できるから不快感は無い。それどころか勝手に仲間意識すら感じてしまう。私も居酒屋バイトの身だ。この世で一番嫌いな言葉は「団体様」だ。

さあ、何を買おうか。まずはいつものコーヒーを手にとった。コンビニのドリップするコーヒーも好きだが、基本的にはペットボトルのコーヒーが好きだ。貧乏舌だとよく言われるが自覚はない。こだわりもないが。

それから晩御飯（ほぼ夜食）のサラダとおにぎりをカゴに詰むめ、レジへと向かった。支払いは現金、レジ袋はもらって店を出た。

再びあの道を帰ると考えるだけでなんだか寒気がする。もし僕が若い女性だったらこんな所には住まないだろう。送り狼でも出そうだ。身震いして小走りで帰ることにした。

早く引越したいなどと考えていると小走りに疲れてきた。今のバイト生活では引越しを考える余裕など全くと言っていいほど無い。家賃も親の仕送りで何とかなっているくらいだ。こんなことなら地元の大学に進学すればよかったかもしれない。あの時は地元を出なくて仕方なかったのだ。高校生

なんて大概そんなものだろう。

そんなことを考えているうちに家までの道も残り半分となった。少し風が吹いているからか、木々がざわめいているようにも感じる。まるでなにか警告しているかのよう。

「……さん」

気のせいだろう。女性のよう声な気がした。

「お兄さん」

僕はびつくりして後ろを急いで振りかえった。

そこには女性が立っていた。

僕は言葉も出せず立ち尽くしていた。

「あら、かわいいお顔」

僕のことを言っているのだろうか。そもそも周りに人はいない。

「私が送り狼だったら、もうあなた食べられてちゃっているわよ」

僕の額を人差し指でつつきながら、続ける。僕は全く状況が掴めなかった。送り狼？ 何を言っているのだろうか。

目の前に立っている女性は、本当に人なのか疑いたくなるほどきれいだった。綺麗な吊り目、高い鼻に長くてきれいな髪。身長は百七十センチの僕より少し高い。先ほど喋った時に少し見えた八重歯が犬だとか狼を想像させる。狼女が実在するならば、こんな人だろう。

ようやく頭が落ち着いてきた僕はまだ少し震えた声で言葉を発した。



「あ、貴方は誰なんですか。何か僕に用でもあるんですか」  
知り合いにこんな女性はいないし、こんな夜中に声をかけてくる人を警戒せずにはいられなかった。

「それに、こんな夜中に女性一人で危ないですよ」

恐らく僕より幾つか年上なのだろう。身長やきれいな顔立ちから、大人びた雰囲気を感じる。しかしこんな不気味な夜道に女性一人は危ない。

「うーん、ナンパ。かしら」

何を言っているのか。深夜にこんなところでナンパする人が何処にいるのだろうか。それも、こんな綺麗な人が。自分からナンパしなくても絶対男には困らないだろう。ますますわからなくなってきた。この人は誰で、何が目的なのだろうか。

「私のこと、なんだと思う？」

僕は訳が分からず、頭に浮かんだ名前をそのまま口に出していた。

「狼女……？」

気のせいかな、彼女の肩がぴくりと動いた気がした。

「あら、私ってそんなに有名な？」

嘘だ。そんなもの居るわけがない。狼女なんて、ただの噂話だ。

「嘘だ。そんな、いるはずがない。第一、貴方が狼女だなんて、証拠がないでしょう。」

「だったら、確かめてみる？」

少しにやついた顔で彼女は答えた。

「確かめるたって、どうやって確かめるんですか」

「今夜は満月よ」

その瞬間だった。目の前の彼女は大きく遠吠えをし、それと同時に狼女へと変化した。僕は混乱していて、何が起きたか、とつきには頭の中に入ってこなかった。気が付くと、目の前には我々が想像するような狼人間の姿があった。ぽっと見は普通の女性なのだが、よく見ると耳が生えて、歯は普通ではありえないような鋭さをしていた。

「意外と都合いいんですね。こういうのって想像と違ってびっくりするものかと思ってました。まるで小説みたいだ。僕の書いている小説よりよっぽど面白くない」

思っていたより頭はすっきりしている。きつきまでの混乱がいつの間にか好奇心になっていた。すると、反応が意外だったのか、少し笑いを含んだ声で彼女は言った。

「失礼しちゃうわ。もっと驚いて逃げ出したり、食べないでくださいって命乞いでもするかと思った。少なくとも、みんなそう。私に興味を持って近づこうとしてきた人はみんな」

「結構男たらしなんですわ。僕のこと食べるんですか？」

ほかの人たちみたいに「

この人にだったら食べられてもいいかもしれない。この人といってもただの人ではないが。それくらいの魅力を感じる。ただ綺麗だとか顔がいいとかの魅力じゃなくて、どこか妖しい感じの。」

それに、食べてくれたら小説の続きも書かなくていい。

「あなたがあまりに面白いから食欲失せちゃったわ。今食べるにはもったいないかも。また、来月会いましょう。次の満月、覚えておいてね。あと、この町の犯罪数、調べたほうがいいわよ。通り魔とか」

そう言うと、いきなり近づいてきて首筋に噛みついてきた。

痛くて一瞬目を閉じると、そこに彼女の姿はなかった。かすかに残った彼女の匂いと、止まらない好奇心と、少しの喪失感で立ち尽くしていた。

これはいい小説が書けそうだ。

また、家への道を歩き出した。

## すみれ

鹿児島実業高等学校 二年

松元 莉乃

そこまで邪険に扱わなくても良いだろう。俺はいくらか腹が立っていた。深空がアリアからの好意に気がづいているのは、長年共に過している間柄、一目瞭然で、それをあしらっているように俺には見えた。

今日は何人かの中学時代の友人とカラオケボックスに集まり、歌は歌わずに適当なフードを頼み、ドリンクを注文し、ただ話をするだけと、好き勝手に過ごしていた。話題は恋バナ。バランスの良い会話がほとんど深空抜きで展開されていた。というのも、深空はあまり自分から会話に参加することがない。黙って聞き、ここぞというときに発言をする。その発言がなんとも学生らしくないので、場を冷ますには適役なのだ。もちろん悪い意味ではない。盛り下がることもないことはないが、白熱した討論に似たノーガードの会話を御することができるのは、深空だけなのだ。深空はそれを知ってか知らずか、基本発言を慎む。体のいいまとめ役、というわけだ。

「学生時代の恋愛なんか、どう頑張っても、長続きしないの

き」

しかし今回ののはあまりにもデリカシーがないと思った。思想が強すぎた。アリア本人がいるところで、自らを思っている人に聞こえるところで、あまりにもデリカシーがない。しかし、ここで俺が声を荒げて無意味だろう。そもそもアリアの恋路について自分は関係ないのだと考え、なにとも言わず卓上のフライドポテトに手を伸ばす。アリアの方をうかがいみると、彼女は小さくほほえんでいた。俺は深空がこの顔をアリアにさせる光景を、何度も見ていた。なんとなく気まずい雰囲気部屋に満ちる。盛り上げ担当の幾人かが同時にリモコンを手に取り、から騒ぎをしながら曲を入れ始めた。深空は、そんな雰囲気など気にしないような顔をして、ミルクティーをひとくち、優雅に飲んだ。その涼しい顔を見てさらに腹が立った。

「学生時代の恋愛が長続きしないのはわかるよ。でもさ、そういうのが楽しいんじゃないかなって、おれは思うな。大和くんの親、確か中学の同級生だったよね」

ひとりがリモコンを操作しながら口を開いた。そうだと軽く肯定する。

「わかるわかる。みそらは大人っぽすぎる弊害が出てるよ。高校生からそんなおじいちゃんみたいな価値観もってたら、人生損するって」

もうひとりが続けて言う。今回口出しをした根っからの社交派のふたりは普段彼らだけで盛り上がり気味だが、この

フォローは的確だった。

「そうかな。まあ、そうかもしれないね」

反論されてもこの何食わぬ顔が崩れることはない。本当にそう思っているようには見えない、口先だけの発言だ。こういうところ、本当に嫌なやつだ。

それから三十分程で予定の二時間が経ち、会計を済ませアーケード街に出る。五人で来たカラオケだったが、深空と俺以外は近くのショッピングモールに行くらしい。そして深空はまっすぐ家へ帰るようで、もちろん同郷の俺は同行せざるを得ない。難しい帰路になりそうだ。他三人と別れて数秒、少し離れて歩いたらダメか？

駅へ歩みを進める。電車に乗り、しばらく揺られなければならぬ。その後バスにも乗らないといけないことを考えると、少し泣きたくなってくる。フライドポテトをもう少し控えめにしておけばと後悔しながら定期券を通し電車に乗る。待ち時間が少なくて良かった。

「大和」

真横に座った深空が俺を呼ぶ。どうしても腹の虫が収まらなかつたので、スマホをいじったまま適当にあしらう。

「ごめん」

「アリアに言えよ」

間髪を入れずにこたえる。スマホからは目を離さない。もし深空と顔を合わせれば、俺がどうにかなくなってしまふ。

「……ごめん」

深空は大分うなだれているようだ。罪悪感が、自分に非があると思うのならば、なおさらアリアに直接言えればいいじゃないか。電車はそのまま進んでいるが、まだ降りる駅には着かない。

深空がそれ以降何も言わないから、俺は我慢できなくなつて、景色を見るふりをして窓側に座る深空を見た。どうしたことだろうか、あの深空がとても悲しそうな顔をしているのだ。上手く説明することができないが、いつもよくわからない涼しそうな笑みを浮かべる深空が、絶対にするはずのないと言いつけるくらい悲しげな表情をしていて、俺はかなり動揺して、スマホを持つ手が勝手に緩んでしまった。鈍い痛みに耐えながら、太ももに墜落したスマホをキャッチする。画面をオフにして、ポケットに滑り込ませる。

「……なんか、なんかあった？」

先ほどまでの怒りはどこかへ飛んでしまい、流石に心配になったから、恐る恐る声をかけてみる。長年行動を共にしているが、こいつの感情のトリガーはどこにあるのか未ださっぱりわからない。深空の肩が大きく動く。深呼吸をして、取って付けたような涼しい顔を取り戻して、深空は、ははと声を出して笑った。息も間も抜けた、乾いた笑いだな。

「なにもないさ」

「強がるなよ」

なにかあったに違いない。しかしすっかりけろりとした笑みをたたえて席に座り直した深空はもう一度否定した。

「強がるもなにもないって」

こいつの扱いはどうしたものか、これ以上問い詰めても本当になにも返ってこないのだけはわかる。

「そうか、なんかあったら言えよ」

ポケットからスマホを取り出して、再びネットサーフィンだ。俺は少し予感がして、母親に今日は帰りが遅くなるかもしれないとメッセージを送った。不確定要素が多かったからそのあとに「わからない」ともう一つメッセージを残した。

駅に着き、定期券を流れるように通してホームを出る。俺はバス待ち、深空も迎えの車を待っている。きつとここで深空は俺を誘うだろう。時間があるならうちに来ないか、帰りは送るから、と。何年一緒にいると思ってるんだ、深空のこととはわからないことだらけだが、なんとなくわかることもある。

深空の迎えはバスよりも早く来た。ピンクの軽自動車を運転するのは彼の親ではなく家政婦の長谷川さん。いまだき、家政婦さんは珍しくなくなりつつある。それでも家政婦さんが送迎をしてくれるんだ、と驚かれるかもしれないが、俺は深空の親には会ったことはないし、長谷川さんが深空の母親というイメージが強くてなんの疑問にも思わない。でも最近アルバイトを始めたから、長谷川さんは深空の家から時給はどれくらいもらっているんだろう、なんてことが頭をよぎるようになった。そもそも日雇いなんかじゃないだろうな、小学生の頃からずっといるもんな。

そして、予想外。それじゃあまた、と挨拶して深空はそのまま車に向かってしまった。そんなに危惧することでもなくて俺の考えすぎだったか、ある意味アラートを鳴らしているのか。今すぐ深空の枝みたいに細い腕を掴んで、もっと頼れよと親友英雄その他の俺の柄にもない善人まがいのことをするべきか、こちらもしゃあなとだけ返して別れるか。前者の行動をするほど勇気がなかった俺は、ぎこちなく別れの挨拶をした。あれだけ考えて、ただの考えすぎということにしてしまった、少しばかり恥ずかしい。車の後部座席のドアを開けた深空は、かばんを車に置き、ややあってからこちらに戻ってきた。

「大和も乗りなよ、送って行くから」

長谷川さんは気さくな人だ。優しく上品で、そして、やはり深空の母親代わりなのだ。車に乗せてもらい、挨拶をすると、笑顔で返してくれた。無人の最寄駅から早いバスで二十五分、車でも十五分はかかる俺らの地域。なんて田舎なんだろうといつも毒づいている。さっきの電車内でなんとなく空気は良くなったものの、深空と二人並んで座る後部座席はどうも居心地が悪かった。

「大和くんは、今日はまっすぐ家に帰らないと親御さんに叱られるかしら」

俺の家は左折したところ、深空の家が右折したところに差し掛かったとき、長谷川さんが声をかけてきた。

「いえ、大丈夫です」

長谷川さんはふふつと笑って続ける。

「もう高校生だものね。それではお菓子を食べていきませんか？」

金曜日は長谷川さんがお菓子を焼く日。小学生の頃、それを知ってから毎週深空の家に遊びに行ってたっけ。本当は深空の分なのだが、寛容な彼から分けてもらっていたのを長谷川さんにバレて、それ以来深空が一人で食べるには多すぎる量が焼き上がっているようになった、そんな思い出がある。中学に上がってからいろいろと申し訳なくなつて、そのために深空の家に行くのはやめた。そして高校に上がってからはそもそも深空の家に行かなくなつてしまった。

「すみません、晩飯前なので」

普段なら晩飯前だろうが何だろうが喜んで食べていきたいと思うのだが、運動をやめた体にフライドポテトが崇つている。晩飯も入るかどうか怪しい。

「それなら包んで持って帰りなさいな。妹さんたちの分まで持たせますね」

そのあともしっかり送りますからと言い、長谷川さんはハンドルを右に切った。聞く以前に押しつける気満々だったパートナーだろ、これ。

深空の家は大豪邸だ。もちろん、俺から見ればの話で、上を見ればこれよりも大きくて豪華な家はたくさんあるだろうが、とにかくでかい家だ。門があつて、庭がついていて、池もあつて。池の周りには白い有名な彫刻のレプリカがいくつ

か立っている。深空に作品名を教えてもらったことがあるが、もう忘れてしまった。

「車を置いてから準備しますので少し時間がかかりますから、お部屋で待っていてくださいな」

門の前で車は止まり、長谷川さんがミラー越しで申し訳なさそうに言う。深空はドアを開けて車から降りようとしている。俺も続いて降車しようとするが長谷川さんが今度は直接俺の目を見て囁いた。深空は聞いていないようだ。

「深空さんとお話してやってください、あれでも年頃の男子なのですから」

あれでもって……。確かに大人びていて考え方もおじいちゃんみたいだと指摘されるが、長く隣にいてわかることは、長谷川さんのいうとおり、年頃の男の子、思春期の青年相応の表情をしていることだ。つまり俺が力になれることもあるということ。

「……わかりました」

そう言つて長谷川さんの笑つて細くなつた目と俺の目がしつかり合ったあと、俺は感謝の言葉と共に車を降りた。

深空の部屋は二階の正面の広い部屋だ。部屋に上がるときにやっと靴を脱ぎ、出されたふわふわのスリッパに履き替える。深空の部屋は基本、自然の香りがする。日差しが直接入らない設計になっていて、大抵いつでも窓を開けているので、外の緑豊かな自然に、深空の部屋も取り込まれているような感じだ。夏はとても涼しくて心地よいのだが、冬でも、今の



時期でも換気だと言って常時窓が開放されていたので、普段は冬場に深空の家に行かないことにしていた。部屋自体は広さに見合わず物が少なく殺風景。白で統一されているからより広く見える。いつもならそんなことを思う。

「ごめんよ、匂いがきついかもしれない」

深空は部屋に入るなりバルコニーに出られるガラス戸を開け放ったが、外からの冷たい空気に押され、甘ったるい香りは簡単には外に出ていかなかった。別の窓を開ける深空を目で追うと、その出窓にはすみれの鉢植えが置いてあった。一月はじめだというのに、紫色の小さな花がたくさんついている。植物について学のない俺でも、すみれが春の花だということくらい知っている。

「なんでこんな時期に」

思わずつぶやく。

「スイートバイオレット、ニオイスマイレというやつだ。花は冬に咲く。名前通り花からは甘い香りがして、昔は香料なんかにも使われていた」

深空お得意の解説が入る。すみれという言葉に何かの記憶が刺激されている。思い出せない、気持ちが悪い。

「苦手だったら、別の部屋に移ろう」

大丈夫だと断ると、深空は頷いて俺に部屋の真ん中にあるソファを勧めた。お言葉に甘えてそこに体を沈ませる。ソファの横に置いた通学カバンは深空の手によって部屋の扉の近くに丁寧に据えられた。深空がソファに戻ってくるときに、

俺は口を開いた。

「長谷川さんが、お前と話せて」

「話すって？」

深空はソファ前の机のお菓子を勧めてくる。断った。

「俺の予想だけど」

やっと腰を下ろした深空に向かう。

「お前にはアリア以外の好きな人がいる。で、お前はそこにアプローチができない。でも諦められないからアリアの気持ちには応えられない。そうしろ」

驚いた表情を見せる深空だったが、すぐにいつもの表情に苦苦しさを混ぜたような顔をして見せた。

「わかるよね、わかってしまふよねえ」

へろへろと骨が抜けたようにソファに体を預けた深空を見て、俺はやつとすみれに刺激されていた記憶について思い出せた。前もこんな表情をしていたことを思い出したのだ。

「お前、あれか？ 海外旅行のときの」

深空は中一のときに世界一周旅行をした。つくづく、金持ちなんだと思ひ知らされる。そのときの感想を、今日のカラオケメンバーにも話していたのだが、どこそこの風景が綺麗だったとか、長旅で疲れたとかいう、よくあるが特別な感想はあまりなかった。「家族とゆっくり過ごせてよかった」とだけ。深空の父親も母親も、俺は会ったことがない。ただ、もうひとつだけ言っていたことといえば。

「そうだよ。イタリアの服屋の、ヴィオレッタさん……」

確かその服屋は、郊外の観光地から路地に二、三本入ったところにある隠れ家的な個人経営の小規模店だ。それこそ、地域の人だけが入るような、と表現していただろうか。はつきりいって、深空は服飾に興味を見せたことがない。私服だつて、白いシャツに黒のスキニーパンツしか見たことないくらい。自身も若干ミニマルだと言っていたので、わざわざ服屋に入る必要は無い。ただ、ショーウィンドウ越しの女性に惹かれて入ったのだという、運命的な何かを感じて。また思いつく。その女性の名前であるヴィオレッタは、日本語でいうとすみれ、つまり「すみれさん」という方なのだ。嬉々として言っていた。あんなに興奮して話す深空は稀にしか見られないものだから、みんな珍しそうにその話を聞いていた、というよりはむしろ、その話をする深空の姿を見ていた。聞いていた一人が「それこそが恋なのだ」と豪語することは強く否定し、それでもなお熱っぽく話す深空が初恋を患ったのは、誰の目から見てもそうだとしか言えないものだった。それから数年、彼も大人に近づき、ようやく恋の味というものを知ったわけだ。俺のは苦すぎるから目を背けているが、モテモテな君の恋ってもんは、よく言われる甘酸っぱいものなんだろうな。

「学生時代の恋なんか、長続きしない」

俺は少し思うことがあって、数時間前に深空の言った言葉を繰り返した。

「お前がそうだと信じたいってことか」

深空はソファから立ち上がり、机上の電気ポットの電源を入れた。彼は手を抜いた。机の下にあるかごを取り出し、パタパタとひとつずつティーバッグの個包装を見て、そのひとつを取り出した。普段は絶対に茶葉から淹れるので、そんなかごがあったことも知らなかったし、ティーバッグなんか俗っぽいものを手にしている深空に違和感もあった。なんだからその光景がおかしくて、ふっと笑ってしまった。

「聞かせるよ、その人のこと」

「んん」

すっとぼけた顔をするな。

「お前がそれだけ執着する人が、どんな人なのか、興味湧いただけ。いい人そうだったら、俺も狙っちまおうかと思ってる」

別に本心じゃない、本心な訳があるか。そもそもイタリヤ人と話ができるわけがないし、一生顔を見ることもなさそうだからと思って、ふざけて言ったのに、深空はあからさまに顔をしかめた。恋は盲目なんだと思ひ知らされた。すぐに弁明する。

「冗談だよ冗談。別にお前の運命の相手を取ったりしないから、なあ」

深空はからかうように目を細めて、すぐに澄ました顔に戻してからやっとティーバッグの個包装を開けカップに紐をかけた。恋は盲目なんて言葉は、少なくとも今の深空には通用しないみたいだ。普段深空に勝てることがないため、弱って

いるであろうこのときに少しでも勝ちたいという気持ちが湧いてしまった。

「お前……ずいぶんと余裕があるみたいだなあ」

深空は声に出して笑った。俺の方に余裕がなさそうな感じになってしまったから今回も俺の負けなわけだけど、深空の辛気臭い気持ちは取り払われたようだ。何が引き金になったんだか、俺にわかるときは来ないかもしれない。

それから、俺は珍しく流暢に話す深空の話を黙って聞いた。

もちろん相槌は打っていたが、何か口を出すことはしなかった、というかできなかつた。意外でもないが、深空の恋心は奥深いところまであつたらしく、話を聞く間にポットのお湯は沸いたし、それを使った一杯のティーバッグの紅茶はなくなっていった。俺も口寂しくなって、それを察したのか淹れてもらった紅茶も半分くらいは喉を伝ってしまった。明らかに長谷川さんのお菓子の準備は終わっているのに、呼びに来てくれないのはわざとだろう。ようやく話に区切りがついたところで俺は無理やりしめることにした。散々聞いたよお前の空想ののろけは、もう懲り懲りだ、聞きたくない。

「今まではずっとアリアの肩持ってたけどさ、アリアもアリアだよな」

アリアを悪く言うつもりは毛頭ないが、こうでもしないと深空を強く肯定しないと終わらない気がする。俺はそれ以外の解決方法を探せるほど頭が良くなかった。

「アリアがお前に直接告白するときが来たら、お前ももつと

考えるといいさ。それまでにアリアがめっちゃくちゃ頑張ってお前を惚れさせることができれば、アリアの勝ちだわ。服屋のことなんか忘れてとまではいかないけど、それこそ、『学生の恋は長続きしない』んだろ。気楽に考えろよ」

そうなのだろうかと心配そうな顔をする深空を横目に見つつ、俺はカップの紅茶を飲み干した。すみれの甘ったるい香りは、俺の鼻が慣れてしまったのか、紅茶のフレーバーに押し出されてしまったのか。廊下に暖房が入っているわけではなかったが、締め切られている分、風の通る部屋よりは暖かで、なんだか急に底冷えした感じがした。玄関までふたたび歩くと、長谷川さんはくすくすと笑って待っていた。先ほどと同じように、ふたりで後部座席に座り、家まで送ってもらう。

降車し、手渡されたケーキの袋をお礼しながら受け取り、そのまま帰ろうかと車に背を向けた。すぐに振り返って、後部座席の窓を開けて見送ろうとしている深空にひとこと。

「お前、今最高に青春してるんじゃないか」

適当に格好つけてみる。柄にもないとはい思ったが、今なら許される気がした。深空は依然困っているようだったが、その納得しない顔のまま笑ってくれた。

「そうかもしれないねえ」

そして、そう思っているようには見えない、口先だけみただいな物言いをした。

# 大一大万大吉

鹿児島実業高等学校 一年

前原 夷吹

佐和山城 屋敷にて

黄金色に輝く稲穂が秋風に揺られている。そんな景色を眺めながら妻と二人、仲むつまじく話をする。こんな時間がこれから先も続いてくれたなら。

「干し柿を食べすぎると腹の中の虫が踊りだすと桃雲から聞きました。少し控えてください」

羽のようにかかる、しかし暖かい、そんな声が聞こえてきた。

「こんなに甘いものが毒なわけないだろう」

「甘いからこそです。食べすぎるとお腹を壊しますよ」

「案ずるな、腹など壊さぬ」

「元々お体が強くないのに、どうなっても知りませんからね」

そう言うと、彼女は呆れてどこかにいつてしまった。彼女の名はうたとい、俺の正室である。少し気は強いが。

それにしても美味しい柿だ。これならいくらでも食べそうだな。

そんなことを思いながら柿を食べていると、小走りでひと

りの男が近づいてきて俺に話しかけてきた。この男の名は土田桃雲といい、俺の家臣である。

「殿おー、客人でございまする、いかがしますか」

「そんなことよりお前、うちの妻に何、変な事教えてんだ」

「はて、何のことやら」

「とぼけおって。まあいい。客は誰だ」

「大谷吉継様です」

「吉継か、今行くゆえ、客室で待たせておけ」

「はっ」

吉継。久しく会っていないが、いつぶりであろうか。しかし何用できたのだろうか。そんなことを考えている余地はなかった。

激痛が走ったのだ、腹に。

柿を食べすぎたか。くっ、廁にいかなければ……。だが吉継を待たせるのも……。さてよ、吉継は目が見えん。廁越しに話してもばれないのではないか……。無礼すぎるか。

よし、先に済ませてしまおう。

「桃雲やー、ちよ、ちよつとまで」

去ろうとしていた桃雲を呼び止め、吉継を客室に待たせておくよう指示し、腹を押さえながらゆっくりと廁に向かった。

結局腹の痛みは治まることを知らず、廁で一時間ほど格闘してやっと鎮まり始めた。

廁から戻るとうたが部屋で待っていた。なぜだろう、彼女の小さな背中から大きな怒りを感じる。

「だから言ったではありませんか。あまり食べすぎるなど」  
やはり、うたは怒っていた。

「柿を食べすぎて腹を壊し厠に一時間以上もこもった挙句、  
吉継殿を待たせすぎて怒らせ帰らせてしまったなんて……。  
殿はこの日の本を治める御方、太閤様の五奉行のお一人なの  
です。自覚が足りないではありませんか。少しは反省して  
ください」

「……すまぬ」

とりあえず、反省の意を示すために深々と頭を下げた。

だが全て妻の言う通りである。太閤様が天下を統一してど  
こか気が抜けていたのかもしれない。太閤様には多くの御恩  
を受けたがまだ返しきれいていない。今一度気を引き締めてい  
かねば。

「分かってくれたのならならよいのです。今お茶を持ってき  
ますね」

そういうと、うたは立ち上がりお茶を取りに行った。機嫌  
を直してくれたのはよいが、お茶がな……。

すると桃雲が、

「五奉行であろう御方でも妻には頭が上がりませんな」

といい、にやにやと笑っていた。どこで聞いていたのやら。

「うるさいぞ桃雲」

少し腹が立ったので睨みつけてやった。

「黙ってさっさと働け」

「へーい」

締まりのない返事をしたあと桃雲は仕事に向かった。平気  
で出まかせを言う癪に障るやつだが仕事っぷりは中の上くら  
いで、いぎというとき役に立つ。そう信じている。だがたま  
に本気で首をはねてやろうかと思う。

「茶を持ってまいりましたよ。ついでに菓子も」

「お、おお、持ってきたか」

一時間ほど前も何か食べていた気もするが、うまいものは  
いくらでも腹に入るとうたは笑いながら言う。

「なあ、うたよ。一つ聞いてもよいか」

うたの笑みを見ていたらふと、なぜか聞いてみたくなって  
きた。

「なんなりと」

「……俺には一つ分からないことがあるんだ。これから先……、  
何十年、何百年、皆が笑えて幸せに生きていける平和な世が  
続いていくために、俺は何をすればいいと思う？」

うたは目を細め空を見た。

信長様、秀吉様をはじめとする多くの方が命を懸けて統一  
したこの日の本。もう二度と戦乱の世が訪れないように、日  
の本の民が笑って暮らせるように。俺は何をしたらよいのか、  
日々考えていた。仕事は完璧にこなしているつもりだ。だが  
それだけでは何か足りない。

「大一大万大吉……」

うたが小さな声で口ずさんだ。

「……？ なんだそれは」



うたが続けて話す。

「かつて……平安の頃でしょうか。一人の武将が人々にこう言ったと伝えられています。『一人が万人のために尽くせば、いずれ万人は一人のために尽くすだろう』と。殿は今までと同じように万人の民たちに尽くせばよいのです。そうしたら、いずれ民たちも殿のために尽くしてくれるようになるでしょう。そこにはお互いが手を握り合う、争いや戦のない平和な世があると、うたは信じております」

互いのために尽くしあう平和な世か……。おもしろい。

うたの言葉は俺の心の霧を一瞬にして晴らした。

「万人のために尽くす……か」

「はい、いわゆる『大一大万大吉』です」

「大一大万大吉か……とても美しい響きだ。気に入ったぞ、感謝する」

「旦那様が悩んでたら一緒に悩むのが妻の務めですから」

微笑みながらそう答えた。

本当にいい妻をもったものだ。それと同時にこの笑顔をこの先も守り続けたいとも強く思った。

茶を一口飲む。

「うむ、苦い」

うたがいれる茶はいつもと変わらず苦い。

「文句があるならご自分でなさってください」

こんな時間が永遠に続けばな。

空は紅色に染まる、しかし秋風は止んでいた。そして今ま

で吹いていた時代の風も止み始めるのであった。

三日後、伏見城にて豊臣秀吉、死去。日の本に吹いていた大きな一つの風が止む。そしてその一報は佐和山城で休暇をとっている三成のもとにも届く。

「とっ、殿……。急報にございます」

「何事だ」

「伏見城にて太閤様が死去されたとのことにございます」  
俺は一瞬で頭が真っ白になった。

二年後 関ヶ原

新たな二つの大きな風がぶつかり合う。徳川家康率いる東軍と石田三成率いる西軍。両軍がぶつかり合うのは関ヶ原。決戦の地より北西に位置する笹尾山、そこに本陣を構えるのは西軍、石田三成……。ではなかった。

「うた様、我が軍、兵六千五百布陣完了しました」

明け方前、桃雲が私にそう報告した。

「……時の流れとは早いものですね」

秀吉様の死から、多くのことが一気に過ぎ去っていった。旦那様は、一月ほど前に夢半ばで急逝された。原因は分からない。

そして私は女ではなく、一人の武将となった。旦那様の意志を継ぎ石田家の当主となり、今、旦那様の刀を持ち、鎧を着て、ここにいる。もちろん多くの者から反対された。だが私と同じように旦那様の意志を継ぎ、共に戦ってくれる者も



多くいた。旦那様の人望が厚かったからだろう。

そして今では日の本中を巻き込む大きな戦を始めようとしている。

「拙者はそうは思いませんがな、ゆつたりと流れていきましたぞ」

「お主が何もせんで怠けていたからであろう」

「はっはっはっ、心外極まりありませんな」

桃雲はずっとこんな調子だった。だが私のそばでずっと支えてくれたのも桃雲だった。

「よし、左近らを今すぐここに」

「御意」

二十分後、左近殿ら旦那様の家臣十数名が集まり始めた。左近殿は三成が桃雲と同じく最も信頼を置いている者の一人で桃雲と同じく私を支えてくれた。前哨戦でも見事勝利を収めており、勇猛果敢で味方からも恐れられるほどである。

「奥方様ー、全員揃いました」

ここで一つ皆の士気を上げておこう。女だからと馬鹿にされないよう凛々しく、そして猛々しく見えるよう、堂々と。

「皆の者、早朝からすまない。開戦前に話しておきたい事がある。まずは礼を言いたい。今まで旦那様と多くの苦楽を共にし、亡き後も私を支え続けてくれたこと、誠に感謝する」

「ぐっはっはっは。礼など我らにはもつたないですぞ」

左近が言う。他の家臣たちも続けざまに話す。

「家臣が殿を、奥方様をお支えするのは当たり前です」

「そうじゃ、そうじゃ」

そして桃雲が、

「うた様は我らに尽くしてくれています。だから我らも殿に尽くすのです。これこそが『大一大万大吉』のあるべき姿なのでしよう」

と言った。そうか、そうなのだな。すると左近が、

「お主もたまにはいいこと言うではないか」

「左近殿が女を口説くときの台詞にはかないませんがな」

左近は豪快に笑って見せた。他の家臣らも笑っている。

「静まれ、皆の者。続きを話す。私は太閤様と旦那様の意志を継ぎ、豊臣家跡継ぎの秀頼様に次の天下人へとなってもらいます。しかし家康は豊臣家への忠誠を忘れ、天下人の座を奪おうとしています。許されることではありません」

「皆の者、今一度この私に力を貸してくれ。逆賊、徳川家康を討つぞ！」

『うおおおおお』家臣達の雄叫びが早朝の山中に響いた。するとそれを聞いた他の兵達も一緒に声を上げた。山が、大地が震える。士気上げには成功したみたいだ。

「先鋒はこの儂、島左近にお任せを」

「頼みましたぞ、左近殿」

「はっ」

「各自持ち場に戻り戦に備えよ」

正直なところ戦をするのはとても怖い。だが大将の私が恐れているのは全軍の指揮にも影響する。頼れる大将であらねば

ならない。

こちらには西軍総大将兼、大老の毛利輝元殿をはじめ、宇喜多秀家殿、上杉景勝、大谷吉継、増田長盛など多くの者がいる。数も地の利もこちらにある。負けなどしない。

それから五分程たった後、客人が本陣に訪ねてきた。

「久しいな、うたよ。三成が厠に籠って出てこなかった時以來か」

白頭巾を被った盲目の男が一人。

「吉継殿！」

旦那様の唯一のご友人で旦那様が厠に籠り怒らせてしまつた方、大谷吉継殿。私も昔から仲良くさせてもらっている。

「最後……いや、戦の前にお前と一杯やろうかと思つてな、良酒を持ってきたぞ」

普段はあまり酒を好まないはずの吉継殿と一緒に飲もうと誘つてきている。私も普段は飲まないが、何か思うことでもあるのだろうか。

「一杯だけですよ」

「もとよりそのつもりだ」

白い盃に酒を注ぐ。

「秀頼様に勝利を」

吉継殿と二人で上がってきたばかりの朝日に盃を突き付けた。

「勝利を」

ひと思いに飲み干し、盃を地面に叩きつけた。盃は粉々に

割れる。すると吉継殿が急にこちらを向き話しかけてきた。

「今からでも遅くはない。今すぐここから逃げよ」

「……嫌です。最後まで私も戦います」

「お前は女だ。逃げてもだれも文句は言わない」

「それでも私は戦います。旦那様のために」

「その旦那様から頼まれたのだ。『うたを守ってくれ』と」

「……」

結局私が逃げることはなかった。吉継殿は諦めて帰った。

朝日が昇る。光が旗に反射して輝く。その旗には『大一大

万大吉』と。

夜明け後、西軍の布陣が完了する。その数十万。東軍も布陣を完了する。その数七万五千。西軍は数も地の利も優勢。

「放てー!!」

花火のような音を立てて撃ち出された弾は乱れ飛ぶ。

戦いは東軍の井伊直正隊の発砲から始まった。すぐに西軍も攻撃を開始し、両軍入り乱れての激戦となった。

一進一退の攻防が続く中、やがて西軍内ではころびが目立ち始める。

「なぜ他軍は動かない!!」

うたの言うとおり、石田軍と決死の覚悟で戦っていたのは全体の半分未満で、宇喜多秀家、そして吉継殿くらいであった。島津軍は義弘が『女の言うことなど聞かぬ』と軍を一切動かさず、毛利軍もなぜか一切軍を動かさなかった。

太陽が高く昇った頃、勝敗を大きく左右したのは松尾山に

布陣していた西軍の小早川秀秋だった。東軍に寝返り大谷軍に突撃を開始する。

大谷軍は奮戦むなしく崩壊した。

「殿を守れー!!」

『大谷吉継の首をとれ!!』

吉継の周りで大乱戦が起きた。敵味方の兵が激しく斬りあい、金属のぶつかりあう音がそこから聞こえる。盲目の吉継も感で刀を振るい戦った。だが数の差は一目瞭然。

グサツ!!後ろから槍で突かれた。

「殿!!」味方の兵がすぐに駆け付ける。

「ブハツ……。案ずるな。大した傷ではない」

(うたよ、すまないが先に逝く。必ず生き残れ)

吉継は背中に刺さった槍を左手でつかみながら大きく刀を振るい、突いた奴を斬りつけた。そして大声で味方に言う。

「皆の者!! この敵を一人残らず連れて逝くぞ!!」

『おおおおお』

大谷軍が崩壊して一時間ほどで西軍全体も崩壊し、西軍は追い込まれた。うたもわずかな兵と共に本陣を後にし敗走する。左近などはすでに敵によって討たれ、残された本陣には『大一大万大吉』と書かれた旗と桃雲率いる数十名の兵がいた。

「我らは殿(しんがり)という大役を最後に仰せつかった。うた様のもとへは一兵たりとも行かせぬぞ」

(今度は拙者がうた様に命懸けで尽くす番です)

桃雲は迫りくる万の兵に一切の恐れもなく斬りかかっていた。細かい指揮で多くの敵を翻弄する。しかしその後の生死は不明。石田軍本陣も崩壊。

天下分け目の戦いは東軍、家康の勝利で収束した。うたは死に物狂いで佐和山城を目指したが逃走に失敗。六日後、家康の配下に捕まり、大津城へと護送され入り口で晒し者となった。そこでうたは数々の敵将とあいまみえることとなる。「この度の戦、女ながらに数万の兵を率いられたことはとても素晴らしい智謀でござった。だが勝敗は天の命。人の力でどうにもできるものではござらぬ」

田中吉政がそう言って慰めてきた。

「太閤様の御恩に報いようとして兵を起こしたまでです。運が尽きてしまう事態となりましたが、悔やむことなど何も無い……」

太閤様のためと言ってしまったが恐らく違う。全て旦那様のためだった。

「堂々とした態度、見事なり」

そう言い残して吉政は歩いて行った。

家康方の諸将が家康に謁見するため通り過ぎる中、福島正則がうたを睨みつけ馬上から大声で言った。

「無益の戦を起こした挙句、なんと無様な姿よ」

「お前の首を旦那様の元へ送れなかったことが残念だ」

毅然とした態度で言い放ってやった。

ついで通りかかった黒田長政は馬から下り、

「不幸にもこのような結果となり、さぞ不本意でござろう」

「私がやれるだけのことは尽くしたつもりです」

「そうか……」

するとうたの汚れた衣を見て自分の羽織を脱いで着せてきた。

無論、徳川家康もあいまみえる。

家康は礼を尽くしてうたと引見した。また、うたも石田三成の妻として威厳ある態度で家康と対面した。しかし両者はにらみあうだけで、一言も交わることはなかった。

数日後、うたは処刑場へと連れて行かれる。

途中、喉が渴いたため白湯を所望した。

「湯は無い。干し柿ならあるが」

「干し柿は体に毒なのでいりません」

「ふん、これから殺される者が、体をいたわってどうするんだ」

警固の者は笑った。しかし、うたは、

「お主らのような者にとつてはそうかもしれない。だが私は最後の最後まで命を惜しみ、一人の愛する人のために、万人のために尽くそうとするでしょう。それが大一大万大吉だから」

そうして石田三成の妻、うたの万人に尽くし、そして万人から尽くされた生涯は幕を閉じた。

# Who am I ?

ラ・サール高等学校 二年

吉田 修成

『——フキハラ！ フキハラ！』

校舎裏に子供たちの甲高い笑い声が響く。囃し立てる声が繰り返すのは『吹原』の苗字。

今でも思い出す、子供に特有の残酷なコール。

『フキハラレン』、それが俺の名前だった。でも望んだ名前ではなかった。四方から浴びせ掛けられるあの声は、今でも心の内奥に深く響き渡る。

『アハハ！』

『ドウセ、ナニツテルカナンテ、ワカンナイヨ！』

そのフレーズだけは、ずっと頭にこびりついていた。

『ネエ、キイテルー？』

小学生の頃、俺は——。

キーンコーン、カーンコーン。

高校校舎に響くチャイムで、今日も一日が始まる。

「起立、気を付け、礼！」

おはようございます！

ガチャガチャと鳴る机椅子の喧騒に紛れながら、俺は未だに口慣れない朝の挨拶を呟いた。開け放たれた窓に翻るカーテンを透かして、初夏の朝日が目に眩しい。高校一年生の教室は、今朝もいつも通りに騒がしくて。

まるで楽しいお祭りから、一人だけ除け者にされたような、そんな嫌というほど感じ慣れた気分が湧き上がったとき、

「——それと吹原？ どこだったかな、吹原の席は？」

朝礼が終わる直前に、担任が俺の名を呼んだ。

「っあ！ はい」

慌てて手を挙げる。名前を呼ばれると、反射的に身構えてしまうのは昔からの癖だ。

「吹原、渡すものがあるから、朝礼が終わったら来い。じゃあ今朝は以上だ。終わろう、号令！」

再び騒がしくなるクラスメート達を掻き分けつつ、ある意味彼らから離れるように俺は教卓へ向かった。

「おう、吹原。お前宛てにコレが」

担任は一言そう告げると、無造作に一枚の紙切れを俺に差し出したのである。

「……何ですか、これ？」

英字が踊る謎の紙片に、俺はさっと目を通す。

「えっ」

そして思わず、声が漏れた。

「まあ見ての通りだ。英語ディベート部からお前宛てに、勧誘状が来てるぞ？」

『英語デイベート部』？ まあ英会話サークルみたいなものか？

正直あまり、いや全く乗り気がしなかった。だが（どういう訳か送り付けられた）招待を無視するのも、それはそれで気が引けて。

「……まあ、行くだけ行ってみるか」

結局俺は、好奇心も相まった末に放課後、記された英語デイベート部室へと足を運んでしまったのである。

そして、すぐに後悔した。

「失礼します。……勧誘状を頂いた、一年の吹原です」

部室棟の最上階に上がると、一目でそうと分かる英語表札の部室があった。木製の引き戸を開けたその先、意外に広い部室には上級生に加えて、俺のように勧誘されたと思しき一年組も腰掛けていた。

「——あ、確か君が最後だよな？ さーて、じゃ全員揃ったことだし、チャットチャと始めましょ！」

部屋中央の長机越しに、部長らしき女子生徒がぎつくばらんな口調で場を取り仕切っていた。その後、外国人の顧問が入れ替わるようにして挨拶を始める。俺は若干の気まずさを感じつつ、手近な丸椅子に腰を落ち着けた。

話を聞くに、肝心の『英語デイベート』とは、三人一チームで行われる英語討論戦のことらしかった。

ルールはいたって単純。与えられた議題に沿って、肯定派

(Government)と否定派(Opposition)に分かれた二チームが互いに主張を述べ合い、その理論の優劣を競うというものだ。つまり『英語デイベート』とは、高度な英語力の試される知的な競技なのである！

……と、そんな説明を受けつつ、俺は早速逃げ出したい気分になっていた。

英語が出来ない訳ではない。むしろ俺はその『逆』で……。部のミーティングは週に一回、活動はもっぱらデイベートの模擬戦を行っているらしかった。

顧問は話の最後をこう締め括る。

「Today, we are pleased to welcome new members. So, at a meeting in a week, we would like to try out a mock debate together.（今日、私たちは喜ばしいことに新しい部員を迎えました。そこで来週の集会において、試しに皆でデイベートの模擬戦を実施してみたいと思います）」

おい待てよ。入部するなんて、俺はまだ一言も言ってないぞ？ それに今、サラッと重要な話題が飛び出した気がするのだが……。

「——という訳で早速、模擬戦に向けて班編成をします！ ちよつと机動かしますね？」

顧問に代わって、再び例の部長が場を取り仕切り始めた。何ということだ、どうやら拒否権は無いらしい。流石は英語弁論集団、曖昧な返答など端から受け付ける気は無いようだった。



「つてな訳でよろしく！ 新入部員の——吹原、くん？」

俺のネームカードを見て、元氣澁刺と声を掛けてきたのは何を隠そう、あの部長本人だった。

「！ ……よろしく、お願いします」

とうとう観念すると、俺は彼女にペコリと頭を下げる。その様を緊張していると勘違いしたのか、長髪の部長は北川と名乗ると、あけっぴろげな笑みとともに俺の肩を叩いた。

「そう心配することも無いって。慣れれば英語デイベートも楽しいよ！ ね、『あんた』もそう思うでしょ？」

「…：…いえ、北川女史に聞かれば『そうですね』としか言えませんよ」

北川部長の背後から、別の先輩が現れると、彼は苦笑交じりにそう答えた。スツと日本人離れして整った目鼻が特徴的なその先輩は、不思議な笑みを浮かべつつ俺に片手を差し出す。

「初めまして、吹原くん。僕の名前は——」

「この着色した蜃気楼みたいな男は、井出っていうの。仲良くしてやってね！」

「いや部長、人の自己紹介を横取りしないでください」

困ったように眉を傾ける彼、井出先輩。それを北川部長は軽く笑い飛ばすと、全く気にした素振りもなく話を続けた。

「さくて、じゃ顔合わせはこれくらいね。んで今回、私たちが挑むデイベート議題は、ズバリ——？」

「Whether it is really essential for Japanese high

school students to learn English. <日本の高校生にとつ

て英語教育は本当に重要かどうか>」 ついでに、僕らは肯定派のようです」

「ナイスタイミング井出、イエーイ！」

そんな先輩二人のやり取りを傍観しつつ、俺は居心地悪げに足を組み直すばかりだった。二人の先輩の温度差がまた、この場に奇妙に安定した雰囲気醸し出していた。

「——ところでさ。ねえ吹原君、聞いたよ？ うちの超・難関なああの英語入試、満点だったんでしょ？ うちのデイベート部でも噂になってるよ」

っ…：…それは。

「だから私たち、真っ先に君を勧誘したんだけどね？ これからはチームで一丸、一緒に頑張ろ！」

北川部長の純粋な笑顔が、錆びついた心に容赦なく突き刺さった。

結局この日は、簡単な打ち合わせだけを済ませて解散となった。来週での模擬戦に向けて、ここから一週間は各班で独自に準備をするように、とのことである。

正直言って、全く乗り気がしなかったが。

そんな俺はと言えば、別れ際に井出先輩が妙な視線を寄せたことが、唯一気になっていた。

翌日。

席に座っているうちに授業は飛ぶように過ぎて行くものの、

生憎六限が終わる頃には土砂降りの大雨になっていた。

そして、いつものように一人で裏門を潜ると、俺は帰路へと歩み出す。

雨音が傘を打ち鳴らす下、傘に包まれた身体がふと、雨の煙る路地先に吸い込まれる様な感覚を覚えた。

——と、その時。

ポン。

肩に載せられた手を振り返ると、つい昨日見知ったばかりの顔があつた。

「……井出、先輩？」

相手の名前を思い出すのに、ほんの一瞬だけ掛かった。『日本人』の名前を覚えるのは今も苦手なのだ。

要件は、デイベート部だろうか？

「今きみは、孤独ですか？」

しかし先輩は唐突に、滑らかな口調で不思議なことを尋ねたのである。

「……先輩も今は一人ですよね？」

「まあ僕もそんなところですね。どうでしょう、帰りがたら一緒に寄り道でもしませんか？」

俺が訝しげな視線を返すと、先輩は手にした傘で目を隠しながら、小さく肩をすくめた。

「いや。僕はただ孤独な者同士、二人きりで話し合うのも悪くないかと思つて」

雨の降り頻る路地を先輩に付いて行くと、辿り着いたのは一軒の小さなカフェだった。

軽やかなカウベルの音でドアが開けば、ジャズの流れる落ち着いた空間に足を踏み入れる。先輩は、およそ高校生に似合わないこの店の常連らしく、慣れた仕草で窓際テーブル席へと俺を導いた。

流れる雨粒がガラスをなぞる傍らで、先輩に勧められるままに俺はアップルティーを、先輩はコーヒーを頼む。

「——まずは、僕の誘いに付き合ってくれてありがとう」

「いえ、俺は……いつも暇ですから。一人でいることが多いんです」

「だろうね。僕もそうだよ」

ゆつたりと椅子に腰掛ける先輩を、俺はじつと観察した。出来ることならば、こんな場所からはすぐにでも出て行きたい。人と話すのは苦手だし、何より目の前の先輩は——。

「信用できない、そう思っているよね？」

スツと目を細めつつ、先輩はテーブルの上で指を組んだ。「確かに僕だって、特に信用して貰いたいとも思つてない。だから実のところ、お相子なんだけどね」

「……何が言いたいんですか？」

「きみ、自分自身が嫌いなんだらう？」

先輩は短くそう告げると、その長い指を解いた。

「君みたいな目をした人間には、何度か会ったことがあつてね。君の目は、自分嫌いな人の目だ。昔の僕みたいに」

先輩に正面から見つめられて、思わず目を逸らした。

思い出すのは、思い出したくもない記憶。

小学校の頃、帰国子女だった俺は、日本語が上手に話せず  
に、周囲から『イジメ』を受けていた。

『アハハハハ！』

『ドウセ、ナニイッテルカナンテ、ワカンナイヨ！』

『ニホンゴ、ワカリマスカー？』

あの時はまだ、何を言われているか分からなかった。でも  
何となく自分が『イジメ』られているとだけ分かった。

その時からだ。

自分の『母語』だった筈の英語というものに、俺がトラウ  
マを抱えるようになったのは。『英語』というアイデンティ  
ティーに自分で蓋をしてしまったのは。

「……先輩に、何が分かるんですか？」

気が付くと、そう言っていた。声の震えは抑えられなかつ  
た。

「確かに俺は、自分が嫌いです——。いえ、自分のこと以上  
に……」

言いかけた言葉を、いつもの癖で飲み込む。

俺にとって、英語とは昔の自分が纏っていた脆い殻。『イ  
ジメ』られていた頃の弱さの象徴。

そんな弱い自分が嫌いだったから。とにかくあの頃から逃

げ出したかったから、俺は日本語にのめり込んだ。ずっと必  
死に日本語を勉強し、何とか今の高校にまで入れたのに……。  
それなのにどうして、ここまで英語の影が追いかけてくる  
のだろう？

「まあ、そんなところだろうと思ったよ」

先輩は、いつの間にか手にしたコーヒートをすすりながら、  
そう呟いた。「本当、昔の僕にそっくりだよ」

「？」

怪訝に思っただけ顔を上げた先。先輩は豊かな前髪をぐしゃり  
と掻き上げると、一言こう質問した。

「君にはこれが、地毛に見えるかい？」

「……え、その髪ですか？ 普通に黒髪ですよね？」

「本当かな？」

もっと近くで見てごらん、と言う先輩に促され、俺は遠慮  
がちにテーブルに身を乗り出した。

彼の髪は一見すると、普通の黒髪に見える。しかし間近か  
らよく見てみると。

掻き上げられた前髪の付け根には、下からうっすらと色素  
の薄い髪がのぞいていた。

さらに俺が目を逸らした先。知性を湛えたその瞳は、普通  
の日本人と比べて少しばかり青みがかったように見えた。

「……え？ つまり先輩って」

「まあ、そういうことだね」

道理で昨日、初めて会った時に先輩の目鼻立ちがはつきり

していると思った訳だ。

「先輩、もしかして下の名前は」

「教えないよ？ 僕はハーフでも『日本人』なんだから」

静かにそう告げると、先輩は儂げに微笑む。

「一つ言っておくと、僕は自分の過去を語るつもりは無いし君にも語らせる気はさらさら無い。けれども……世の中には君と似たような人間もいると知っておいてほしくてね。君自身は、そうは思わないかもしれないけど」

「は、はあ……」

そんな俺を尻目に、話は終わったとばかり先輩はコーヒーを飲み干すと、さっさと立ち上がってしまった。

「え、ちよつと待ってください……」

冷めたアップルティーを、一気に飲み干そうとして、俺は少々むせながらも鞆を肩に引っ掛ける。

「あの、ここのお会計って」

「ああ、それなら心配しなくて良いよ？」

井出先輩は振り向くと、薄く微笑んだ。全てを無言で包み込むようであり、同時に微妙な距離をも感じさせるような笑みだった。

「君の勘定は僕が奢ってあげよう、税抜き価格の分はね」

会った時と同様、先輩はまたもや不思議なことを言うと、手早く会計を済ませて店を出てしまった。

遅れて会計台に立った俺の目に入ったのは、コイントレイにきちんと積まれる先輩の残した三百四十円分の硬貨だった。

カフェを出てみると、まだ空は曇っていた。だがいつの間にか雨は止んでいた。

週が明け、模擬戦まであと三日となった。月曜の昼休み、いつも通りに一人で弁当を突いていると、ポケットが振動し新着メッセージの受信を告げた。

『プリーズ カム トゥー イングリッシュ デイベート クラブ ルーム デイス アフタースクール』

英語をカタカナに文字起こししたメールの送り手は、もう一人の先輩、あの北川部長であった。

思わず教室の天井を仰ぎ見ると、俺は嘆息混じりに呟いく。

「あゝ、入る部活、完全に間違えた」

終礼後、部室を訪れると部長はまだ来ておらず、井出先輩だけが一人ちょこんと座っていた。

先週のことで一瞬気まわず感じたもの——先輩の様子を見た俺は、一気に脱力した。

と言うのも井出先輩は、なぜかコマに興じていたのである。それも安い玩具ではない。日本の昔遊びで見ると、円

錐コマを太い紐で巻いて投げるやつだ。

「——あ、吹原くん。ちよつどいいところに来たね」

カツン！

先輩の放ったコマがリノリウムの堅い床に弾けると、見事な姿勢で回転を始めた。反応に困る俺に、先輩は長い指でコ

マ紐を弄びながら話し掛ける。

「これは日本人の祖父の形見なんだよ。コマというのは『独り楽しむ』と書いて『独楽』と読むだけでもね。ところで吹原くん、君には……」じつとコマを見つめながら、先輩はぼつりと俺に尋ねた。「自分の『軸』があるかい？」

「あ、えっと……」

俺の見つめる先、コマが不意にグラリと傾く。

「……無い、かもしれません」

コテンと倒れてしまったコマを、大事そうに抱え上げると先輩は俺を見た。

「実を言うと、僕もまだ答えを探している最中なんだ」

「……」

その場に流れる沈黙。だがそれは既に、俺にとって居心地の悪いものではなかった。

この静寂を破ったのは他でもない、この集会の主催者である。

「——ドカーン！ Hey you two, Good afterschool!」

両腕いっぱい謎の紙束を抱えつつ、戸を蹴り開けて入ってきたのは北川部長である。奇妙にハイテンションな彼女はその勢いのまま、部室中央の長机にその紙束をぶちまけた。

「ハイこれ！ 私の調べた、日本の英語教育に関する賛否資料ね！ 二人分書き写したから模擬戦の参考にして！」

現れた時と同様、長髪を颯爽となびかせ部長は部室を飛び出していった。

「……オウ」

井出先輩が、奇妙な面持ちで彼女を見送りながら呟く。

「えっと、北川部長ってちょっと変わってます？」

「まあそうだね。いや、かなり変わっているかも」

井出先輩はやれやれと頭を振ると、机上の紙片をかき集め始めた。ルーズリーフは全て手書きであり、彼女が如何に本気でこの模擬戦に臨んでいるかが見て取れた。

俺も慌てて先輩を手伝っていると、ふと先輩が呟いた。

「……僕は北川女史を『努力できる馬鹿』だと思えますね」

「？」

首を傾げる俺に、先輩は独り言だよと答える。だが俺の聞きたそうな様子を見ると、ぼつぼつと話を続けた。

「——あれでも北川女史は、一年次に入部した頃なんて英語が大の苦手だったんですよ？ でも入部したての彼女は、他のどんな部員よりも努力していた。彼女はどんな欠点でも愚直な努力で埋められる、いやむしろ盛り上げることすら出来る。そして今や部長にまで上り詰めた北川舜華（しゅんか）とはそういう人物です」

ふと視線を上げると、先輩は俺と視線を合わせた。

「欠点に対するアプローチは様々ですよ。僕はまだ、彼女みたいにゴールまで辿り着けてないですが。でも僕は、そんな北川女史のことを尊敬しています……」

そう言うと、先輩は不意に悪戯っぽく微笑む。

「彼女のそういうところが、僕は好きですね」

「——ねえ井出、バツチリ聞こえてるわよ？」

突如響いた声に振り返ると、引き戸から部長が半身だけ体を覗かせていた。

「と、取り敢えず井出！ 後で教室まで来なさい、シメるから！」

頬に朱を刷いた彼女は荒っぽく言い切ると、そのまま足音高くその場を去っていった。

はっと振り返ると、井出先輩は先ほどの表情のまま見事に硬直していた。

そんなこんながありつつも、模擬戦の日はやって来る。

——部室に満ちる奇妙なささやき。発表原稿がめくらられる滑らかな音。目には見えない、だが張り詰められた、緊張の糸。二人の先輩と大まかな原稿を交換しつつ、チームは発表の最終確認を行っていた。

ディベート開始まであと五分。

よく書いたものを見れば、人となりが分かるという。俺がざっと目を通したところ、北川部長の文体は明朗快活、かつ大胆に助動詞も組み込む感情派だ。対して井出先輩はあくまで淡々と、しかしさりげなく核心を突く議論が焼き上がった。いて。

「——ん、ねえ？」

その時、部長がふと小さな眩きを漏らした。何事かと顔を上げてみると、彼女は手にした俺の原稿を指さしている。

「吹原くんさ？ これ全部、君が書いたの？」

「そうですけれど」

そう答えた直後、彼女は明らかに、不快そうに眉をひそめたのである。

井出先輩が何か口を開きかけたが、それを制する様に部長はスツクと立ち上がった。そして彼女は珍しくも、冷たい目つきで俺を見据える。

「ねえ君、この原稿……本気で書いてないよね？」

ああ誰だったか、書いたものを見ればその人が分かると言ったのは。

「こんなこと、本当は言いたくないんだけどさ」

部長はそう言うと、手にした原稿を丸めたため息をついた。

「私ね……本気を出さない人間は大嫌いなものよ」

「！」

——「本気」？

そんなもの、俺には……出せる勇氣なんて無い。

不意に蘇るのは囁し立てる声。誰にも頼ることの出来なかった、独りぼっちだった記憶。

あのとき悟ったのだ。この国では誰も、ありのままの俺なんて受け入れてくれないと。その感覚が今日までの俺を形作ってきた。



そしてそれは、きっと『ここ』でも変わらないんだろう。そう思い至った、その時だった。

不意に、部長がスツと片手を伸ばすと、俯きかけていた俺の顔をグイと自分に向けさせたのである。

「つまり、何が言いたいかってね？」

その真つ黒な瞳が俺を真正面から射貫く。刹那、どうしようもなく身動きが出来なかった。

「——私たちには君が『必要』だってことよ。ね、分かってくれる？」

「！」

「『必要』」だって？

そんなことを言われたのは……ああ、生まれて初めてだった。

「必要？」

ずっとずっと否定していた。逃げ出して、嘘を吐いて、取り繕って誤魔化して。悪いのは全部英語だと、そう言い聞かせて。

『必要』。

だが、たったその一言が、まるで独楽のように脳裏をクルクルと駆け巡る。

いま蘇るのは、あの一言。

「君には自分の『軸』があるかい？」

……やっぱり心のどこかに、決して譲れない自分がいて。

そうか。ずっと前から気付いていたんだ。自分を偽って生き

ることに、もう飽き飽きしていたことにも。

だから……だから今ならもう一度、あの頃の小さな自分に寄り添ってあげられるかな？

「私たちに見せてよ、君の本気をさ？」

北川部長が言葉を重ねる。だがそこに嘘偽りの響きはなかった。

「だって、そっちの方が断然『面白い』と思うってこと。分かってくれる？」

明日は、どんな自分になりたいだろうか？

この英語デイベート部でだったら、自分を取り戻せるかもしれないんだ。

この二人の先輩が

もし俺の英語を

必要として

くれるの

ならば

俺は

——

っ

——カツン！と。

『軸』が床に跳ねる音がした。

「分かりました」

告げた言葉と共に、俺は部長をしかと見返した。

なぜなら。

彼女の手から原稿を取り戻すと、それをグシヤリと握りつぶす。

もう、迷わないから。

先輩が俺を必要としてくれるなら、俺はそれに全力で応えたい。もう逃げるのは終わりにしよう。

「俺、やってやりますよ、今度こそ。アドリブだって躊躇はしません」

言い切ってみせた言葉に、北川部長はニヤツと不敵な笑みを浮かべて応える。

「へー君も言うじゃん？　じゃあチーム一丸、今日はド派手にやっちゃおう！」

「はい！」

「僕も異議なしですよ」

井出先輩も便乗すると、俺の肩にトンと片手を置いた。

「さっきはどうなるかと冷や冷やしましたが……でもまあ、終わり良ければ総てよし、ですか？」

「ええ。これも井出先輩のおかげです」

「いやいや。僕はただ、有望な新入部員をみすみす逃したくなかっただけだね」

相変わらず底の読めない受け答えをする先輩に、俺は初めて心の底から笑った。

ちょうどその瞬間、部室にタイマーの音が鳴り響く。『準備時間』は終了、これから本番が始まるのだ。

「Are you ready to debate? 〈ディベートの準備は出来たかい？〉」

顧問の言葉に、チームは皆うなづく。

そしてこの時、俺は確かにチームの一員だった。

## 青鈍書簡

鹿児島情報高等学校 二年

西堀 菜生

12

ご無沙汰しております、先生。無沙汰って漢字、調べてはじめて書きました。「沙汰」ってなんだかオシャレな楽器みたいなね。どんな音が鳴るのかしら。いえ、話を戻します。ねえ先生、ポストは木製にしてって私言いましたよね。

この間のこと、私は無かったことにするつもりは全くありません。あなたが腹をくくるまで言い続けますからね。あなたから話してください。あなたには話さなければならぬ義務があるでしょう。

2

はじめまして、先生？ 知らない人なのに先生って呼ぶの、すつごく、違和感があります。申し遅れました、私は先生の手紙を拾ったものです。あなた風と言うのなら、物好きです。私のことは、君、とでも呼んでください。元々前の手紙に君って書いてあったし。先生が名前を明かさないので私だけ言うのは不平等でしょう。そう、それで思ったんですが、

本名を書かなくても住所書いてたら不用心も何もないんじゃないですか？ 家に行けば苗字も分かっってしまうし。拾ったのが私で良かったですね。

ねえ先生、人生って何があるか分からないものですね。まさか自分がこんな漫画みたいなことするなんて。顔も名前も知らない相手との文通、夢があって結構じゃないですか。

先生が良い人間だということを感じて、私も住所を記しますね。また。

3

自分で書いって何ですが、まさか返事を貰えるとは思いませんでした。ありがとうございます。ポストを開けたら全く覚えのない字体で「先生へ」と書いてあるものだから驚きました。この流れだと僕は「君へ」と書かなければならないのでしょうか。なんだかキザったらしくて嫌ですね。改めてこれから、よろしく願います。

さて、早速ですが、この手紙って何を書けばいいんでしょうか。いえ、僕から始めたんですが、よく考えていなかったというか。個人が特定されない程度の出来事とか近況とかでしようか。

この手紙を書く用に万年筆を購入したのですが、思ったより書きやすくて。今この字ですね。紙の上をペンが滑る滑るんですよ。なんてメーカーでしたか、黒くて金の装飾が入っているものです。少し値段が張りましたが、どう

せならいいものを、と奮発してみました。インクも色々な種類があったので、どうせなら揃えてみたいですね。君は何の色が好きですか。

ト

万年筆ですか。私、万年筆って使ったことないです。アレってどこからどうやって書くのか分からなくて。今のこれは見ての通り普通のシャーペンです。ペンだと書き間違えた時、修正テープ使わなきゃいけないの面倒じゃないですか？でも便箋はちよつと良いやつを使ってますからね。和紙みたいでしょう。毎回書いてる時に破ってしまいそうで怖いんですよね。

話が逸れました。何の色が好きって先生、変な聞き方をしますね。それじゃあ、まるで物や概念がないと色が存在しないみたいじゃない。好きな色は青です。水色とか空色じゃなくて、冴えるような、青の水彩絵具そのままのような、濁らず薄まらずの青が好きです。是非インクはその色にしてください。先生は何色が好きですか？

五

難しいことを言いますね。そんな青、インクにあるのでしょうか。今度見かけたら買ってみたいことにします。僕が好きなのは灰色です。灰色、あんまり分かって貰えないんですが、白でもなく黒でもなく、かといって色味がないところが素敵

だと思うんです。けれどこれを言うと大抵変な顔をされてしまいます。きっと君もそういう顔をすることでしょう。話が逸れました。

この手紙も、もう五通目ですね。ここまで続けてくださってありがとうございます。長らく手紙というものを書いていなかったのも、もう書き方を忘れてしまっているようです。こんな感じで合っているのでしょうか。文通、今のところきちんと続いています。君がやめたくなったらいつでも勝手にやめてくれて構いません。君には選択する権利がありますから。

ウ

ねえ先生、手紙っていうのは、すぐに相手の言葉が、返事が聞けないからよくないですね。この文だってあなたが読むまで、すべて私の独り言ですもの。つまり何が言いたかった、私の手紙はいつも話し言葉みたいだってこと。まとまっていたためしがないわ。気にしないでください。灰色、とっても先生らしいです。灰色が好きな気持ちなんて私には全く分からないけれど、けれどもそれでもあなたは無彩色という感じがする。

話は変わりますが、この間ふと思ったんです。そういえば改めて私、先生の名前も顔も知らないんですね。知っているのは文字と思想と使っている万年筆くらい。こうやって書くとなんだかロマンティックね。手紙をポストに入れる時、表

札をちらと見るんですが、何と書いてあるか未だに判別できないんです。あんなに掠れた表札で不便無いんですか？ ああそうだ、家も知っているわね。追加しておいてください。それにあなたがなぜ先生と呼ばれているのかも知らないわ。いちばん初めってどうでしたっけ。確か、あなたが先生と呼んでくれて構わないって、上から目線で言ってきたような気がします。

気になったので今確認してきました。やっぱりそうだった。先生って時々自尊心っていうか、そういうのが見え隠れしますよね。見てる分には面白いのいいですが。

ここまで書いていてなんですけど、別に本名は教えていただかなくて結構です。興味が無い。次の手紙、顔写真とかも添えないでくださいね。

↑

君が僕をどんな人間だと思っているのか知りませんが、僕は自尊心がそんなにある自覚ありませんし、上から目線で言った記憶ありません。本当にきちんと確認しましたか？それにそれを言うなら僕は君を「君」以外で呼んだことがない。君は役職名で呼べてるだけマシだと思った方がいい。勘違いしないで欲しいので先に言っておきますが、僕は学校の先生でも作家としての先生でもありませんからね。詮索しないでください。

けれど、僕は少なからず君のことを知っているつもりです

よ。君が、漢字があまり得意では無いこと。句点を丸でなく点で打つこと。意外と語彙力があること。言いたいことを隠さずそのまま言うこと。思考がくるくる回ること。情緒不安定なこと。喋るように文字をつづること。何故か敬体と常体が混ざること。冴えるような青色が好きなこと。それと、「ねえ先生」が口癖なこと。口癖という言い方は違いますね、書き癖って言うんでしょうか。こうやって書いてみると、僕は君のことをよく知っているみたいだ。いえ、きっと気のせいでしょう。すぐに思い上がるのは僕の悪い癖です。僕には何の権利もないのですから。

∞

ねえ先生、ご存知ですか。私がこの手紙を何回書き直したか。あなたの目に入らなかったゴミがどれだけあるか。ああいけない。字が震えてしまっているのに気がついても、知らないふりをしてくださいね。ペンなんかで書くんじゃない。あなたも万年筆を使っているというから、私も真似して同じものを買ったんですよ。高くて黒くて金の装飾が入った万年筆。わざわざ文房具店に行って、その万年筆を見つけた時の私の気持ちが……。もういい、もういいです、馬鹿みたいね。もうこの文を読み返す余裕も書き直す余裕もありません。すぐに封をしてお送りします。お送りって言い方も違いますね、持っていくっていうのが正確かしら。郵便なら郵便局のポストに入れるだけなのに、私たちなんてお互いの家ま

で持っていくなんてめんどくさいことしてるんでしょね。これをはじめに言ったのはあなただった。私、今からあなたの家まで行って、ポストに手紙を入れて、そして帰るんですよ。たった一回呼び鈴を押せばあなたに会えるかもしれないのに。

ねえ先生、ポストを木製にしてください。いつもポストに手紙を入れるとね、コトンって音がするんです。私その音を聞く度に、ああもう取り返しがつかないんだって思って、もうどうしようもないような気持ちになるんです。銀色に光る錆び付いたあなたの家のポスト、あの冷たい感触をずっと、指先が覚えているんです。

私、先生の最初の手紙の、切手代が何とかって、嘘だって最初っから気づいていたんですよ。たったそれだけのお金が惜しい人なんているものですか。ポストを木製にしてください。

そうすれば、私が、こんなに惨めな思いをしなくて済むから。結局私のためなんです。私は一度だって、なんだって、あなたに勝てない。

6

突然ですみません。君とはもう文通することができなくなりました。今まで僕に付き合ってくれて、本当にありがとうございました。ごさいます。

10

事情を説明してください、先生。どうしてですか。前の私の手紙が気に障りましたか。先生。話してくれなければ分かりません。私はまだあなたと、全然話し足りない。

11

先生。あなたって卑怯よ。

12

どうか僕を見ないで。

13

前の手紙から、数週間経ったでしょうか。僕にはもう、いえ、違います、最初っから、君と話す資格などなかったのです。この手紙も出そうかどうか迷いましたが、このまま無視すると君は僕の家に入り込んできそうなので返事を書いています。

君は義務と言いましたが、僕はそう思いません。僕にはなんの権利もありませんが、なんの義務もないでしょう。ならば話したくない。自分勝手ですみません。僕から手紙を出すことはもう二度とないでしょう。さようなら。

14

さようなら、じゃないですよ。勝手に終わらせないでくだ



さい。終わりを決めるのは私です。あなたは権利という言葉をよく使いますね。そんなに逃げ道が欲しいのですか。言わせていただきますが、あなたには決定権も拒否権もありません。まだ、はぐらかすおつもりですか。

ねえ先生、私たちがまるでそれがルールみたいのに、手紙の最初に数字を書くじゃないですか。この数字、本当はズレていることに気づいてますよね。貴方がなかったことにしたあの手紙、私は今も持っていますよ。なんなら今ここにまるっと書き写しましょうか。あなたがあのことを忘れるというのなら、私も私で勝手にやらせてもらいます。先生。私は怒っているのですよ。先生は私があなただの家に乗り込んでくると言いましたが、実際あのことがなければ数日後にはあなただの家に乗り込みに行くつもりでした。そして今は乗り込むなんかで済ませません。殴り込みに行きます。私はいつだってできるんですからね。そのことをお忘れなく。

ねえ先生、この文通を始めたのはあなたですよ。

15

あの日、あなたは私の家に来ていた。そしてポストを眺めていた。いえ、手で摘んでいた手紙をポストに入れようか、ためらっているようだった。私、あなたの姿なんて全く知らないのに、一目見た瞬間すぐにあなただと分かりました。ああ、この人が先生なのか、って。けれどあなたは私の顔を見るなり逃げ出した。遅れてポストからカコンという音がした。

先生。どうして私に、あんなことを願ったんですか。

この前手紙に書いたこと、訂正させていただきます。興味が無いなんて嘘よ。私ね、はじめてあなたの手紙を読んだ時、笑ったんですよ。この現代社会で手紙って。それからどうしてあなたと文通を始めたと思いますか？

あなたがどんな人か知りたくなってしまった。こんな文章を書く人は、一体どんな人間なんだろうと。早く言ってしまえば興味本位です。それにちよつとカッコつたことを言うと、なんだかあなたが私という人間に向けて書いているような気がしたのです。

最後に、あの手紙に使っていたインク、灰に濁りすぎです。私はもっと冴えるような青が好きだと言ったでしょう。

一

この手紙を読んでいる君へ。

この手紙をいつどこでどんなふうに読んでいるか分かりませんが、この文を読んでしまった時点でこの手紙は君のものです。君の好きなようにしてください。そして、もし君さえよければ、いえ、君の気が向くのなら、僕と文通をしてはくれないでしょうか。

僕は、そうですね、「先生」というものです。そう呼んでください。勿論、本名ではありませんよ。この手紙が誰にどう読まれてるか分からないのに、本名を書くのは不用心です。で、仮名で名乗らせてもらいます。

文通といつても、郵便はしないでください。理由は、切手代が惜しいということにしておきましょう。それ以上聞かないでください。住所を記しておくので、僕の家まで来てポストに直接手紙を入れてくれませんか。

こんな手紙を書く人間と文通をするなんて、相当な物好きしかいないと思いますが。でも、もし君がその物好きだったなら、僕は嬉しい。お返事待っています。

16

僕の負けです。以前君は「私はあなたに勝てない」と言いましたが、そもそも最初から僕はあなたと同じ土俵に立ててなどいなかったのですよ。あなたの勝ちも負けもなかったのです。あなたが、優しきで、僕と話してくれたのですから。姿も見えない僕と。けれどもう、それもいいです。僕の根気負けですから。

全て隠さず、白状致します。

ええ、僕は知っていた。君の姿を。手紙の相手を。

君は知らないでしょう、だって僕の一目惚れというやつなので。どうかして、君と話がしたいと思った。君のことを知りたかった。でも、直接話かける勇氣なんてなかった。だから手紙を書いた。それも匿名で。君からすれば僕はただの不審者ですから、いえ、匿名の手紙もそれなりに不審者だとは思いますが、でも僕というそのまま知られるよリマシだと思った。

手紙は君が気づくであろう位置にわざと置いた。返事を貰えるかどうかは賭けでしたが。僕がどうして郵便ではなく直接ポストに入れるよう指定したか分かりますか。君の姿が見たかったからです。気持ち悪いでしょう。僕は君が僕の家に来る時、いつもカーテンの隙間からこっそり覗いていたんですよ。でもこの前、八通目の手紙を読んだ時、もう限界だと思った。

君との文通は楽しかった。

けれどそれ以上に僕は恐ろしくなりました。

この間の手紙は、書いた方がいいが君に出していいものか、君に読まれてもいいものか迷っていたのです。あの手紙ですべてが変わってしまうような気がしたから。

けれど君が来てしまった。僕はとっさにポストに入れかけていた手を、その指先で掴んでいた手紙を離してしまった。

あの瞬間に僕は、君でいう「取り返しをつかないでしょうもない気持ち」になってしまったのです。

あの手紙に書いてあったことが、僕のすべてです。謝罪にも独白にも、懇願にもなり得ない中途半端なものでしたが、あれが僕のすべてです。格好悪いでしょう。君に幻滅されたくなかったのです。君に知られるのが、嫌われるのが、怖かったのです。

これは懺悔です。どうか僕を許さないでください。許してもらおうとは考えていません。君を騙していたようなものなのです。君が言う通り、全ての権利は君にあります。君

が選択してください。

青のインク、本当は君が言った通りのような色を見つけたんです。けれど僕はそれに灰色を混ぜた。青は僕には眩しすぎたから。ポストは木製にはできません。

二

ここまで来て格好つけないうでください。バカなんですか？あなたはへ許さないでください」と言いましたが、それはへ僕は許してもらいたいけど君は許してくれないだろうから諦めるしかない」の意味でしょう。私をナメないでください。

ねえ先生、私が今どう思ってるか分かりますか？

私、嬉しいんですよ。あなたがなんだか、ようやく私と同じところに来てくれた気がして。私が無理やり引きずり上げただけかもしれないが、それでも今までは私ひとりだけがあなたのことを想っているようだったから。まあ正直、少しだけ気持ち悪くはありますが。

それにね、先生。先生の前の手紙、あれは懺悔なんかじゃありませんよ。罪の告白ではなく、愛の告白でした。なんかおかしくって笑ってしまいます。あんなに自分本位なラブレター、初めて見ました。あなたは自分が可愛いんですね。そして、その自分が可愛いあなたのことが可愛いのです、私は。

青のインクだって、わざわざ灰を混ぜるとは。そんなに私のことがお嫌いですか？これだけ言ってまだ木製にしてく

れないのも。あなたも強情ですね。いいんです、あなたはきっとそうするだろうと分かっていたから。なんでしようか、あなたが灰を混ぜたのもポストを木製にしないのも、すべて濁りとは思えないんです。それがあなたにとっての、私で言う青なのでね。

ねえ先生、この感情ってなんて言うんでしょう。無駄に文学チックなあなたなら分かるんじゃないですか？

次の手紙で、教えてくださいね。

## 写真の中

鹿児島情報高等学校 二年

松永 莉奈

「おはようございます。ご満足いただけただけでしょうか」

真っ白なベッドの上で薄らと目を開けた男性に声をかける。気難しそうで、無愛想な男性。そんな彼を満たしてあげることはできたのか。少しの不安と緊張から逃げるように目を瞑る。息をたっぷりと吸ってから再び目を向けた先の彼は微笑みを浮かべていた。

「ああ、ありがとう」

頬を緩ませてゆっくりと息を吐いた。

「ただいま」

靴を脱いだらすぐに脱衣所へ向かう。何よりも先に風呂に入るのがいつからかルーティンとなっていた。濡れた髪をわしゃわしゃとふきながら自室に向かう。カバンの中の昼に食べたコンビニのおにぎりの包み紙を掴んでゴミ箱に突っ込んだ。ペットボトルのお茶はまだ少し残っていたので、その場でぐびっと飲み干す。ぬるくて、茶葉の溜まった底のお茶が変に口に残った。次のリサイクルの日はいつだったかな、と

考えながらリビングへと歩く。廊下に漏れ出る光と、透ける人影を感じるこの瞬間に幸せを感じる。

「今日もお疲れ様」

ドアを開けると笑顔で迎えてくれる彼女が目映る。それと同時に鼻をかすめるカレーの香り。それへの反射のようにお腹が鳴る。驚きつつもふたり目を合わせて笑う。さっきとたべちゃおうか、とキッチンへ向かう彼女に続く。おそろいのカレー皿に、おそろいのスプーン。二人での新生活を始めるにあたり、いっしょに選んだものだ。僕がご飯を盛り、それを受け取った彼女がカレーを注ぐ。立派な結婚式でのケーキ入刀じゃなくて、こんな細やかな共同作業ですら幸せを感じる。彼女がすでに綺麗に盛り付けてくれていたサラダも運び、向かい合って座る。いつか、子供ができてこのテーブルを囲めたら、もっと大きなテーブルを囲めたら、なんて考えながら手を合わせる。僕好みに細かく切られた野菜。彼女自慢の隠し味はすりおろしたりんご。甘めのカレーはとっても美味しくて、もうしばらくは僕だけで彼女の愛を独り占めするのがいいかなと思う。

「誠一、先にベッドで寝ちゃいなよ」

彼女に勧められるがまま飲んでしまったお酒と、それと少しの疲れもあって、目をしばしば瞬かせていると、彼女の素敵な提案。今寝てしまえばとても気持ち良いだろう。でもそうしてしまえば、なにかから覚めてしまえば、変な不安が混ざる。でもそれでも眠気には勝てなくて、リビングを後

にし、ベッドに沈んだ。

はっと目が覚めたのは次の日だった。カーテンの隙間から朝の明るさを感じる。目をぐりぐりと掻きながら、ゆっくと現実を受け入れていく。ああ、今日も仕事だ、と。仕事が嫌なわけではない。ただ起きなければいけないということが嫌なのだ。ゆっくと上半身を起こし、ぐーっと伸びをする。はあ、と短く深いため息をついてぼうつと一点だけを見つめる。静かな朝の部屋には時計の秒針の音だけが響いている。カシン、と秒針より少しだけ存在感のある分針の音ではっとする。そろそろ動かなきゃ。よっこいしょっと大袈裟な独り言で気合いを入れ、立ち上がる。あげてしまえば軽い腰。素早く身支度を済ませて、飲料ゼリーを片手に家を出る。「いつてきます」

僕は写真の中の本人に意識を送り込むことができる力を持っている。だけど送り込まれた本人は写真の中である自覚を失ってしまうし、写真の中とあまりにも違う場面にはならない。つまり言い換えるなら、その写真と同じ過去をもう一度体験させることができる力だ。この力は父方の家系で家業と共に受け継がれてきたものである。家業とはこの写真館の経営をしつつ、舞い込んでくる依頼に答えるというものだ。家族写真や記念写真などの撮影が主ではあるが、時々力を使う依頼がくる。僕自身がそれを宣伝することではなく、それは以前の代でも同じであったと思う。それでもどこからか情報が

流れているのであろう。依頼が途絶えることはない。写真館の存続と依頼の遂行。この二つは先祖代々継がれている使命なのだ。

だから、彼女の要望は受け入れられない。

「私を弟子にしてください！」

お昼すぎ。カラン、と鳴るベルと共に開いた扉に目を向けると、見知った彼女が頭を下げていた。

「玲ちゃん、急にどうしたの」

僕の婚約者である凜の妹。よく知る顔ではあるが、あまりにも突然で奇妙な登場をした彼女に首を傾げる。

「私、結構優秀ですよ」

頭は下げたまま顔だけこちらに向けているというはじめてな格好をした彼女が僕の困惑を無視して言う。

「とりあえずこっちきて座りなよ」

彼女の言動全てが不思議であったが、話を聞かないことには何もわからない。何か事情があるはずだ。

「それで、どうしたの？ここに一人で来るなんて初めてじゃないか」

お客さんとの相談用ソファにそおつと座った彼女に問う。苦笑いをして頬を掻きながら話し始めたことをまとめるとこうだった。つい先日高校を卒業したらしい彼女。バイトに明け暮れた高校生活を送っていた彼女は卒業後もそこで働き続けるつもりであったのだが、その店が急に閉店することにな



ったため就職先がない。だからここに弟子入りし、アシスタントとして働きたい、と。全くの初心者である彼女を雇うことに少なからず不安があったし、それほど余裕もなかったの  
で、とりあえず午後のみで数日の試用期間を設けることにした。

「早速で悪いんだけど、一時間後に予約が入ってるから」  
突然すぎるんだから、とりあえずの基礎的な知識だけを彼女に詰め込んだ。

予想を遥かに超えた。予約の時間になって訪れた老夫婦に笑顔で対応し、撮影が始まれば自然な笑顔を引き出すトークを繰り返して、僕の指示に従った補助までしてくれた彼女。さすがに照明管理など専門技術が必要なものには少しだけ粗が見られたが、それも初めてなら百億満点の出来である。撮影を終え、満足そうに彼女と話している老夫婦を見ると、彼女の優秀さが目に見えて分かる。

「それである、予約の時には聞けなかったんですけど」  
ワントーン下げて話し始めた奥様。僕にはこの後に続く話が容易に想像できた。

「写真の中に入れるという話は本当か、ですよね」  
彼女らに割って入るように口を挟む。驚いた様子の奥様であつたがすぐになっこりと微笑んだ。

「ええ。やっぱり本当みたいね」  
この言い方じゃ誰かからか話を聞いたのだろうけど、それ

が誰なのか、どこなのか、尋ねることはなんとなくいけないような気がしている。

「そんなこと言ったって、簡単には信じられないさ」  
少しだけ不機嫌が滲んでいる旦那様が言う。こんなこともまったく珍しくない。

「いいえ、事実なのは私が保証致します」

はつきりと言った彼女。口元はになっこりと微笑んでいるが、なにかもを吸い込みそうな黒目に見つめられるとどこか圧を感じるのには確かである。旦那様の眉がピクリと反応した。

「君がそこまで言うのなら、ぜひ体験してみたいね」

ふっと零れた旦那様の笑いにもう疑いはなくて、期待が含まれているように見えた。

「かしこまりました。それでは奥の部屋へ」

薄暗く設定してある部屋の電気の下に真っ白で大きなベッドが一つ。そこに二人並んで寝そべてもらう。先程預かった写真には若かりし二人の間に、小学生くらいの男の子が満面の笑みで写っている。背景から推測するに、遊園地だろうか。幸せそうな一枚である。写真を見てから、本人達と目を合わせる。それから彼らの手を握れば彼らはすぐに眠りにつき、その時意識はもう写真の中へ送り込まれている。

「ごゆっくりどうぞ」

部屋を出ると、お客さんとの相談用ソファに彼女が座っていた。ドアの開く音にこちらを振り向いた彼女は不安げな



表情をしていた。

「お疲れ様。すごい仕事の出来だったよ」

そう声をかけると彼女の表情が少しだけ緩んだ。

「私、上手に出来てました？」

「そう言ってる。お客さんも満足気だったよ。あと一時間もすれば目を覚ますだろうから、そのくらいになったら部屋へ行って」

それを伝えて作業用のデスクへと向かった。

集中して作業をしているうちに時間がたっていたみたいだ。

いつの間にか彼女は奥の部屋へ向かっており、目を覚ましたのである。老夫婦との会話が聞こえてくる。しばらくして開いた扉から三人が出てきて、笑顔の老夫婦から感謝を伝えられる。よっぽど幸せなものだったのだろう。奥様の目には薄らと涙が浮かんでいた。もう一度深々と頭を下げた老夫婦にこちらこそ、と礼を返す。

「改めて、すごく素敵なお力ですね」

扉を開けて待っていた玲がお見送りを済ませて戻ってくる。とそう言った。

「あの写真は病気を患っていた息子さんの最後の旅行のみみたいですね。どうしても病気で苦しんでしまっていた息子が頭から離れないでいたけど、今回のおかげで息子の笑顔を思い出せたと喜んでいましたよ」

「それはよかったです」

感謝や喜びの言葉を伝えられるのはいつだって嬉しいものだ。緩んだ口元を誤魔化すようにコーヒを啜った。

「あの、しばらくはここに置いてもらえるんですね」

おずおずと口を開いた玲に目を向ける。その顔には先程までの明るい笑みではなく、ことなく不安そうな表情が浮かんでいた。

「そのつもりだけど。今日の仕事に文句のひとつもないし」

慰めるつもりではなく、根っからの本心であった。

「恐縮です。誠さんの教え方が上手なおかげですよ」

へへっと笑みをこぼした彼女であったが、眉間のしわは残っており、何かまだ言いたげであった。

「それで何をそんなに言い躊躇ってるの」

僕には相手を思いやって上手に話を引き出すスキルはないみたいで、口から出ていたのはこんな直球な言葉だった。彼女は一瞬驚いたように息をつまらせたが、次の瞬間には真剣な面持ちになっていた。そして澄んだ黒目がこちらをじっと見つめたから、僕の背筋はすっと伸びた。

「家に泊めてください！」

「凜が家にいるはずだから」

ここまで新幹線でやって来ていた彼女には泊まる場所が無いみたいであった。それに彼女の姉である凜が家にいるから久しぶりに会えるのも喜ぶかな、と家に泊めるのを快諾した。ただどするべき作業は残っていたからそれを伝えて彼女を先に家へ送り出したのが二時間ほど前。一人になった写真館で

色んな作業を終えて帰宅した今の時刻は午後七時。まだまだ春と言えるこの時期は日が落ちると上着必須の寒さを感じる。それなのになにをしているんだろうこの子は。僕の目には家の玄関の前で体育座りで眠る彼女が映っていた。おい、と揺すった肩は冷えきっていて思わず手を引いた。え、と声が漏れると、彼女が頭をモゾモゾさせ始めてやがてゆっくりと顔を上げた。

「あ、おかえりなさい」

「こんなところで何やってるんだよ！」

半開きの眼でこちらを見あげた彼女についていられなかった。でもすぐにハツとして謝罪する。ごめん、と言った僕に彼女はいえ、私が悪いんです、とだけ言って俯いてしまった。

「とりあえず中に入ろう」

彼女がここで眠っていたことから、家に凜は居ないみたいだった。鍵を開けて中に入るとやっぱ人気はなくて、薄暗い。恐る恐る入ってきた彼女を振り返ってもう一度謝る。

「ごめん、僕の手違いで長時間外で待たせてしまったのに」

彼女の表情はもう暗いものではなくなっていた。

「こちらこそごめんなさい。叱ってくれたのは誠さんの優しさだと分かっているつもりですよ」

はにかむように笑った彼女を見て、ふと凜に似ている、と感じた。初めて感じたその裏に懐かしきもあったことに僕は気づかないふりをする。ルーティーンであればこのまま脱

衣所に向かって風呂に入るのだが、客人がいればそれは叶わない。凜がいれば違っていたかもしれないが。

「とりあえずリビングね」

そう言いながら進んだ廊下の奥にあるドアを開ける。その空気は妙に冷え込んでいられるように感じた。

「凜がね、毎日綺麗にしてくれるんだ」

つい、笑顔が漏れる。パチン、と電気を付けたリビングはいつも通りとても整頓させていて綺麗だった。本当にいつも通り。それなのになぜか心がざわつとしたのをまた僕は無視する。

「お邪魔、しまーす」

なんとなく気まずそうにごによごによ眩きながら彼女が歩みを進めるから僕は苦笑する。

「緊張しないでよ。姉の家でもあるんだよ」

というか、彼女は一度この家に来たことがあるはずだ。やはり間に凜がいないと普段通りという訳にはいかないのだろうか。ソファに座ることを薦めると、ぺこっと頭を下げてそこへ向かった。キッチンでコーヒーを二人分入れて、片方を彼女の目の前に置く。どうぞ、と声をかけて僕は立ったままずっとそれを啜る。冷たい体に染み渡るコーヒーは美味しい。

「お気遣いありがとうございます。でも、本当に思っていた以上に変わっていないですね。至る所から姉を感じてしまいます」

どこか含みを感じるそれを言った彼女の目には涙が浮かんでいてそれでも顔には痛々しい笑顔が貼り付けられていた。テーブルにコーヒーを置くのと同時に彼女の顔をのぞき込む。

「え、急にどうしたの？」

「誠さんばかりずるいんです。こんなに姉に溢れた生活を今も送っていて」

絞り出すような細かい声で彼女が言う。やはり、仲の良い姉となかなか会えない生活は堪えるのだろうか。どうしようもなくなつて、凜に早く帰つて来て欲しくて、凜とのトーク画面を開く。それに気づいた彼女が叫ぶ。

「私は！ その連絡先でさえ消してしまったというのに！」  
明るくて元気な彼女が落ち着きを失った所を初めて見た、気がする。大きな黒目からはポロポロと涙が溢れていて、綺麗な白い肌を伝っている。

「喧嘩でも、したの？」

仲の良い姉妹だとばかり思っていたが、連絡先を消すほどの大喧嘩をしたのだろうか。そう考えるが、心のざわめきは増すばかりであった。

「そんなわけないでしょ」

悲しみを通り越して呆れてしまったみたいに彼女が呟く。

「だったらなんで」

「お姉ちゃんは死んだの」

そう言つて泣き始める彼女。それを呆然と見つめることしか出来ない僕。頭の中で彼女の言葉を反芻する。その度に耳

鳴りは大きくなつていき、やがてプツンと音が無くなった。

そして流れ始めた記憶。二年以上前の冬の日。凜が突然実家に帰ると言った。同棲生活が始まって一年が経とうとしているタイミングだったから、愛想尽かされたのかと思つて焦つたのを覚えている。実際はそうじゃなくてなかなか会えない妹に会いに行く為であった。気をつけてと送り出したその日の夕方、TVニュースが報道していたのは彼女と出発と行先が同じ飛行機の墜落事故であった。慌てた僕は何度も彼女のスマホに連絡を入れる。しかし電話に出ることもメッセージに既読がつくこともなかった。くそつと叫んだ時に思いついたのは凜の実家に電話をかけることだった。はい、と電話に出たのは若い女の声で、つい凜！ と叫ぶ。返事がすぐにはなくて、いてもたっても居られなくなつてまくし立ててしまふ。

「凜、無事に実家についたよな？ 玲ちゃんには会えたか？ いやさ、今飛行機事故の報道があつて。凜が乗ってる訳ないつて思つてたけどなんか不安になつちやつて。でも良かった無事に実家に着いたみたいで」

「着いてない！」

この時、電話越しで聞いた玲ちゃんの叫び。そしてその後続いた言葉。

「お姉ちゃんは死んだの」

思い出した。いやでも昨日も僕は彼女のカレーを食べたのだ。……昨日も？ 違う一昨日もその前もずーっとカレーだ。

確かに凜の得意料理はカレーだが、こんなことってあるか？  
だんだんと心の中のモザイクが溶けていって、これ以上見るのが怖くて。それでも容赦なく彼女は現実を突きつける。

「あの写真、前に私が遊びに来た時の帰り際に撮った写真ですよね」

そうだ。あの日は彼女が家に遊びに来ていて、凜がカレーを作っていた。食べていけばという僕らに対して時間無いからと断り、キッチンで準備をしていた僕らをパシャリと一枚撮って満足げに帰っていったのだ。その時の写真はずっと廊下に飾っている。

「誠さん、まだお姉ちゃんの死を受け入れられてないんですよね」

落ち着きを取り戻しつつある彼女が鼻をすすりながら言う。

「そして、あの力を使ってお姉ちゃんとの過去に縋っている」  
はぁ、と深いため息が出る。現実を把握し、受け入れるのに時間がかかる。部屋に秒針の音だけが響く時間が続く。

ゆっくりと顔を上げた。そこには凜と全然違う顔。それなのに、そこはかたなく凜を感じて、涙が止まらなくなる。情けなくて、だけど伝う涙はどうしようも無くて、ただ上を向く。グイッと目元を拭って見回した部屋には凜お気に入りのインテリアが広がっている。それら全てにうっすらとホコリが積もっていることにこの瞬間気づいた。

深呼吸をして手を伸ばしたコーヒークップは冷えきっていた。  
た。

## play for peace

鹿児島修学館高等学校 三年

マツサン

耳障りなアラームに頭を叩かれるような不快感を伴いながら目が覚める。眠気を冷ますために電気をつけてみる。電灯の灯りは白く部屋を照らし、私物を雑に照らす。そうしていいよ立ち上がり、良い感じの洋服をダンスから物色する。しかし、play for peace という文字が堂々と書かれている白シャツしか半袖はなく、残りは全て長袖だった。「ダサイなあ」

後ろ髪をかきながら play for peace のシャツをながめた。東田は観念したようにそのシャツに首と腕を通した。着心地は意外と悪くなく、柔らかい匂いがほのかに香った。次にジーンパンを履こうと、先程物色したダンスから片手でズリリと取り出すとそれを履き替えた。

東田は映画館へと向かった。道中は蒸し暑く、家を出て数分で肌着は汗で濡れてしまっていた。映画館の前に行ってみると、そこにはスマホをいじっている見慣れた黒シャツがいた。

「よお。遅かったな」

「まだ三十分前だぞ。お前が早すぎるんだ」  
黒シャツはヘツと笑って東田に近寄った。

「二年ぶり、中学生のとき以来だな」

「そうだな。谷崎は今も昔も小さいままだな」

黒シャツこと谷崎は、東田の肩をグリツと掴んだ。

「痛い」

「痛くしてんだよ」

谷崎と東田は中学校時代の唯一の友達であった。

「まだ映画まで時間あるからゲーセンに寄って行かない？」

「いいぜ。そういえばこのゲーセンに行くのも二年ぶりだな」

映画館の隣にあるゲームセンターへと二人は足を運んだ。

ゲームセンターは以前とかなり変わっていた。新しい音ゲー

ーやレースゲームが設置されて、俺たちが親しんでいたレトロ

口のメダルゲームは消えてしまっていた。

「あの台消えてるじゃん。なんか寂しいな」

「前も俺たちしか遊んでいなかったしな」

谷崎はそういうと、レースゲームの席に座った。

「まあ、とりあえずやってみようぜ」

その後、東田と谷崎は新しいレースゲームや音ゲーで遊んだ。夢中になってしまったため映画に遅れ、オープニングを見逃してしまった。

二人が見たのは戦争についてのアニメーション映画だった。

舞台は第二次世界大戦中の日本。そこでの国民の暮らしをリアルに描いていた。谷崎は今度「平和」についてのコンテストで作文を書いたため、この映画を見に来たのだった。

「なかなか面白かったな」

映画館から出た後、谷崎が言った。

「それで、参考にはなったのか？」

東田がそう問いかけた。谷崎は渋い顔をして、悩んでいる様子を見せた。

「やっぱり変わらないことが平和につながるんじゃないか？戦争が始まると国民の生活は一変して酷くなっていたし……」

しばらく悩んだ後そう答えた。

「でも戦争になっても変わらないものはあるだろ。それに変わるものが重要な時もあるし。一概に変わらないことが平和とは言えないんじゃないか？」

東田がそう言うと言われたますます渋い顔になった。

「そんなこと言われたらますます分かんなくなっちゃうよ。」

「じゃあお前は平和が何か分かるのか？」

「もちろん分からないよ。そんなもんの答えが出てるなら戦争なんて無くなってる」

「チツ、他人事みたい……」

二人の間にしばらく沈黙が生まれた。しかし突然に谷崎が「あ！」という声を上げた。

「今の俺たちって平和だよな？」

「いきなりどうしたの。そりゃああこうやって一緒にいられる

うちは平和ってことじゃない？」

「何で平和なんだ？ 何で俺たちはずっと友達やってるんだ？」

「え？ それは中学校で唯一の友達だったから……」

「でも今はお互いに変わって一人じゃなくなったら？」

谷崎がそういうと東田は目を見開いて黙ってしまった。確かに谷崎と東田は高校生になり変わっていた。

東田は行きたい大学が見つかり、受験するために勉強を始めた。谷崎は東田より少し偏差値の低い高校へ行き、そこで良い成績を取ることが出来て自信がつくようになった。そしてお互いに違う友達も作っていた。

「変わってもお前はお前だろ。変わったとしてもそこを認めての友達だろ」

東田は頭から言葉を捻り出した。すると谷崎の顔がパアツと明るくなった。

「そうか、そうだよな。ちょっと良いアイディアが出た気がするわ。やっぱりお前と来て正解だった」

「何だよ、そのアイディアって」

「まだ秘密だ。お前がまた何か言って考えが変わるのも嫌だしな」

二人はその後すぐに別れた。

「あいつが言うアイディアって結局何だったんだ？」

疑問を呟き、考えながら東田は家に帰っていった。

谷崎がコンテストで最優秀賞を取ったと報告を受けたのはそれから三ヶ月後だった。未だに暑さが残っていたが、少し



涼しい風が吹くようになった時だった。

「よう、おめでどう。お前の作文読んだよ。多様性を認めることが平和に繋がるって内容だろ？ 現代の問題ともマッチして良かったよ」

「ありがと。まあ天才だから当たり前だがな！」

谷崎はフンと鼻を鳴らした。

「変わっていてもずっと友達でいるって言葉でさ、それをヒントに構成したんだ」

「…：今思うと臭いセリフだな」

東田は複雑そうな顔をした。

「いいじゃん。結構カッコよかったぞ」

谷崎は背中をバシッと叩いて笑った。

「で、いつツツコメば良いか悩んでいたんだが…：その格好は？」

東田はヒラヒラのスカートを指差した。谷崎はメイド服を着て女装をしていた。

「良いだろ、これ。結構可愛くないか？ 前々からずっとやってみたかったんだけどさ。親がどうしても止めるもんだからさ」

そう言うと谷崎はくるりと一回転してみせた。そのまま東田の目の前へと足を運んだ。

「お前ならこれでもまだ友達でいてくれるだろ？」

「まあ、そうかもな」

見慣れない光景に戸惑いつつも東田はそう答えた。

「良かった。お前ならそう言ってくれて思っていたぞ」  
谷崎は嬉しそうにそう言うとゲームセンターの方へ歩き出した。

「平和のために遊びに行こうぜ。俺たちがこうして認め合っている間は平和なんだから」

「ただ遊びたいだけだろ。最優秀賞とったからって浮かれすぎるなよ」

そう言って東田も谷崎の後を追った。また少し新しくなったゲームセンターで二人は遊び呆けたのだった。

## 巣立ち

立石富男

最後の講座を終えた時は毎回同じような感情が身に宿る。安堵感と達成感と一抹の寂しさ。安堵感はもちろん講座を無事に終えたことの証だし、達成感には講座生全員が作品を書き上げ、それら一つ一つに感想を伝えられたことの喜びである。寂しさはちよつと複雑だ。巣立っていく子を見送る親のような気持ち、もっと教えられたのではないかという講師としての反省、感傷と自責の念が縋い交ぜになって胸を妙に熱くする。それも充足した日々が根底にあるからだと思う。

書く行為は孤独なものである。講師がいくらアドバイスしても書くのは本人、講師の言葉をどう理解し実践していくのか、いろいろ悩みながら書き続けたに違いない。学業との両立や体調管理に苦しむ人もいたことだろう。そういう呻吟している姿を思い浮かべると、「みんな、よくやった！」と大声を発して労いたくなる。

二十二名の作品を改めて思い起こしている。いかにも高校生らしい素直な作品があったし、目を釘付けにされた良い表現や意表を突かれたユニークな題材もあった。可能性を感じた作品、今後を期待したい作品にも接した。大事なものはこの八回講座をやり遂げた思いを維持できるかどうかだ。巣立った雛鳥は自分一人だけの力で生きていく。夢を持って、可能性を信じて、大空高く飛んでいってほしいと心から願う。

## 言葉の力を信じて

出水沢藍子

この講座で、今年もさまざまなジャンルの小説が生まれ浸っていることでしょう。二十二名の受講生のみなさんは、書き上げた満足感に浸っていることでしょうか。

何を書くか、どのようなストーリーにしようか、登場人物の名前は、タイトルはと、次から次に出てくる課題を考えて一つひとつクリアしていく。楽しくも迷いの連続。果てしない作業の結果が作品になり、こうして一冊の本に収まり、多くの人に読み継がれていくのです。高校生作家の誕生！なんと素晴らしいことでしょう。

書くことは一人っきりの孤独な作業ですが、書いたものを発表し、仲間の声を聞くことによって新しい発見が生まれ、書き直し、物語が進展して深みが増す。この文芸ゼミナールの良さは、そこにあります。

作品を発表するまでは、ひたすら孤独に立ち向かい、ねじ伏せ、やがてそれを超えていく。その覚悟を持って初めて、より高い峰に登ることができるようです。

書き続けるためには、孤独のエキスパートになる。

孤独の海で戸惑い溺れそうになりながら、最後には言葉につかまって泳ぐことを覚える。そうして生まれた作品には大きな力が宿ります。言葉の力を信じて、書いていきましょ！二人の講師もまだまだ書き続けますよ！

# 講座の様子

## 開講式 (7/9)



## 講座





# 第7回特別講座 (12/17)



# 閉講式 (1/21)



## 【講座開催日】

回	月/日	曜	時間	回	月/日	曜	時間
1	7/9	日	12:30~16:30	5	10/22	日	12:30~16:30
2	8/6	日	12:30~16:30	6	11/12	日	12:30~16:30
3	8/27	日	12:30~16:30	7	12/17	日	10:00~16:00
4	9/17	日	12:30~16:30	8	1/21	日	12:30~16:30

## 編集後記

本年度は、本作品集『潮音く若人の樹』に、県内の高等学校十一校から、これまでで一番多い二十二人の受講生作品が収められました。平成二十六年度から始まった十冊目の海音寺潮五郎記念文芸ゼミナール受講生作品集の完成です。

講師の先生方に御指導をいただき、高校生は原稿執筆の基本から学びを深めました。本年度はオンラインでの受講もあり、活気あふれる講座となりました。

学業や部活動など、高校生活で忙しい中に、「初めての小説を書きあげたい」「自分の作品を誰かに見てもらうことで執筆の技術を磨きたい」等、様々な思いを持って受講生は参加しました。初めこそ受講生達の表情には硬さがありましたが、日曜日の午後に集う全八回の講座の中で、意見を交わし合い、作品を磨き合い、共通の目標へ向かう仲間になったりしたように思います。完成した作品は、まだまだ未熟ながらも、今の精いっぱい「自分」を詰め込んだものとなります。

本作品集を上梓できましたのは、ひとえに、立石先生、出水沢先生の熱意ある御指導の賜物です。この場を借りて感謝申し上げます。

令和五年度海音寺潮五郎記念  
文芸ゼミナール受講生作品集  
潮音 く若人の樹

令和六年三月

編集・発行  
鹿児島県立図書館